

328  
211



3

0045508-000

特207-695

新尋常小学修身教育書

堀之内恒夫・著

東洋図書

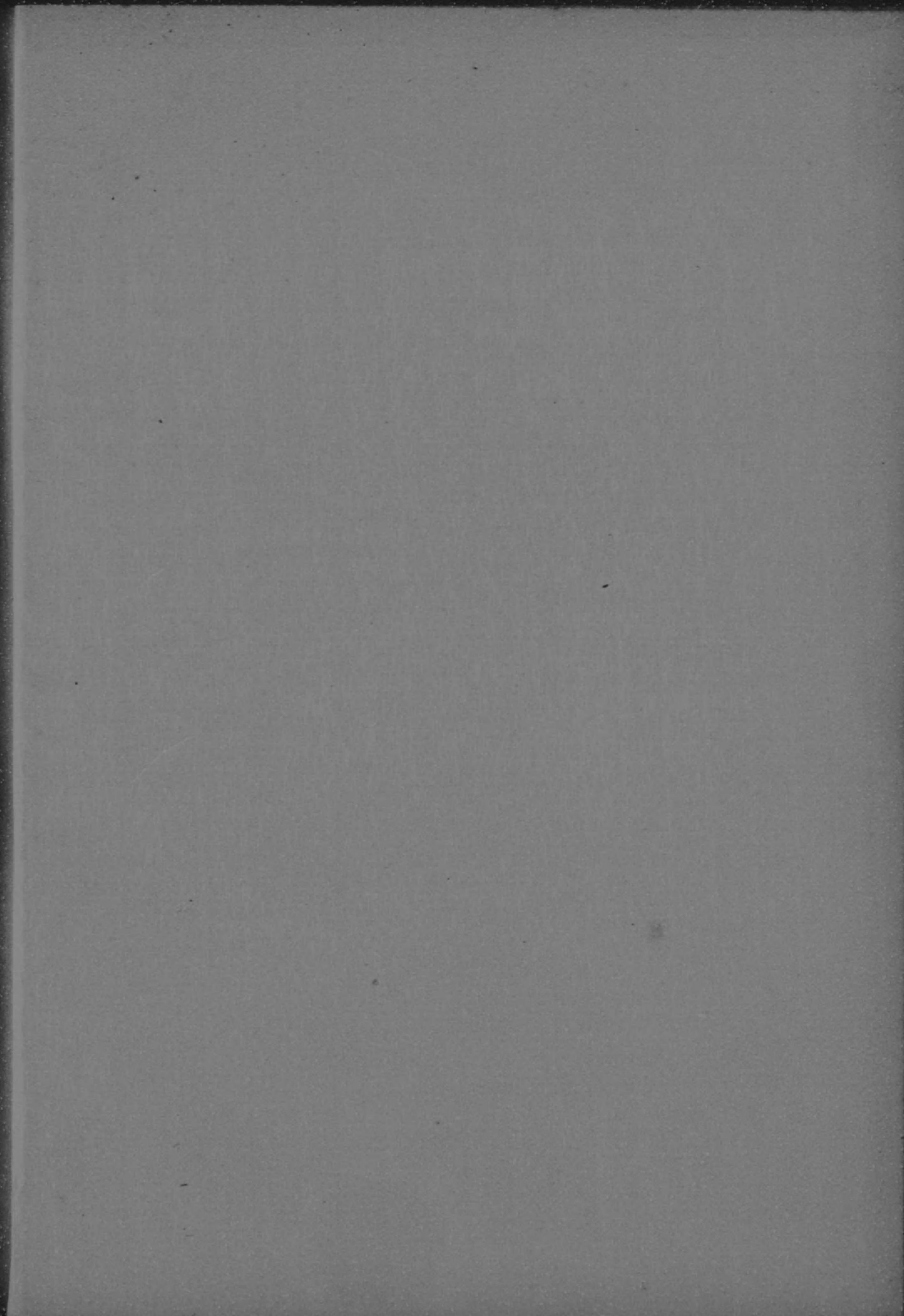
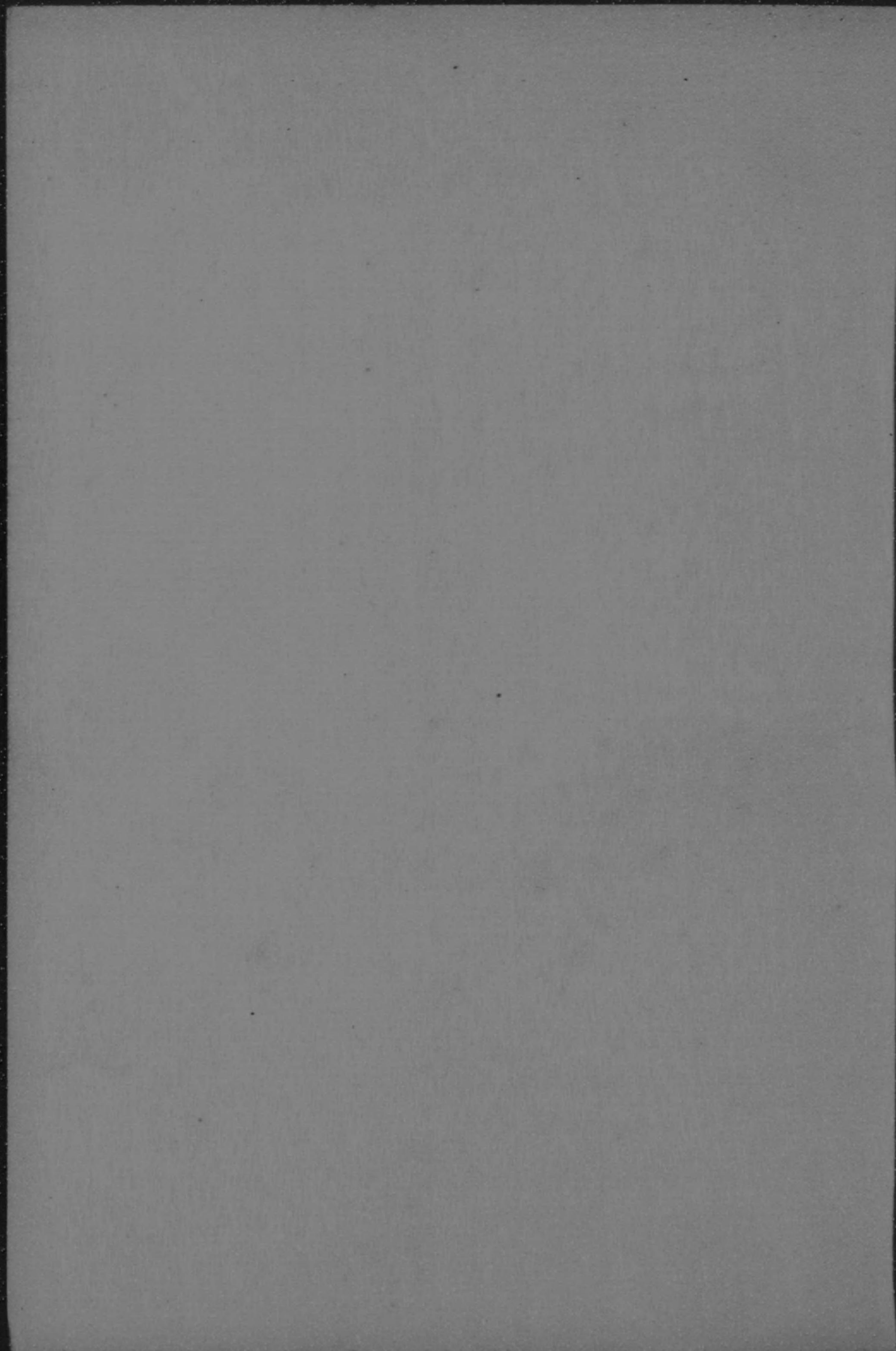
3年用

昭和5

AHF

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年5月15日  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです







特207  
695

堀之内恒夫著



新尋常  
小學

修身教育書 三年用



東京  
大阪  
東洋圖書株式會社發行



## 例言

- 一 修身の實地教育が教壇生活者にとつての大なる悩みであることは我々實際教育者の齊しく體驗する所で『この一時間をどうして過さうか』といふことにすら氣の揉める有様である。本書は淺薄なれども著者多年の經驗に立脚して尋常小學修身書の實地實際の取扱を説述し以て斯の道に悩む人にとつての參考にも資せんとして編んだものである。何かのお役にでも立ち得ればこの上もない幸である。
- 二 本書はその内容を**一目的及び教材觀**、**二教材系統**、**三指導要項**、**四指導計畫**、**五教材解説**、**六話要領**、**六參考資料**の六項に分節して説述することにした。
- 三 **目的及び教材觀**は、その課の主眼點を明らかにし、まさにその課の到達すべき目標點を明示すると共にその教材に對する見解を明確ならしめんとしたものである。
- 四 教材系統はその課の教材が過去に於て如何に取扱はれ又將來如何に發展し、如何に相關係するかを明らかにせんとしてあげたものである。
- 五 指導要項はその課に於て指導する教材の内容を分節して示したものであつて、之によつて先づ教師はその内容の一般をうかゞふことが出来ると思ふ。



六 指導計畫は参考のためその課指導方法の大様及び注意事項等を示したものでゆめにもその取扱方法の全部を指示したのではない。修身教育はその指導の細部に入つては指導者の個性経験等その人格によつて定まるべき部分が他の教科よりも遙かに大であることは著者の何人よりもより多く感じてゐる所である。指導の細部にまで立入つて指導を束縛するが如き無暴と僭越とは初めから避けることにした。

七 教材解説、説話要領は本書の主要部を占むるものでその教材の解説でもあり、又指導材料の詳説でもある。その課に於て説くべき材料を出来るだけ平易に且適切に、而も系統を立て、説述したものである。實際の取扱に於ては勿論此の材料が指導者の理會を通して兒童の理會にまで至るべきであつて、指導者はこの材料を自らの人格に同化し、個性に融合し更に兒童の經驗に適切ならしめ以て生命あるもの力あるものにしてほしい。

八 第六項は所謂参考資料でその課に於て、指導者にとつての参考に供すべき資料を掲げたものである。唯著者の遺憾此の上もなく感ずる事は、折角調査し、適當に著者に於て取捨選擇を加へた資料を、頁數の關係から可なり多量に亘つて削除割愛せねばならなかつた一事でこの點今以て諦め難い次第である。讀者之を諒せられよ。

九 本書を編むに當つてはその材料が實話教材であるだけに多數の文献を参考にし、且引用した材

料も可なりに多い。謹んで敬意を表したい。

十 最後に特に附言したいことは既に述べたる如く本書は國定修身書の實地取扱を説述したもので決して修身教育の全部を説いたものではない。然るに本書を修身教育書と命名したるは斯界の先輩によつて著はされたるこの種高著の書名を犯さざらんための微意に過ぎないといふ一事である。

昭和五年春

廣島南竹屋にて

著者識す



目次

教材配當一覽表……………一

第一 皇后陛下……………一七

第二 忠君愛國……………三六

第三 孝行……………六〇

第四 仕事にはげめ……………七九

第五 學問……………九二

第六 整頓……………一二三

第七 正直……………一二三

第八 師をうやまへ……………一三〇

第九 友だち……………一四一

第十 規則に従へ……………一四七

第十一 行儀……………一五六

第十二 勇氣……………一六五

第十三 堪忍……………一七七

第十四 物事にあわてるな……………一八六

第十五 皇大神宮……………一九六

第十六 祝日……………二〇七

第十七 儉約……………二一八

第十八 慈善……………二二三

第十九 恩を忘れるな……………二四六

第二十 寛大……………二五八

第二十一 健康……………二七一

第二十二 自分の物と人の物……………二八二

第二十三 共同……………二九一

第二十四 近所の人……………三〇一

第二十五 公益……………三二三

第二十六 生き物をあはれめ……………三三七

第二十七 よい日本人……………三五五



附錄

目次

六

- 一 尋常小學修身書內容一覽表……………三四一
- 二 高等小學修身書內容一覽表……………三四五
- 三 國定小學修身書德目系統表……………三四八

目次終

新  
尋常  
小學  
修身  
教育  
書  
三年  
用



教材配當一覽表  
第一學期  
教材配當一覽表

週	題目	指導要項	教材系統
一	第一 皇后陛下 凡そ三時	1 皇后陛下 2 皇后陛下御略 歴 3 皇后陛下御幼 少の頃 イ 規律正しく ましたこと ロ 御學問	尋一、天皇陛下 尋二、天皇陛下 尋四、明治天皇 高二、歴代天皇 の御盛徳
二		4 皇后陛下の御 仁慈 イ 生徒の身の 上をいたはら せ給ふ ロ 農夫の身の 上をいたはら せ給ふ	
三	第二 忠君愛國 凡そ三時	甲 谷村計介の例 話 1 西南の役起 る 2 熊本城籠城 計介大任を 引受く 3 計介の人と 爲り イ 父の病 愈々加はる ハ 金次郎の孝 養 4 金次郎の孝 養(三)	尋一、忠義 尋二、忠義 尋四、靖國神社
四		イ 父の病死 ロ 母の決心 ハ 金次郎母の 心を安んず ニ 金次郎の勤 勞 乙 訓辭と格言 1 金次郎の例話 考察 2 訓辭と格言	

週	題目	指導要項	教材系統
一		1 皇后陛下 2 皇后陛下御略 歴 3 皇后陛下御幼 少の頃 イ 規律正しく ましたこと ロ 御學問	尋一、天皇陛下 尋二、天皇陛下 尋四、明治天皇 高二、歴代天皇 の御盛徳
二		4 皇后陛下の御 仁慈 イ 生徒の身の 上をいたはら せ給ふ ロ 農夫の身の 上をいたはら せ給ふ	
三	第二 忠君愛國 凡そ三時	甲 谷村計介の例 話 1 西南の役起 る 2 熊本城籠城 計介大任を 引受く 3 計介の人と 爲り イ 父の病 愈々加はる ハ 金次郎の孝 養 4 金次郎の孝 養(三)	尋一、忠義 尋二、忠義 尋四、靖國神社
四		イ 父の病死 ロ 母の決心 ハ 金次郎母の 心を安んず ニ 金次郎の勤 勞 乙 訓辭と格言 1 金次郎の例話 考察 2 訓辭と格言	
五	第三 孝行 凡そ三時	甲 二宮金次郎の 例話 1 二宮金次郎の 略傳 イ 金次郎の生 立 ロ 金次郎の家 柄 ハ 金次郎の勤 儉力行 金次郎の孝行 (二) イ 二宮家の災 難	尋一、親の恩 親を大切に せよ 親の云ひつ けを守れ 尋二、孝行 尋四、孝行
(五月)			



週	六	週	七
題目	第四 仕事には けめ 凡そ三時	題目	第五 學問 凡そ三時
指導要項	3 實生活の指導 甲 金次郎の例話 1 金次郎堤防工 事に働く共 同事業の勤勉 イ 酒匂川の犯 濫 ロ 金次郎堤防 工事に精を出 す ハ 金次郎鞋を 作つてその勞 を謝す ニ 不休不息よ く働く 2 金次郎家業に 精を出す家 業の勤勉 乙 訓辭 1 金次郎の例話 考察	2 仕事にはけむべ き事 甲 金次郎の例話 1 金次郎幼時の 勉學 イ 金次郎の勉 學 ロ キ印の金 ハ グルリ一遍 ニ 彼の勉強 2 伯父の家に於 ける勉強 イ 引續く一家 の不幸 ロ 金次郎の勉 學 ハ 伯父の態度 ニ 金次郎の志 愈堅し ホ 金次郎ひそ かに本を読む へ 學問の向上 進歩	指導要項
教材系統	尋一、なまける 尋四、仕事には げめ 尋五、勤勞	教材系統	尋一、よく學び よく遊べ 尋二、勉強せよ 尋四、勉強 尋五、勉學 高一、勉學 高二、修學

週	九	週	一〇
題目	第六 整頓 凡そ二時	題目	第七 正直 凡そ二時
指導要項	甲 本居宣長の例 話 1 本居宣長の人 と爲り イ 本居宣長の 誕生 ロ 本居宣長の 勉強 ハ 宣長の學問 ニ 古事記傳 ホ 宣長の功績 とその光榮 2 本居宣長の整 頓 イ 宣長の整頓	指導要項	甲 正直なる丁稚 の例話 1 或人その子 を丁稚奉公に出 す 2 反物に疵ある を示す 3 主人の立腹と 解雇 4 丁稚の出世と 主人の没落 乙 正直に對する 心得 1 虚言をいはぬ こと 2 過失をかくさ ぬこと
教材系統	尋一、始末をよ くせよ 尋四、規律 尋五、主婦の務 高一、規律 (女生用)	教材系統	尋一、うそをい ふな 尋二、正直 尋四、忠實 尋五、誠實 尋六、良廉心 高一、至直誠 高二、徳器 恭儉



教材配當一覽表

週	二	週	一三 (七月)	週	一四
題目	第八 師をうや まへ 凡そ三時	題目	凡そ二時	題目	第十 規則に従 へ 凡そ二時
指導要項	甲 上杉鷹山の例 1 上杉鷹山の人 と爲り 2 鷹山その師を 敬ふ イ 鷹山平洲に 教を受く ロ 平洲を米澤 に招く ハ 鷹山の出迎 ニ 平洲に師の 禮を以てす 乙 師弟の道 1 上杉鷹山の例 話考察 2 師弟の道 行逢の作法 丙	指導要項	2 信吉解雇さる 3 友藏の友情も 空し 4 友藏の新機械 發明 5 友藏の友情 6 主人の感激 乙 朋友に對する 道 1 例話の考察 2 朋友の道	指導要項	甲 春日局の例話 1 春日局の人と 爲り イ 局の生立と 江戸下り ロ 竹千代の養 育 ハ 家光の信任
教材系統	尋六、師弟 高二、習業	教材系統	尋二、友だちに 親切であれ 尋五、朋友 高二、朋友	教材系統	尋一、行儀をよ くせよ 尋二、不作法な ことをする 尋四、禮儀 尋五、禮儀 高一、禮儀 高二、恭儉

教材配當一覽表

週	一五	週	一三	週	一四
題目	第十一	題目	行儀 凡そ二時	題目	第十 規則に従 へ 凡そ二時
指導要項	甲 松平好房の例 1 好房の人と爲 り 乙 凡て規則は 守るべきこと 1 局の例話考察 2 凡て規則には 従ふべきこと 3 兒童の實生活 指導	指導要項	2 好房行儀を正 しくす イ 父母のいま す方に足を伸 ばさず ロ 他へ外出の 場合 ハ 外出から歸 つた場合 ニ 父母より物 を賜はりし場 合 ホ 談父母のこ とに及びし場 合 乙 行儀について の心得 1 父母に對する 行儀 2 他人に對する 行儀 3 獨りをつし むこと	指導要項	2 好房行儀を正 しくす イ 父母のいま す方に足を伸 ばさず ロ 他へ外出の 場合 ハ 外出から歸 つた場合 ニ 父母より物 を賜はりし場 合 ホ 談父母のこ とに及びし場 合 乙 行儀について の心得 1 父母に對する 行儀 2 他人に對する 行儀 3 獨りをつし むこと
教材系統	尋六、憲法 高一、公正 高二、國憲國法	教材系統	尋一、行儀をよ くせよ 尋二、不作法な ことをする 尋四、禮儀 尋五、禮儀 高一、禮儀 高二、恭儉	教材系統	尋一、行儀をよ くせよ 尋二、規則に従 へ 尋四、法令を重 んぜよ



週	一六	週	二
題目		題目	
指導要項	4 行儀に對する 其の他の注意 丙 坐せる姿勢の 實習	指導要項	3 訓戒
教材系統		教材系統	教材系統
備考			
<p>1 本學期は約三十四時間位を豫定し得るも修身書取扱の豫定時数は約二十八時間を配當した、その餘の時間には偶發事項の取扱なり、又復習をなすなり、其他更に各課の精説なりに利用されんことを望む。</p> <p>2 各課に配當した時数は全く豫定の時数であつて取扱の都合によりては或は増し、或は減じて適切の方法に出でられんことを希望す。</p> <p>3 尙復習については豫定中に特設せざるも適宜之を行はれたし。</p>			

第二學期

週	一	週	二
題目	第十二 勇氣 凡そ三時	題目	
指導要項	甲 木村重成の例話 1 木村重成の生立 2 木村重成の武勇 イ 大阪冬陣 ロ 今福の戦	指導要項	ハ 鳴野戦と重成 ニ 重成の奮戦 3 重成の沈勇 イ 講和成立 ロ 血判状受取
教材系統	尋一、元氣よくあれ 尋四、克己 尋五、勇氣	教材系統	尋六、沈勇 高一、勇氣 高二、義勇奉公

週	三	週	四
題目	第十三 堪忍 凡そ二時	題目	第十四 物事にあはてるな 凡そ二時
指導要項	甲 木村重成の例話 1 重成の勇氣に對する復習 2 重成掃除坊主に罵倒さる 3 重成の堪忍 4 衆人の嘲笑 5 重成の眞勇 乙 堪忍に對する訓辭 1 重成の例話考察 2 格言取扱	指導要項	甲 毛利吉就夫人の例話 1 毛利吉就夫人略傳 2 吉就夫人の沈勇 イ 火災起る ロ 家人狼狽 ハ 夫人沈着 ニ 遂に火災を免かる 乙 物事にあわてぬこと 1 例話考察 2 非常時の心得 3 平素の心得 4 不時呼集に就て
教材系統	尋二、辛抱強くあれ 尋四、克己 尋五、忍耐	教材系統	尋六、沈勇



週	題目	指導要項	教材系統
五	第十五 皇大神宮 凡そ三時	1 既有觀念の整理 2 御祭神 3 皇室の尊崇と主なる祭典 4 國民の覺悟と心得 5 神域及社殿	尋六、皇大神宮 高二、建國
六	第十六 祝日 凡そ三時	1 祝日 2 天長節 3 新年 4 紀元節 5 明治節 6 國民の心得	尋四、祝日、大祭日
七	第十七		
八	節約 凡そ三時	1 徳川光圀の略傳 2 徳川光圀の生立 3 尊王心と大日本史 4 光圀の節約と日常 5 光圀の衣服 6 食膳 7 居室 8 女中に紙漉場を見させる 9 光圀、殊の外紙を大切にす 10 女中等に紙漉場を見させる	尋一、物を粗末にするな 尋五、節約 高一、質素 高二、恭儉
九			

週	題目	指導要項	教材系統
一〇	第十八 慈善 凡そ三時	甲 今右衛門一家の例話 1 天明の大飢饉 2 鶴岡町民の慈善 3 今右衛門一家の慈善 イ 今右衛門の慈善 ロ 其の妻の慈善 乙 家臣を戒しめた言葉 4 光圀は各齋でなかつた 5 節約の必要 1 光圀の例話考察 2 節約の必要 3 節約の心得 4 節約と貯蓄 5 節約と各齋	尋一、おもひやり 尋二、人の難儀をすくへ 尋四、博愛
一一	第十九 恩を忘れるな 凡そ三時	甲 佐吉の例話 1 佐吉の人と爲り イ 佐吉の生立 ロ 佐吉の正直 ハ 佐吉の孝行 ニ 佐吉の善行 乙 其の娘の慈善 1 慈善に對する訓辭 2 例話の考察 3 慈善の必要(格言取扱) 4 特に公事のための不具癡疾者に對する心得 5 慈善の心得 6 慈善と節約	尋二、恩を忘れるな 尋五、謝恩 高一、同情 高二、博愛



週	題目	指導要項	教材系統
一一	第二十二 寛大 凡そ三時	甲 貝原益軒の例話 1 貝原益軒の人と偽り イ 益軒の生立 ロ 益軒の學問 ハ 益軒の著述 ニ 益軒旅行を好む ホ 益軒の徳行 2 益軒の寛大 イ 若者牡丹を折る ロ 謝罪 ハ 益軒寛大 乙 人は寛大なるべきこと 1 益軒の例話考 察 2 人の過を許せ 怒に乗じて非道な仕向をなすな 3	尋二、人の過を許せ 尋五、度量 高一、寛容
一二	第二十一 健康 凡そ二時	ホ 領主の表彰 2 佐吉恩を忘れず イ 佐吉の奉公 ロ 佐吉の勉強 ハ 佐吉の解雇 ニ 佐吉恩を忘れず ホ 佐吉の報恩 乙 恩に對する訓辭 1 佐吉の例話考察 2 恩を忘れぬこと イ 恩 ロ 恩を忘れぬこと 3 報恩	尋一、たべものよきをつけよ 尋二、からだを丈夫にせよ 尋四、身體 尋五、衛生 高一、身體
一三			

週	題目	指導要項	教材系統
一五	第二十一 健康 凡そ二時	甲 貝原益軒の例話 1 貝原益軒の養生 2 益軒の大事業とその健康 乙 身體の健康に對する訓辭 1 益軒の例話考察 2 健康の必要 3 薬より養生 4 公衆衛生について	尋一、たべものよきをつけよ 尋二、からだを丈夫にせよ 尋四、身體 尋五、衛生 高一、身體
備考	<p>1 本學期は約十六週、三十二時間を豫定し得るも、修身教材取扱の豫定時数は二十八時間を配當したり、その餘の時間は偶發事項の取扱なり、復習なり、その他、各課教材の精説なり適當に利用せられんことを望む。</p> <p>2 各課に配當したる時間は全く豫定時數にして教材取扱の都合により適宜増減あつて然るべし</p> <p>3 復習の時間を豫定中に特設せざりしも適當に復習もなされんことを希望す。</p>		

第三學期



教材配當一覽表

週	題目	指導要項	教材系統
一	第二十二 自分の物 と人の物 凡そ二時	甲 馬子の例話 馬子大金を發見す 馬子正直に之を返す 乙 飛脚の歡喜と謝禮 自分の物と人の物 丙 例話考察 自分の物に對する心得 丁 人の物に對する心得	尋一、自分の物と人の物 高一、公正
二	第二十三 共同 凡そ三時	甲 毛利元就の例話 毛利元就の人と爲り 乙 元就三子に教ふ 丙 元就に三子あり 丁 元就三子に教ふ	
三		ハ 三子教を守り家運繁昌す 乙 共同に對する訓辭 丙 元就の例話考察 丁 共同の必要 共同して仕事をなす上の心がけ 共同の善用	尋六、共同 高一、共同
四	第二十四 近所の人 凡そ三時	甲 佐太郎の例話 佐太郎の人と爲り 乙 佐太郎の生立と勤勉 丙 佐太郎の孝養 丁 佐太郎近隣の人を助く	尋一、近所の人

週	題目	指導要項	教材系統
五		イ 村の人の屋根を繕ふ ロ 火災に罹つた人を救ふ ハ 村の人に親切にす 乙 近所の人に對する道 丙 佐太郎の例話考察 丁 近隣の人に對する道	
六	第二十五 公益 凡そ三時	甲 佐太郎の例話 前課復習 乙 佐太郎家業に勵む 丙 佐太郎の公益 丁 人の夢畑に土をかく ロ 人の田の用水を世話す	尋一、人に迷惑をかけるな 尋四、公益 尋五、公益 尋六、公益
七		ハ 組頭となりて村のため働く 乙 佐太郎の名譽 公益の大切なこと 丙 佐太郎の例話考察 丁 人に迷惑をかけるやう心がけること 傳染病に對する注意 進んで人のため世のためになること	高二、公益世務 (二)
八	第二十六 生き物を	甲 孫兵衛の例話をいたはる	尋一、生き物を苦しめるな

教材配當一覽表



週	題目	指導要項	教材系統
	あはれめ 凡そ二時	2 その妻も亦その馬をよくいたはる	尋四、生き物をあはれめ
		乙 生き物を憐むこと	高一、同情
		1 孫兵衛の例話考察	
		2 生き物をいぢめぬこと	
		3 生き物をあはれむこと	
九	第二十七 よい日本人 凡そ五時	1 皇室國家に對する道	
		2 家庭に對する道	
		3 社會に對する道	
		4 個人に對する道	
一〇			

**備考**

1 本學期は約十一週、二十二時間を豫定し得るも、各課教材取扱の豫定時数は十八時を配當したり。その餘の時間は、偶發事項の取扱なり、復習なり乃至は各課の精説なりに利用せられんことを望む。

2 以下前學期と同様。

## 第一 皇后陛下

### 一 目的及び教材觀

本課の目的とする所は修身書教師用書にも指示してある通り、「皇后陛下の御事を知らしめて、御徳の高きを仰がしむる」事である。君國一體、君民一家の麗しい國體をなしてゐる我が大日本帝國に於ては、皇室は實に一國の主權の存する所であり、且、畏れ多き事乍ら大和民族てふ一大家族の宗家であらせられ、而して天皇陛下はその主權であらせられ、その族長にまします。されば、天皇陛下の御事について知らしめ、且その御徳の高きを仰がしむると共に、その御后に渡らせ給ふ、皇后陛下の御事を知らしめ、その御徳を仰がしむるといふことは、國民教育の上から最も大切なことであるといふことは誰しも無條件的に首肯する所であらう。天皇陛下の御事については、尋常一、二年と説いて來たのであるが本課に至つて、皇后陛下の御事について説かんとするものである。

而して、皇后陛下は所謂國母陛下として、一國の主權 天皇陛下の御后にわたらせ給ふといふ上から、皇后陛下の御事を説く事が國民教育上大切であると共に又、さうした、御地位をはなれて考へても、我が國民の女性として實に麗はしくも又貴き典型にまします。この見地から見ても、我が國母陛下の御徳を慕仰し奉るといふことは修身教育上此の上もない大切なこと、いはねばならぬ。



## 二 教材系統

尋一、天皇陛下。尋二、天皇陛下。尋三、皇大神宮。尋四、明治天皇。尋六、皇大神宮。高二、歷代天皇の御盛徳

## 三 指導要項

- 1 皇后陛下
- 2 皇后陛下御略歴
- 3 皇后陛下の御幼少の頃
  - イ 規律正しくしましたこと
  - ロ 御學問
- 4 皇后陛下の御仁慈
  - イ 生徒の身の上をいたはらせ給ふ
  - ロ 農夫の身の上をいたはらせ給ふ
  - ハ 震災の時着物を下し給ふ
- 5 皇后陛下の御孝心
  - イ 大正天皇御不例中の御孝心
  - ロ 故久邇宮邦彦王殿下への御孝心

6 國民の覺悟

## 四 指導計畫

- 1 本課取扱の要點は、1、皇后陛下は如何なる御方でましますかといふことを説き、2、その御徳の高きを説き其の高き御徳を景仰せしむるといふ二ヶ條に存するのであるから、この點に留意して説くべきである。
- 2 説話はどこまでも、敬虔な態度と、謹嚴な言語とを以てし、苟も、軽々しい態度や言葉遣は嚴に戒めねばならぬ。
- 3 『皇族畫報』等によつて、皇后陛下の御肖像を用意し、その氣品に富ませ給ふ、けだかき御尊容を拜し奉らしむることは大切なことである。

## 五 教材解説・説話要領

### 1 皇后陛下

皇后陛下とは、如何なる御方でありませうか。それは申すまでもなく、我が、今上天皇陛下の御后にあたらせ給ふ尊い御方であります。申すもかしこきことながら、天皇陛下を國の御父君と仰ぎ奉れば、皇后陛下は實に國の御母君にあたらせ給ふ御方であります。されば、我が國に於ては、皇后陛下の御事を國母陛下とも申上げ奉ることがあるわけであります。

我が國民が、皇后陛下として仰ぎ奉る御方は如何なる御方にてましますか。次にその御人と爲り、御徳の高くまし



ますことを述べて見ませう。

## 2 皇后陛下御略歴

1 御誕生 皇后陛下は、明治三十六年三月六日の朝あけに御誕生に相なりました。御父君は故久邇宮邦彦王殿下で御母君は俱子妃殿下にて在し、その第一王女として御誕生になつたのであります。當時御父君久邇宮邦彦王殿下には陸軍歩兵少佐として近衛師團第三聯隊に御勤務になつてゐられました。久邇宮家は、東京麻布東鳥居坂町にあつて、當時こゝにお住ひになつてお出になつたので、皇后陛下は實に、こゝに於て御誕生遊ばしたのであります。久邇宮家は鳥居坂の坂の下口に黒く塗つた御門と、それに添つて黒塀をもつて取囲み、外観から見ても、宮家の御殿としては畏多い程に御質素にしましたと申します。

宮家に於ては、朝融王・邦久王と續いて若宮様ばかり御誕生になつた後のことゝて、姫宮様が御誕生になつたと申して宮家をあけて非常な御喜びであつたと申します。

かくて三月十二日「良子」と御命名に相成り、それから良子女王殿下と申上げ奉つたのであります。御幼少の御頃はまるくとお肥えになつてまるで御人形のやうに御可愛くあらせ給ふたと申すことであります。そしてどの方を御覧になつても、にこくと御微笑を遊ばすので、御勤務からお歸宅になつた父宮殿下も、軍服のまゝ御抱上げになることも度々あつて御鐘愛深くあらせ給ふたと申す事でございます。然し翌年にはかの明治三十七八年戦役のことあり御父宮殿下は滿州の野に鉾とつて向はせ給ひ、かくて二ケ年間に近い間は宮家にも淋しい日が續いたのであります。然し、御母君殿下にはその間一入とその御養育に力を盡させ給ふたので、いよく健かに生立たせ給ひ、明治三十八年十二月御父君殿下が第一軍司令部と共に萬歳聲裡に御凱旋遊ばした時には早や、御三歳に渡らせ給ふたのでありま

す。そして陛下を中心として宮家は愈々幸福と御よろこびの中にあらせられました。

口 御入学 かくて皇后陛下には明治四十二年に數へ年御七歳にお達しになりました。そこで、當時麹町區永田町にあつた學習院女學部初等科第一學年に御入学になりました。そして大正四年三月六ケ年の初等科を目出度く御卒業になり更に四月にはその中等科第一學年に御進級になりました。

ハ 東宮妃御内定 かくて陛下には引續き中等科に入らせ給ふて御勉學遊ばされましたが、大正七年一月十七日に東宮妃殿下として御内定相成りました。そこでこの年の二月四日には學習院を御退學に相成り、御邸内に、別に學問所を置かせられ、こゝにて東宮妃殿下としての、特別の御教育を受けさせ給ふたのであります。

ニ 御成婚式 かくして大正十一年六月二十日御結婚の御勅許があり、國をあけての喜悅の日、御成婚式の御日取りは大正十二年十一月二十七日頃と略御内定あせられましたため、國民は齊しく、この目出度き日をお待ち申上げたのであります。その年の九月一日、突如として襲ひました、彼の大震災火災のため、畏くも當時攝政の宮にておはしました、今上天皇陛下の、有難き御思召しにより一時延期の御沙汰を下し置かれ、越えて、大正十三年一月二十六日目出度き御慶事が挙げられたのであります。

一、今日しも舉げますかしこき御典

喜びことほぐ我等の聲は

野山をうごかしみそらに満ちて

世界のはてまで響きぞわたる

祝へ祝へ今日のおよき日

二、國民こぞりて仰ぎまつる

千代田の大宮御榮増して

御國のいしすえ萬代かたく

我等が幸こそきはまりなけれ

祝へ祝へ今日のおよき日



と、國民は聲高らかに歌つてこの日出度き日を祝し奉つたのであります。

ホ 皇后御宣下 大正十五年の秋から御不例に渡らせ給ふた大正天皇には、天皇陛下、皇后陛下、皇太后陛下の御手厚き御看護、國民のこめた御祈願もその甲斐なく遂にこの年十二月二十五日、御崩御ましまし、今上天皇陛下御踐祚あらせられ給ふと共に、皇后御宣下あらせられて今日に至る次第であります。

### 3 御幼少の頃の皇后陛下

1 規律正しくしましたこと 明治四十二年の春、皇后陛下がはじめて學習院女學部初等科第一學年に御入學遊ばした時には、御父宮殿下には歐洲へ御留學のお留守中でありました。續いて御母宮殿下も亦獨逸へ御滞在中の宮殿下の許へお旅立になりました。そのお留守中に皇后陛下は數へ年七歳にお成り遊ばして前の如くに學習院へ御入學になつたのであります。そして、侍女の岸本しげ子がお伴を申上げて御通學になりました。

やがて御兩親宮殿下も打揃つて海外から御歸朝になり宮邸が至極手狭なので麴町區一番町の濠端に添つた宮内大臣官邸跡にお手入をされ、翌年こゝに御移轉遊ばされました。櫻の木が多いこの宮邸から赤坂見附上の學校までは十町ばかりの距離なのに御健康な陛下にはいつも侍女をお伴にお徒歩で御通學になりました。さうして日曜日などには電車の線路傳ひに兄宮達と日比谷公園邊りを御散歩になることも度々あつたと申します。

陛下は御幼少の頃から、鳥居坂下にお出の時には、亦麴町に御移轉になつてからも、誠にきまりよくあらせられました。御手許品を納めさせ給へる御戸棚は必ず御親ら御整頓になつて、決して人手をおかりになるやうなことはなかつた。お幼少の折など、玩具などもよく御自ら御整頓になり、又學習院御入學の御時代には、教科書や練習帳なども御自らちゃんと御始末にられました。

そして、その上、物を大變大事にお取扱ひになつて決して粗末な扱方などは遊ばされませんでした。御幼少の折にも他から玩具など御献上申しても必ず之を大切に御保存になり決してお粗末になさるやうな事はありませんでした。又教科書の類から練習帳、その他の學用品も大變大切に御使用になり、その他、御召物の類などもいと注意深く整理保存せさせられ、決して侍女を煩はし給ふやうな御事はありませんでした。

□ 御學問 學習院御在學中からすでに衆に抜きん出て御立派な御成績でましましたと申します。そして、日々に大變な御進境になりました。そして大正七年一月十六日、東宮妃御内定と共に二月四日學習院女學部を御退學になり邸内に御學問所をお建てになつて、こゝで特別の教育をお受けになつたのであります。學問所は木造の二階建てで、階下は御居間で、階上がその御學問の部屋にあてられてありました。即ち階上は十疊の間一つと、襖を隔て、八疊、六疊二間になつてゐました。十疊の間には床もあり、又違棚の設もあつて全くの日本間でありました。この十疊の間に机を置き、黒板を備へてこゝが御學問の御部屋に當てられました。修身書兒童用の挿畫はこの十疊の部屋に於て陛下が御勉強遊ばす模様を描いたものであります。

御教育の主任として、後閑野菊野女史が選ばれました。修身を杉浦重剛、修身、國語、禮法、家政を後閑野菊野、漢文、作文を竹田道子、地理、歴史を依田豊、數學、理科を鈴木美、佛語を見玉錦平、本野清子、ジュークモレル、音楽を神戸絢子、山本浪子、和歌を大口鋼二、阪正臣、習字を小野綱之助、繪畫を高取熊夫、體操、薙刀を土取信子、國體講話、人文講話を大島義修、點茶を松浦益子等について御熱心に御研學あらせられました。又臨時としては瀧精一に美術史を、三宅光治に陸軍軍事學、藤田尙徳に海軍軍事學を、芳賀矢一に國文學を、窪田精太郎に社會事業を、その他時々著名な者又は實際家を召してそれら専門の御進講を受けさせられたのであります。



そして御學友には學習院時代、御同級の姫たちの中から特に學藝操行共に優れた佐藤達次郎博士令嬢貞子、平山成信氏令嬢信子が特に選ばれ、この二人を學友として熱心、この學問所に於て、以上の諸氏について御勉學にならせ給ふたのであります。

かくて大正十三年まで約六ヶ年の間かうして御勉強をせさせ給ふたのであります。この六ヶ年間の勉強も誠に御規律正しく、時間割通りに少しも御違へになるやうなことはなかつたと申します。そして學問の時間には熱心に御勉強になりました。しかも御勉強中は端然と姿勢を正し、かつて一度も御様子がかくづれたことはなかつたと申します。それで教育に御たづさはり申した者は何れも、「よくも六年間、あれ程までに端然と姿勢をおとりになつたことである」と申した程でありました。そして又、休憩の時間になると、テニスなどを遊ばしてよく御運動になつたといふことであります。それが一度も、この規律をお破りになつたこともなく定めの日課を嚴格にお守り遊ばされたといふことであります。

この間も亦御父母宮殿下には御優しく事へさせ給ひ、又御兄弟宮殿下方とはいとも御睦まじく過させ給ふたといふことであります。

ハ 皇后陛下の御日常 皇后陛下にはいと御多忙に渡らせ給ひますが、御幼少の頃からの規律正しい御生活は尙今に至るも決してくづし給はず、誠に嚴格な正しい生活を遊ばされると申します。御起床になるのは必ず天皇陛下より三十分御早く必ず午前六時には御目覺めになり、御化粧室にて御洗面の上、お髪をお直しになり、御召替の上、天皇陛下の御起床をお待ち遊ばされます。

天皇陛下が御起床になると、お揃ひで、まづ御拜の間に入らせられ、伊勢の大神宮、明治天皇、昭憲皇太后、大正天皇の御廟御陵を御遙拜あり、つゞいて皇太后陛下のまします方を御拜し給ひ、終つて朝食につかせ給ふとの事であります。その後皇后陛下には、外國大公使夫人等の謁見願出たる者には親しく御引見になり、火、水、木、金の午前中には學者の御進講を受けさせられ、尙、御暇の折は、御編物、繪畫の御習得、ピアノの彈奏又時には天皇陛下と共に、テニスを競ひ給ふこともあるとのことであります。尙、又、御畑の御手入には心をくだかせられ、野菜その他手づから御栽培あそばされとの御事でございます。夜は必ず、その日の日記を御認めになる。お休みも、必ず天皇陛下が御褥に入らせ給ふてから後で、御調髪と御含嗽の後、御寢室に入らせられるのであります。

かくも、御高貴の御身分にて御規則正しく、且つ、なるべく人手をからぬ御生活を遊ばすといふことは、國民としては恐多い限りであるが、その御ためにや、御玉體はいよく御健康に渡らせ給ふことは國民の最も力強くも亦有難い限りと申さねばなりません。

#### 4 皇后陛下の御仁慈

皇后陛下には、かくも、規律正しく、萬事につけて、御細心に御取さばいてお出になります。又、大變、御情深く申しますことは、又國民として此の上もない有難い次第であります。いまその二三の例を申上げます。

イ 生徒の身の上を思はせ給ふ 陛下が未だ、久邇宮家におはし、頃、或夏のこと、地方に御旅行になつたことがありました。地方では澤山な學校の生徒達が炎天の下に整列して御出迎を申上げました。所がこの有様を御覽になつた陛下には「この炎天にさぞ暑いことであらうこの暑い夏の眞盛りにこんなにしてまで自分を迎へてくれることは誠に氣の毒である」と云つて、出迎してゐる生徒達の身の上をいたはらせ給ふたといふことであります。その有難い心情の程、拜察して國民はたゞその有難さに感泣する外ない次第であります。



□ 農夫の身の上をいたはらせ給ふ 尙又、陛下が學習院初等科の第六學年に御在學中（大正三年御年十二歳）夏の休に京都へお出遊ばされた事がありました。その時の日誌の一節に次の如きものがあります。

『八月三日、金曜日 雨』

今日は朝より雨たび／＼降りていとすゞしく、松の縁はしたたるばかりになり、しをれたりし草木も潑刺の元氣を復しぬ。この雨に農夫達はいかによろこびしことならん。今日は六時五十二分の汽車にて横濱に行き京都に行くなればいとうれしくその支度をなせり。午後は母上のお手傳ひして荷物を作りまた母上の遊ばせる編物も少しなしたり。夕食を早くすませて支度をなし皆に別を告げ汽車に乗りて横濱に向へり途中唱歌を歌ひなどしてすすうちに早や横濱に着きし故三十分程休憩して八時十二分の汽車に乗りて京都に向へり。つかれてすぐ就寝せり』

灼熱の夏に雨を得て喜ぶ農夫のさまを直ちに腦裡に描き出し遊ばされたのは、憐愍の情のお深いことを物語るもので、それがまだ御年僅かに十二歳の時のことでございます。

ハ 關東大震災の折着物を下し給ふ この御仁慈のお心はいつも折につけ事につけて現はされました。かの大正十二年九月一日關東地方に起りました大震災の際にも大變に人民を憐ませ給ふた事は人の記憶に新な事でございます。當時、陛下には東宮妃として御勅許にはなつてゐましたがまだ御成婚式はおあけにはなつてゐなかつたのであります。それですからまだ良子女王殿下と申上げ奉つた頃でありました。

丁度その御時には陛下は新潟縣の赤倉温泉に御避暑に御出かけになつていらつしやいました。九月一日東京地方の大震災大火災の趣を聞召しになり非常にお驚きになりました。そして尙罹災者の身の上を非常に御同情になりまして、早速、衣服の材料を御取寄せになり、侍女等を日夜お勵しになり、更に御身自らもお針をお取り遊ばされて、哀れな

罹災者のために着物をお整へになりました。それが又、誠に行届いた御用意で男物五十人分、女物五十人分、それに子供用五十人分までお取揃へになりました。そして出来上りました衣類は早速、新潟縣知事を経て罹災者に御下賜になりました。

かくて間もなく東京に御歸還に相成りましたが、其の後も御學問の御ひま／＼には侍女を相手に澤山の衣類を御調製になりました各地の罹災者にお頒ちになりました。誠に御仁慈の程、何とも言葉も無い次第ではありませんか。

何しろ、この時の大地震は大變な騒ぎで、東京、神奈川、千葉、埼玉、静岡、山梨及茨城の一府六縣にも及び全焼家屋、三十八萬一千九十戸、その他、倒潰、流失等、相當程度の損害以上を受けた世帯数は實に六十八萬四千六百五十九といふのであるから大變なことが分りませう。死者總數九萬三千三百四十四名、行衛不明一萬五千五百六十名で、重傷者だけでも一萬六千五百十四名といふ多數に上りました。

陛下は是等傷病者を收容した赤十字病院、水道橋に設けた臨時産院、米國寄附の病院、乳兒院などに成らせられて親しく御慰問になりました。尙、焼け出された多數の罹災者救援のために急造したマツチ箱のやうなトタン葺のパラツクを御覽になつて『さぞ寒からん』などと御優しき御言葉を漏らさせ給ふたなど、人々をあはれませ給ひ、その御仁慈の御美徳の數々は述べ盡すことも出来ない程でございます。

當時の御詠歌に

あたたかにふせるも苦しふすまなきかりやの人を思出づれば

といふのがあります、陛下の御心情の程を拜察し奉つて有難い限りであります。

##### 5 皇后陛下の御孝心



皇后陛下は天皇陛下と共に又大變御孝心に富ませ給ふ。その御孝心の程はいつも、その御日常に現はれて誠に畏き極みであります。今、大正天皇の御不例中の御模様を記し奉れば次の通りであります。

1 大正天皇御不例中の御孝心 大正天皇が、容易ならざる御惱にわたらせ給ふことが突如として宮内省から發表されたのは、實に大正九年三月三十日のことでありました。その後、御病状は一進一退の有様で、漸次御輕快に向はせられました。大正十四年二月御風氣にて、御高熱を發せられました。然し、間もなく御輕快に向はせ給ふたのであります。そして、この年の五月十日には銀婚の大典さへ舉げ給ふたのであります。所が、この年十二月十九日沼津——御保養のため——行幸の前々日、腦貧血様の御發作あり、遂に沼津行幸は御取止めになり、かくて大正十五年五月八日、半ヶ年振りにて御床上げの發表が宮内省よりありました。所がその後三日即ち五月十一日に、又もや腦貧血様の御發作ありしが、漸次御快方にて、この年（大正十五年）八月十日龍顔ことに麗はしく、新築の原宿驛から御發車、葉山御用邸西附屬邸に御轉地遊ばされました。この日原宿への御齒簿を奉送した市民は、龍顔、殊の外、御麗しきを拜し、御回春の日近きをお待ち申上げたのであります。今にして思へば天皇には、之が帝都への御最後にしましたことは何といつても悲しき限りであります。

葉山御轉地以來はずつと御順調に渡らせられました所、九月十一日突如として、三度目の腦貧血様の御發作にて御發熱、入澤侍醫頭以下一意拜診の結果、一時小康を得られましたが、十月末から御風氣の御模様にて、氣管支カタルを御併發、十月末から十一月にかけては相當に御悪く拜されたのであります。かくて宮内省は、十一月二日に至り、内科の泰斗稲田龍吉博士を宮内省御用掛として任命、侍醫頭以下詰切つて御診療申上げたのであります。この間皇太后陛下を御はじめ、天皇、皇后兩陛下、其の他各皇族方の御手厚い御看護も、全國民の國をあけての御平癒御祈願

も、遂にその甲斐なく、此の年（大正十五年）十二月二十五日午前一時二十五分、葉山御用邸に神去りましたことも、何と申しても悲しみの限りであります。

この間、皇后陛下の御孝心の程は、天皇陛下のそれと共に、誠に至れり、盡せりの御有様でありました。大正天皇が葉山御用邸にて御病状が順調にあらせられずとの報を御受けになつた皇后陛下は、數回に亘つて東京から葉山に御病状御見舞になられました。そして御枕頭に親しく御出になつて何かと親切に御看護になりました。かくて大正天皇の御病状重らせ給ふや、その御憂慮の程は非常なもので、愈十二月十三日より、東京へは御歸還遊ばされず、天皇陛下と共に葉山御用邸に引續き御とゞまりになり、天皇の御看護に當らせ給ひました。

この間至れり盡せりの御看護の程は全く涙ぐましい程でありました。毎日々々、御宿泊の新御用邸から、御參殿になるは勿論、御參殿御看護中、少しでも御病状が麗しくないと御察しになると、御歸還の豫定時間をやつと御延しになつたことは度々でありました。又御參殿の豫定外でも、少し御容體が御變りになつたとの御通知があると、急ぎ御參殿に相成り御枕頭に御出ましになつて御看護になりました。或時には、又こんなこともありました。午前九時三十分には天皇陛下御揃ひで御參殿、御晝食も新御用邸にては召されず、引續き午後五時二十分まで御看病になり、やつと御還幸に相成りました。そして御夕食を召され給ふや、午後八時半、再び御出門、御參殿になり、午後十時三十五分やつと御歸還に相成りました。

又徹宵御看護に相成ることもありました。或時の如きは前夜徹宵御看護に相成り、午前七時といふに早くも御出門、新御用邸に御歸還に相成り、天皇陛下及高松宮殿下と御三方御揃ひで御互に御看護御慰勞の御挨拶があつたが、御歸邸になつて未だ御休憩の間もあらせられず、天皇陛下と御同列に御參殿に相成り直に御病室に御通りになり、御



手厚い御看護を遊ばされました。

かうした、有難いことは数限りありませんが、このような御手厚い御看護もその甲斐なく遂に大正天皇は御崩御に相成りました。天皇陛下をはじめ、皇后陛下の御悲しみは一入お深くあらせられました。かくて御大葬まで御靈柩に對する御禮拜を缺き給ふたことはなかつたとのことであります。誠にその御深き御孝心の程拜察して、何とも申す言葉もない次第であります。

□ 故久邇宮邦彦王殿下への御孝心 皇后陛下には又、御父宮故久邇宮邦彦王殿下に對しても、いと御孝心深くましまし、殿下薨去の際の如き、聞くもいたましい程の御看護を遊ばされました。

久邇宮邦彦王殿下には昭和四年一月、熱海御別邸に御滞在になりましたが、突然御發病に相成り、一月二十三日午後一時には俄に御重體に陥らせ給ひました。主治醫、入澤、稻田兩博士、御拜診申上げ、俱子妃殿下をはじめ奉り、御親戚の御手厚い御看護に病氣は一進一退の模様には拜せられましたが二十七日拂曉御容體御急變遊ばされました。

そこで皇后陛下には御豫定を繰上げさせ給ひ、同日午前十時三十五分、熱海驛御着とともに野中なる宮家御別邸に入らせられ、全く御危篤の状態に陥らせ給ふまで至らざるなき御看護につとのさせられました。その御模様は次の通りであります。

御看護の御母宮殿下には前夜來、非常なお待ち兼ねにてあらせられました。午前十時四十二分には御別邸に御着あそばされ、御出迎への宮家奉仕者等に御懇ろなる御會釋を賜りつゝ、御歩み御靜かに寒椿赤く開く植込の繁みの中を御伏目勝ちに進ませられたる御姿を拜し奉つた舊奉仕者、侍女等の中には感極つて啜り泣くものさへあつた。陛下には階下八疊の御休憩所にて先づ御母宮殿下と親しく御對眼、しばし御言葉もなく御對座遊ばされました。やがて陛下

には、御母宮殿下と若宮、朝融王殿下アヲアキヲの御案内にて階上の御病室に御足音ものびやかに進ませられました。この時、先に立たれた御母宮殿下が襖を開けさせられるや、御病臥中の御父宮殿下にはふと御目を開かせられ襖の方を御見やりになられ、そこに立たせ給へる陛下の御姿を御認めになられ微かに御喜びの色を漏らさせられたと承ります。この時、御病床に侍せる、吉本、稻田兩博士は靜かに座を立ち、御病室には純白のシーツに横はり給へる御父宮殿下の外には、皇后陛下と妃殿下、朝融王殿下と生みの御親子御四方のみ残らせ給ひ、皇后陛下にはいたく御衰弱加はらせ給ふ御父宮殿下の御枕邊近く寄せら給ひ、いとも懇ろに御見舞申上げられ、御恢復の一日も速かならん事を力強く御念じ遊ばされました。殿下には御衰弱にもかゝらず微かに御喜悅と御安意の御様子に拜されました、かくて待ちに待ち給へる皇后陛下の御見舞を心から御喜びの模様にて、御喜色も幾分よろしきやに拜せられました。やがて正午近く御容體は刻々險惡の模様には拜され、皇后陛下には御悲しみの中にも沈着の御態度にて御看護に盡させられ、天皇陛下より御下賜の葡萄酒を御惱みの御父君殿下の御口許に進めさせられるなど、常時奉仕の人々も餘りの御痛しさに思はず落涙する有様であつたと申します。この御手厚い御看護も甲斐なく御父君殿下はその日午後零時二十九分薨去になりました。皇后陛下の御悲しみは非常なもので、午後の三時半御還啓の途に就かせ給へる陛下の御姿を拜した者は誰一人として面を上げる者はなかつたと申します。

## 6 國民の覺悟

私達は、尋常一年の時と二年の時とに天皇陛下の御事について學びました。天皇陛下は我が國をお治めになる、尊い御方で大變情深い方でありました。かの東京の大震災の時には、攝政宮殿下として日本の政治をお執り遊ばしてゐましたが、罹災者の身の上を、大變御同情になり九月十五日、及十八日の兩日には朝早く御出門になつて罹災民た



ちの模様を御視察になり、食物が不足して罹災民達は玄米を食べて居るとの話を聞召して、「それでは予も玄米を食べよう」とまで仰せ給ひました、それから、昭和二年八月豊後水道の海軍大演習を御親裁の序を以て鹿兒島縣奄美大島に御立寄りの時絶海の離島のこと、て住民が醫療の不足に苦しんでゐる模様を聞召し、侍醫をして、是等病人の診療を仰出されました。その他天皇陛下の御情深いお話の数々はとても述べつくすことも出来ません。又大變、御孝心に富ませ給ひ、御幼少の頃から、御父君大正天皇、御母君皇太后陛下にやさしく御事へになり、御参内の折には必ず農園に立たせられて自ら御野菜を選んで御持参になりました。又かの大正天皇の葉山に於ける御不例中の御看護の御有様は何とも有難き極みでありました。

私達はかゝる有難き天皇陛下を上仰ぎ奉ると共に又、今まで述べました、御情深く、且御孝心に富ませ給ふ皇后陛下を戴き奉るといふことは何と有難い事でありませう。私達がかうした有難い國に生れ、有難い御方の上に戴いてゐることを深く心に留め、その御高恩の萬分の一でも報ひ奉る覺悟がなければなりません。

## 六 参 考 資 料

### イ 皇 室

天皇陛下 御名裕仁、大正天皇第一皇男子にましまし明治三十四年四月二十九日御誕生、同年五月五日御命名<sup>ヒコノミヤ</sup>と稱し奉る。明治四十一年四月十一日學習院初等科に御入学、大正元年九月九日陸軍歩兵少尉、海軍少尉に御任官大勳位に叙せらる。同三年四月學習院初等科御卒業爾來新設の東宮御學問所にて御修學、同三年十月卅一日陸海軍中尉に御陞任、同五年十月三十一日陸海軍大尉に御陞任、同五年十一月三日立太子式御舉行、同八年五月七日御成年式御舉行、同九年十月三十一日陸海軍少佐に御陞任、同十年二月二

十八日東宮御學問所御終業、同十年三月三日御外遊の途に上られ同年九月三日御歸朝、同十年十一月二十五日攝政御就任、同十二年十月三十一日陸海軍中佐に御陞任、同十三年一月二十六日御成婚、同十四年十月三十一日陸海軍大佐に御陞任、同十五年十二月二十五日御踐祚、入皇第百二十四代の帝位を踐まれ昭和と改元、昭和元年十二月二十八日宮城において朝見の御儀を舉げらる。同三年十一月十日即位禮御舉行。

皇后陛下 御名良子、故久通宮邦彦王第一玉女子にましまし明治三十六年三月六日御誕生、同年三月十二日御命名、同四十二年四月十一日學習院女學部初等科御入学、大正四年四月同部中等科に御進級、大正七年一月十七日東宮妃册立の御沙汰あり仍て同年二月四日女學部御退學、同年四月十三日より宮邸内に新に設けられた御學問所にて御修學、同十一年六月廿日御婚約御勅許、同年九月二十八日御納采勳一等に叙せらる。同十三年一月廿六日御入與皇太子妃宣下、大正十五年十二月二十五日皇后宣下あらせらる。

皇太后陛下 御名節子故從一位大勳位公爵九條道孝第四女子にましまし明治十七年六月二十五日御誕生、同二十三年九月華族女學校小學部に御入学、同二十九年九月同校中學部に御進級、同三十二年七月御卒業、同三十三年五月十日御入與皇太子妃宣下、同四十五年七月三十日皇后宣下あらせらる、大正十五年十二月二十五日皇太后とならせらる、目下青山東御所に御住居遊ばさる。

成子内親王 御稱號照宮今上天皇陛下第一皇女子にまします、御誕生大正十四年十二月六日

和子内親王 御稱號孝宮今上天皇陛下第三皇女子にまします、御誕生昭和三年九月三十日

崇仁親王 御稱號澄宮、大正天皇第四皇男子にまします、御誕生大正四年十二月二日、大正十一年四月八日學習院初等科御入学

昭和三年三月御卒業、同中等科に進ませらる、目下青山御所内澄宮御殿に御住居あらせらる。

附記 皇室とは天皇陛下の御一族全部即ち一般皇族をも御呼び申すべきなれども、之を狹義の意味において右の御方々のみを本欄に記し奉れり。(朝日年鑑ニヨル)

故久宮祐子内親王殿下の御事 今上天皇陛下第二皇女にまします。御誕生昭和二年九月十日、殿下には昭和三年三月一日御不例



の御發表が宮内省より發せられ、齊く國民は御憂慮申上げし所遂に三月八日午前三時三十八分薨去遊ばさる。

ハ 皇后陛下の御仁慈 皇后陛下には年末に際して、病床に臥せる食しき人々へ温い衣類を賜つた事が際々ある。昭和二年十二月二十一日、日本赤十字社入院患者百四十三名―木綿綿拾地に裏地及び裁縫料を添へて―恩賜財團濟生會病院入院患者百六十餘名―同上―東京慈惠會病院入院患者百十五名―同上―福田會育兒院收容孤兒男兒七十八名女兒六十二人―同上―尙又、昭和三年の年末に際しては全國の赤十字社病院收容中の施療患者三百餘名、同濟生會病院施療患者五百三十五名、東京慈惠會病院施療患者三十六名及福田會育兒院男女孤兒百九名に對して、木綿堅綿の拾地に裏地と裁縫料を添へて御下賜の有難き御沙汰があり、尙又昭和四年末に際しても同様有難き御沙汰を賜つた。

昭和三年三月八日、久宮祐子内親王殿下薨去に際しては、同殿下御追福の特別の思召により育兒保護資金として金五萬圓を慶福會へ御下賜の旨三月十四日仰出された。之について宮内省白根庶務課長は次の如く語つてゐる。

『皇后陛下には育兒に特別の大御心を注がせ給ひ御二方宮様を―當時未だ孝宮内親王は御誕生あらせられず―御手づから御養育になられた程であるが、今回久宮様御病氣に當らせられても涙ぐましいばかりの御看護を遊ばされた。今度久宮様薨去について金五萬圓を御下賜になられたことは全く陛下の大御心に出でさせられたことと拜される。この御下賜金は久宮様の御喪儀に際し、つとめて御簡素に遊ばされ、その御費用の残りを割いて御下賜になつたものと拜聞し有難き陛下の大御心に我々一同は深く感激してゐる所でかくて、御下賜金を拜受した恩賜財團慶福會に於ては、役員會を開き慎重審議の結果永遠に故殿下を御記念申上げるため、御下賜金を基金とする特別會計故久宮祐子内親王殿下記念兒童保護資金を設定し兒童保護に關する私設社會事業に補助することとした。』

昭和三年五月、支那動亂に際し、居留民保護のために我が國も支那濟南へ出兵をした。所が我が兵及在留民の中には傷病者を多數出したが皇后陛下にはこの趣を聞召され、深く御心を痛めさせ給ひ、御慰問の思召しから、これ等傷病者に繙帯を御下賜あらせられた。この繙帯は長くも皇后陛下御親ら竹屋、山岡、津輕らの各女官をはじめ多數の侍女を御督勵あらせられたものであつたと申す。

あげ来れば皇后陛下の御仁慈の程は數限りもなく、誠に有難き極みである。

## 二 皇后陛下の御趣味

皇后陛下は又極めて廣い御趣味に富ませ給ふ。今幼少の時代からの御歌の一部を記し奉れば次の通りである

### 女王殿下御時代

まこと

いかはかり身はひくとも眞心をたもたん人そたふとかりける

若葉

枯草のひまにおひたる初若葉つみてさよけん神の御前に

伊勢大神に詣て

いひしらす清き五十鈴の河原風こよろの奥にしみわたりけり

### 東宮妃殿下時代

山色連天

初日の出をろかみをへてかへりみるそらにつゞけり不盡の高嶺は

河水清

水底のさゝれのかすもよむはかり河のなかれのきよくもあるかな

### 皇后陛下として

山色新

雲の上にそひゆる富士のあらたなるすかたや御代の姿なるらん



## 第二 忠君愛國

### 一 目的及び教材観

忠君といへば君に忠なることであり、愛國といへば國を愛するといふことである。されば忠君といひ、愛國といふはそこに自ら異つた對象があつて、決して同一の概念ではないやうにも聞える。然し、我が國に於ては忠君といひ愛國といひ、その内容に於ては全く同一である、即ち、君に忠なることが即ち國を愛することであり、國を愛するといふことは即ち君に忠なる所以である、是我が國は、君國一體の麗しい國體をなし、君と國とは全くその内容を一にするからである、君の大事は國の大事である、國家の問題は君の問題であるからである。

而して我が國はその建國の歴史に基いて皇室を常に最高の中心としてあらゆる生活形式が形づくられて來た。されば君に對する道德は我が國一切道德の最高のものである。即ち忠は一切道德の根幹を成すものである。この意味に於て眞に忠ならんとせばあらゆる道德の實踐者であらねばならぬ。然し、國家には時に非常の大事難局の到來することがある。かゝる場合には一身一家を忘れてこの大事難局に當るべきである。本課は修身書にある通り『君國の大事には生死を顧みずして之に當るべきことを教ふる』のがその目的である。

### 二 教材系統

尋一、忠義。尋二、忠義。尋四、靖國神社、皇室を尊ぶべ。尋五、忠義。尋六、忠孝。高一、忠君愛國。高二、義勇奉公。

### 三 指導要項

#### 甲 谷村計介の例話

- 1 西南の役起る
- 2 熊本城籠城
- 3 計介大任を引受く
- 4 計介の人と爲り
- 5 計介の辛苦
- 6 計介大任を果す
- 7 計介の最後

#### 乙 忠君愛國に對する訓辭

- 1 計介の例話考察
- 2 訓辭

### 四 指導計畫



- 1 指導の方法は多様にあつて決して確定した一つの方法が存するわけではないが、本課はその内容及教材の性質から見て、「今日は谷村計介のお話をしませう」といふやうに先づ例話から入るがよからうと思ふ、しかつめらしい徳目を出さないでも、この例話をほんとうに取扱ひ得れば先づ本課の教授は大成功と見てよい。そして、計介の生活に對する批判を試み之をきつかけに、兒童自らについて忠君愛國を訓辭して本課を終るやうにすればよい。
- 2 谷村計介の例話を説くに當つて特に意を用ふべき事項をあけて見ると、
  - イ 籠城内の辛苦を十分に描出すること。
  - ロ 征討軍營に城内の模様を報告する役目の極めて重責にして且難事なること。
  - ハ 川上聯隊長心得が計介にこの大任を命じたことの理由。
  - ニ 計介が再三之を辭退した意中。
  - ホ 計介の決心と、その大任を果すまでの強き心、堅き意志。
  - ヘ 飽くまで誠忠一貫忠君愛國の精神を以て終始したこと、等である。
- 3 計介の行動を單にその形から見、全體から切はなして見ると、「虚を云ふな」とか、「正直」とかいふこと、矛盾するやうにも見えるけれども、それは、一切生活の内面的統一と一點といふものによつて解釋すべきで、單なる虚言でないこと、即ち悪意の虚言でないといふことは取扱ふ教師に於てしつかりと腹の中に收めてゐなくてはならぬ兒童に之を殊更取出して論議する必要はあるまいが、然し兒童の方から問題になればやむを得ないとしても。
- 4 説話には略圖を描いて之によつて説いて行くことが子供にもよく話が理解されてよろしい——略圖は參考資料中にか、けあり——

5 賊軍とか賊將隆盛が、など、いふ語は成る丈け避けるやうにしたい。明治天皇が明治二十二年二月一日憲法發布の際その勳功を賞し特に賊名をはがせ給ふた御趣旨を奉體して。

## 五 教材解説・説話要領

### 1 西南の役起る

西郷隆盛といへば明治の元勳であり、名の賣れた大人物であるから、三尺の童子も尙知らないものはない位である。明治の御維新に際して隆盛の立てた偉功はかくれもないことで、殊更申立てる程のこともあるまい。かの岩倉具視、大久保利通、木戸孝允等と結んで倒幕を企て、遂に大政奉還の氣運を速成し、尙維新前後各所に起つた争亂を鎮め特に、江戸東征に於ては勝安芳と謀つて偉功を立てたことはよく知る所である。所が明治維新の大業も漸く成り、我が國は外國との和親を計らんことを企てその方針を定め、先づ朝鮮に使を遣はして好を修めんことをすゝめた所、朝鮮はどうした考違であつたか、我が國の好意をしりぞけ且屢々禮を失するの行爲があつたので遂に議論沸騰し、こゝに征韓論が起つた。隆盛は征韓論の争先鋒であつたが衆議之を容れず遂に官を辭して郷里鹿兒島に歸つてしまつた。そして私立學校を起して若い青年子弟を集めて文武の道を講じ、中にも桐野利秋、篠原國幹の如きは隆盛を援けて心をこめてその指導の任に盡した、其の中に、名望を慕つて來り學ぶ者が非常に多く、これ等少壯の徒は、政府のなす所に少からず不平をいただき、遂に西郷隆盛を押立て、兵を起した。かくて明治十年二月十五日隆盛は是等の兵を率ゐて自分の意見を時の政府に訴へんとして鹿兒島の地を發した。兵數凡そ一萬六千。こゝに所謂西南の役はその端を發することになつた。



## 2 熊本籠城

當時熊本には鎮臺が置かれてあつた。今の師團の如きものである。時の司令長官は陸軍少將谷干城タニケンであつて、兵數三千五百十五名、谷少將は參謀長樺山中佐——後の海軍大將伯爵樺山資紀、この籠城中二月二十二日の激戦にて重傷を負へり——等と相謀り或は砲壘を築き或は胸牆を設け、或は火雷を布きなどして熊本城にたてこもり血氣にはやる薩南の健兒を喰ひ止めようとした。

薩軍は二月二十二日熊本城下に到着し、直ぐさま熊本城を取圍んだ上、前面と背面との二方から一齊に攻撃を加へた。然し城兵堅く守つて中々城は抜けない。そこで薩軍は城外にある花崗山と段山とを占領しこゝに大砲を据付けて城内に向つてはけしい砲撃を加へたがそれでも城兵はこゝを先途と死守し容易に下らない。そこで二十三日の夜に、薩軍は暗夜に乗じて坪井川を渡り勢すまじく城の東南角に向つて突撃して來た、城兵はこゝに非常な惡戦苦闘をつゞけたが辛うじてこゝを死守することを得た。この二十二三日の両日に亘る激戦に格別の効を見なかつた薩軍はこゝに長圍の計を立て、兵糧攻めの策をとり要所々に兵を配置して單なる小競合を繰返すに過ぎなかつた。

是より先、二月十五日薩軍東上の報を聞召めされた明治天皇は征討總督に有栖川宮熾仁親王アリスノミヤヒロノミヤを任じ給ひ、二十日には征討軍を率ゐて東京を發し、二十六日福岡に到着し給ふた。かくて征討軍は着々と南下を急いだが途中中原坂附近に於て薩軍に喰止められてどうすることも出来なかつた。そのため、征討軍營は高瀬に置かれそれより南へは一步も進められない有様であつた。

然るに是等官軍の援兵との連絡を失つてゐる熊本の城兵は危期刻々に迫り、糧食彈藥共に日に日に心細くなるばかりである。特に困つた事には薩軍が熊本に到着する三日前、即ち二月十九日どうした失策をしたものか城内から火を發し折角清正の手に成つた天下の名城熊本城の天主閣は焼落ちてしまつた、そのため、城内に貯へてあつた米五百石は一粒も残らぬやうに焼けてしまつた、城内では谷少將をはじめとして時が時とて非常に之を憂へ、薩軍の到らぬ前にと、二十、二十一の兩日は死もの狂ひで近郷近在に兵を走らせ、やつとの事で米六百石を買集めることが出來た、六百石といへば確に大した米には違ひなからうが三千五百人の大世帯ではさうさう有餘る程の米でもない。糧食は日一日と減つて行く、彈藥は一戦毎に残り少なくなつて行く、それに援兵との連絡は全く絶えて、いつ薩軍の圍が解けるか見當がつかぬ。城内に於ては谷少將をはじめとして幹部の苦辛焦慮の程誠に氣の毒な有様であつた。

## 3 計介大任を引受く

そこで城内當面の最大急務はどうしても一刻も早く城内の急を援軍に通知し、内外相呼應して薩軍を討ち、その圍を破るより外に道はない。それなければ城内の官軍は薩軍に白旗を立て、降参するか、さもなければ最後の戦を潔くして城を枕にして一同討死するか、乃至は糧食の盡くるを待つて城内に餓死するか、この三つより外に道はない。然し、オメノと薩軍に下るは不忠此の上もなく、帝國軍人の本望でないこと、に申すまでもなく、三千五百十五人の軍人中一人としてこのやうな弱虫はゐない。又、時の到るを待つて餓死するのも軍人の本懐でない、萬策盡きなば城を枕に討死するは覺悟の上乍ら、何とかして薩軍をこゝで喰止める方法を達成せねばならぬ。それにはどうして城内の急を援軍に通知するより外に良策はない。然し、それは實に難事中の最難事である。今は薩軍のために十重二十重の重圍の中にある、この圍を突破して援軍の陣營まで達することは容易なことではない。もとより生還を期するわけではない。皆決死の勇士揃ひで、御國のために死するは覺悟の前乍ら生きてこの任を果すことは何と云つても容易なことではない。



然し、今は萬策盡き、この方法を執行するより外には道はない、谷少將は兒玉參謀にこの事を計つた。——後の陸軍大將伯爵兒玉源太郎——樺山參謀長は前記の如く戦端を開くと早々重傷を負ふてその任に堪へず、治療中であつた。——今、援軍は高瀬にあつて、途中、田原坂、植木方面に於て薩軍のために喰止められ、南下することが出来ない。高瀬までは可なりな距離があつて、この間には薩軍が各所に幾十組、といつて屯してゐて、その難所をのがれその圍を破つて高瀬まで達してこの重き使命を果すといふことはとても人間業では出来さうにもない。

兒玉參謀は第十三聯隊長心得陸軍少佐川上操六——後の陸軍大將子爵川上操六、第十三聯隊長は與倉中佐であつたが二十二日片山屋敷附近の激戦に於て重傷し後絶命したので川上少佐が聯隊長心得として之にかはつた。——にその人選方を依頼した。川上少佐は色々考へた末、遂にこの大任は、第一隊長奥少佐——後の奥元帥——の率ゐる第二中隊、谷村伍長に命じようと思つた。之が二月二十五日の夜のことである。二十二日の未明に火蓋を切つた兩軍の激戦は實にはけしいもので多くの死傷者を出し、特に樺山參謀長や與倉第十三聯隊長等もやられた程で二十三、二十四、二十五と愈々各地の城兵は苦境に陥つて行つたのである。かくて川上少佐はその意中を多數の幹部級の將校に計ると色々の議論も出たが十目の視る所伍長谷村計介ならば大丈夫この重責を全うすることが出来ようとの意見であつた、計介は餘程日頃から信頼されてゐたものと見える。そこで川上少佐は聯隊本部から傳令を發して谷村伍長を呼付けた。谷村伍長は、この夜陰に一體何用かと恐る／＼川上少佐の前に出ると、少佐は頗る打ち解けた面持にて、その近くに招き寄せた。谷村伍長はその目前に慇懃に不動の姿勢をとつて立つた、人拂ひがしてあるのか外には誰もゐない、少佐は莞爾として口を切つて曰く、

『谷村！毎日の戦闘で御苦勞じや。それにこの上の苦勞をかけては相すまぬが、この川上が折入つての頼みがある。』

聽いては呉れまいか？

谷村伍長は、『私で出来ます事ならば致しませう』とはつきり答へた。少佐は頗る我が意を得たりといつた面持で、

『さうか、よく言つてくれた。實はかく／＼……………』

とその密使の事をよく事情を打明けて話した。谷村計介は突然の事ではあり、しかもその任務の誠に重大で、城内三千五百の安危にもかゝり、又引いては、熊本鎮臺の名譽にもかゝる事なので流石の谷村伍長も頗る考へさせられた。考へれば考へる程、その使命の重大でしかも困難なことが目前にはつきりとなつて来る、そこで谷村計介はよく／＼考へた上、徐ろに口を開いて、

『別に命を惜しむわけではありませんがこの使命は非常に重大であります。このやうな大役はとてもこの谷村では困難でありませう。他に適當な人を選んで下さい』

ときつぱりと斷つてしまつた。谷村計介は決して臆病で斷つたわけでもなく命が惜しかつたわけでもない。事の重大を考へ、しかもその事の成否が及ぼす影響の大きいこと、その上極めて難事業であるといふことを考へると到底責任を以て之に當るといふことは出来なかつたのである。川上少佐は

『汝の心中はこの川上にもよく分る。成程この任務は並大抵ではない、城内三千五百はおろか天下の安危にもかゝる大役だ。然し今となつてはどうしても高瀬の征討軍營までこの危急を通ずるより外に道はない。この大役を果して呉れる勇士はこの川上の見る所では汝谷村より外にないと思ふ。もとより生きて還らんことは困難である。汝の命はこの川上にもらいたい。決死の志をかためて一番この大任を引受けてはくれまいか。』

『もとより、君に捧げしこの身決して死をおそれるのではありません。然し、何と思ふても、この役目ばかりは、身



にも餘る大役、とてもこの谷村では果せさうにはありません』

『もとより事の成否は豫測は出来ぬ。天に任かせるより外はない。然し、御國のためだ、天皇陛下の御爲だ。天皇陛下の御ため、御國のために命を捨ててはくれまいか』

いはれて計介は暫く下うつむいて何かヂイツと考へこんでゐたが、やゝあつてきつと顔を上げた。眞一文字に堅く結んだ口にも、晴れやかにかゝやく瞳にも、大決心の色が表はれた。

『少佐殿！よろしくございます。この谷村が命のつゞく限りやつて見ませう』

『おゝ！谷村よく言つてくれた。決心がついてくれたか。有難く思ふぞ。ではしつかりやつてくれよ』

川上少佐の眼はいつしかうるんで来た。かくて計介は隊に歸つてその準備に取りかゝつた。

#### 4 谷村計介の人と爲り

こゝで一寸伍長谷村計介の人と爲りについて申述べて見る必要がある。

谷村計介は宮崎市を去る西方約三里、宮崎縣東諸縣郡倉岡村に生れた。明治五年二十歳にして熊本鎮臺に歩卒として入營したのが彼が兵營生活のそも／＼の始めである。

倉岡村は日向の國ではあるが舊薩藩で古來尙武の漲つてゐた地方で文弱の風など一つも見ることとは出来なかつた。わけて計介は若い時から剛膽な性質をもつてゐて石投げでも常に一方の大將に推される程であつた。さうした天性を有した上に更に彼は又益々自分の膽力を練ることに工夫したといふのであるから彼の剛膽沈着は人に勝れた所が多かつた、それについては今に色々の逸話が残されてゐる。

倉岡村の郷社倉岡神社の境内には五百年も経たと傳へられる老松があつた。土地の人はこの松を旗掛松と呼んでゐた。——この松は明治四十年頃惜しくも枯死して今はなし——この松を中心にして、神社の境内は樹木が生茂り、晝でも一寸普通の者には氣味悪く感ずる所である。計介は十四五歳の頃、唯一人深夜この神社の境内の山の中に入りこの老樹の根本に端座瞑目して膽を練つたこともあつた。又その頃の事である。或夜非常な大暴風が起つたことがあつた。夜中のことではあり非常な暴風雨なので人々は皆雨戸を固く鎖して恐ろしい思ひをして夜の明けるのを待つた。計介の家の南隣の横山氏宅の一隅には大きな椎の木が一本立つてゐた。此の大暴風に大きなウナリを立てゝゐる。東天の白む頃の事である。風は今にやまない。所がどうしたことであらう。風のウナリの間にも大聲で何か叫んでゐる聲が聞えるではないか。之を聞きつけた人々は驚いた。『さて、一體この大風に何を叫ぶんだらう』『家でもつぶれたのではあるまいか』と不思議に思ひ、とにかく一大事と若者は身支度をして家を飛び出してその聲の方へかけ出したものが多かつた。所が驚くべし、此の聲は例の椎の木の頂上から聞えて来るではないか。馳せ集つて見ると計介が大搖れに揺れてゐる大椎の頂上に攀登つていゝ、氣になつて大聲疾呼してゐるのである。以後計介は大風雨の度毎に之を繰返して膽力を練つたといふことである。

尙又語り傳へられてゐる話では、倉岡村は大淀川の上流三里の所、この大淀川に沿ふて倉岡城があつた。その城址の下に岩摩淵イワサリノフチといつて、深さは幾尋とも知れない深淵で、表面はものすごい渦を巻き、晝でもゾツとする程の魔所である。しかもそこにはいつも『ヒヨスポウ』——水神の意、地方の俗語であらう、非常に人々に氣味深く恐れられたもの——が住んでゐるの、やれ河童が住んでゐると云ひはやされて、附近でも最も恐れられた場所で、漁夫などでもこゝだけは一人で漁ることを恐れたといはれる程の所である。計介は夏になると眞夜中こゝへやつて来て、唯一人深



潭に泳いでその膽力を練つたこともあつたといふ。計介とは知らず恐る／＼こゝを通る夜釣の漁夫はたゞならぬ物音に常に驚かされたといふことである。

計介はかくの如く膽力のすぐれた人であつたから、さぞ亂暴者であつたらうと思はれるが、成程それは亂暴な所もないでもなかつたではあらうが、それは至つて無邪氣な悪氣のないものであつた。その上、大變孝悌の心に富み父兄や繼母——實母は計介が生れて三ヶ月餘にして病死した——姉の云ふことには一言も背くことはなかつたといふことである。

又世人は多く目に一丁字もないもののやうに考へて居る向も多いやうであるが之は大な誤傳である、かの軍人龜鑑碑に「計介人ト爲リ忠實寡言、上官ニ事フルニ恭敬ニシテ禮アリ、然レトモ目ニ丁字ナシ人未ダ奇トセズ後憤リテ發シテ書ヲ讀ミ字ヲ習ヒ復タ吳下ノ阿蒙ニアラズ」云々とあるので少青年の頃は無學のやうに信せられてゐるがそれは前述の通り一つの誤傳であらう。郷里にあつては陶山謙齋、加藤擔齋に師事して寺小屋式の教育を受け、後鹿兒島に出て學問した事もあつた。然しこの時は番所抜けの罪に問はれて歸郷を命ぜられた。後又出て、一年位修學して歸つた程である。それで勿論深い學問はなかつたに違ないが目に一丁字なしとは決して云はれない。

計介は生來學問を非常に試み徹夜することすらあつたといふことは彼の妻女丸菅とよ女——現在生存本年七十四歳（昭和四年）——の言ふ所である。今に残されてある手紙の筆蹟も中々美事なものである。之から推しても相當の學問のあつたといふことは否めまい。

明治五年二十歳の時計介は既に妻もあり胎内には子供さへあつたが決心する所があつて兵役を志願した、合格の上二月七日鎮西鎮臺鹿兒島分營に入隊したのがその兵營生活の第一歩である。そして三番小隊に編入され二等卒を拜命

した。それから七月十四日熊本本隊詰を命ぜられ第十二大隊六番小隊に編入された。

明治七年、前參議江藤新平が内亂を佐賀に起した時、——所謂佐賀の亂——計介はその鎮壓の軍に参加を命ぜられて殊功を立てた、その功によりて明治七年三月九日熊本に凱旋すると間もなく陸軍伍長に陞任した。（六月十八日附）それから又臺灣征伐にも加はり各地に戦功を立てた。

川上聯隊長心得は計介の日頃のこの人と爲りをよく見ぬいてゐたので、今度のこの大役は計介を措いては他に之を全うし得る者はないと心に決したわけでその眼力も實に見上げたものといふべきであらう。

##### 5 計介の辛苦

決死の覺悟を決め、この上は、石にかぢりついてもこの大役を美事に果さねばならぬと心に堅く決めた谷村伍長は先づどうして薩軍の圍を抜け出るかについて色々心と心を碎いた。かくて熟慮の結果、彼は敢然として軍服をぬぎすて、變裝することにした。そして先づ顔や手足にベタ／＼と鍋のお黒を塗り込み紺の腹掛をかけ下には股引を穿ち上には袴纏を着こみ草鞋をはき簑をつけ笠を持つて一見山奥の百姓のやうな身なりをした。

そして二月二十六日の眞夜中（午前一時——それで二十五日の夜といつてもよいわけである——）大なる決意を心の中に堅く秘め、事の成功を神佛に祈り、先づ川上少佐其の他重なる將校一同に別を告げた。大任を果すか？名譽の戦死か？二つの中の一つ。何れにしても君の御ため御國のためである。かくて別を告げた彼は城内漆畑の垣をくぐつて出た。漆畑は段山の上の方にある。そこから見張りの薩軍に氣づかれないやうにとて雜木林の中に入つたり竹藪の中をくゞりぬけたり、或は土手下にかくれ、或は流を渡り、八方心を配りながらズン／＼進んだ。敵の圍はなか／＼嚴重であつた。張番の薩兵はそこ／＼にかゞり火をたいて注意の目を見はつてゐた。その間を、左に心を配り、右に、



氣をつかひ、あちらにまはり、こちらへよけて進んで行く辛苦は一通ではなかつた。

やつとの思で本妙寺山まで辿りついた。やれ／＼と思つて一安心し乍ら金峯山の麓にさしか、つた時のこと、一度にバラバラツツとやつて来たのは薩兵。

「ヤッ！しまった」と心の中で叫んだときはもう追付かない。見事に捕へられてしまった。計介はこゝが智恵の使ひ所だ。何もかも御國のためだ。さう思つて一つ薩兵をゴマかしてこの急場をのがれようと、ガタ／＼とふるえる眞似をして、臆病者の風を装ひ、「どうぞ命だけは助けて下さい。どうぞお願ですから」と手を合せて何度も／＼拜んだ。然し敵兵は少しも聞入れない、はげしく拷問した。然し計介は色々と辯解した。果ては棒をもつてたたかたりぐつて拷問したが計介の心は鐵よりも堅い。決して實を言はない。後にはとう／＼敵兵も根氣負けたか嘲り笑ひ乍ら荒縄で縛り上げた上そこにあつた立木へく、りつけてしまった。そして一人の番兵を置いてどこかへ立去つた。計介は心の中で、

「うまく行つたな！之で先づ命だけは助つた。命さへあれば何とかしてこの大任は達せられるに違ない」

とひそかに喜んだ。然し一つ困つた事にはそこにはまだ一人の番兵が大きな目をむいてゐる。これでどうすることも出来ない。計介は何とかがしてこの急場を逃げ出さねばならぬ。一體どうしたらよからうかと思案にくれてゐると漸くすると夜中のことではありその番兵も毎日の勤めの疲れが出たものか一人でコクリ／＼と眠りはじめてしまった。計介は「之は占めた。番兵が眠つてしまへばどうにかなる」と考へ、じつとおとなしくしてゐるととう／＼番兵はそこへ腰をおろして眠つてしまった。時こそ来れ！と計介は後手にく、られた手をもつて不自由乍らも全身の力をこめてその荒縄を爪でつみ切りはじめた。中々容易なことではなかつたが、全身の力、凡ての心をこれに集めての仕

事なのでとう／＼その縄を切つてしまった。計介のこの時の心中はどうであつたらう。それでも今番兵に氣づかれてはと胸を下キつかせ乍ら、ぬき足さし足で靜かにその場をソーツと、のがれて行つた。もう大丈夫と云ふ所まで來ると、一目散にかけ出した。夜の明けない中にと野となく山となく、根限りたゞ走りに走つた。

二十六日の朝はやうやく明け初めた。彼はそれからもつ／＼用心を深くした。そして、出来るだけ山を選んでその中をかけることにした。薩兵の屯してゐるすぐその下を通りぬけた事もあれば、思はぬ所で人聲のする所にぶつかつて道をかへたり、ひや／＼する事も幾度かあつたが、先づ事無く進む事が出来た。吉次越は澤山の兵が固めてゐる。彼はこの日(二十六日)の夜こゝを越す段取をきめた。この峠を一つ越すともう高瀬までに二里とない位である。愈々二十六日の深夜に彼は非常な注意の許にこの峠にさしか、つた。注意周到な計介は、敵に怪しまれないために一人の農夫か椎木を道案内としたらよからうと考へ人を一人雇つて同伴した。大道を通れば薩兵に遭はぬとも限らぬ。わざと彼は間道を選んだ。萬難をのがれてやつとこゝまで來た彼は愈々こゝで最大の難題がふりか、つた。計介が夜明までには高瀬に達しようと思つて急いでゐると、突然二人の壯漢が木蔭から躍り出した。そして、有無をいはず縄をかけてしまった。計介は、「しまった」と思つたがもうしかたがない。

「貴様は何者だッ！」はげしい聲でねめつけられた。捨てる命は惜しくはないが、使命を果すが何より大事。それでなければ城内三千の運命にもかゝる。たとへ敵を欺いても君への忠義。然し、今はのがれぬ運命、こゝでは何と辨解しても自分が軍人であるといふことは隠しおほせない。よし、こゝでは一番臆病軍人に見せかけてこの場を通れようと決心した。

「私は成程兵隊に違ありません。どうぞ命だけは助けてやつて下さい」



とブル／＼ふるへ乍ら自白に及んだ。この二人の壯漢は熊本隊——薩軍に熊本の士族が加はつて之を熊本隊と呼んでゐた——一番小隊の兵士安田義虎と永屋藤彦といふものであつた。この二人は意外の獲者と心中打喜び乍ら彼を引立て、峠にある一番小隊の本部に行つて隊長佐々友房にこの旨を傳へた。それから小屋の中に連れこんで訊問に取りかゝつた。訊問については色々きびしく訊問したやうに見えてゐる本もあるがそれは事實に反し焚火にあたらせ乍ら座談的にやつたらしい。それから道案内に頼んだ一人の男は矢庭に逃げ出し一人の者が銃を放つたが命中せずそのまゝ逃亡した。

佐々はこの男を打見て、とても大事を果すやうな男でもなく、極めてつまらぬ男のやうである。それに計介はブル／＼ふるへ乍らおとなしく訊問に對しては申立てをした。

『私は小倉の豆腐屋の息子で、(或は農夫の子といひ薬屋の息子ともいふ)家には両親もあるが徴兵にとられて熊本鎮臺に入營しました。ところが戦争がはじまつて、こんなおそろしい目に會つたことはございません。戦争がおそろしくてたまらずやつとこゝまで逃げて來た者でございます。どうぞ命ばかりは助けてやつて下さい』

正直そうにかういつて拜まんばかりである。そして色々城内の事を尋ねると『やれ、もう、落城も間近でせう』とか『とても臆病者ばかりゐる』とかいつたやうな、敵兵のよろこびさうな事ばかり出鱈目に云つて、神妙にしてゐる。そこで敵兵も彼の云ふ事は全く偽りのないものであらうとすつかり信用してしまつた。かくて彼の縛めの繩は解かれることになつた。計介は心中『占めたぞ』と思ひ乍らも尙神妙にしてゐると翌二十七日から兵糧方人夫として木留熊本隊本營の糧食方に使役されることになつた。計介は飽くまで從順に勞を惜しまず働いた。或は他の人夫と一緒になつて水を汲んだり、又竈の火を焚いたり或は糧食を吉次越まで運んだり、こゝが一番の大事、こゝで失敗すれば

取り返しはつかぬと思つて表面實に忠實を装ひ人々に油断をさせてその間に先々の様子もこつそり探つたりもした。敵兵もすつかり安心して、別に用心を拂ふこともなくなつた。彼は今こそ機會であると、三月一日の夜再び姿を消してしまつた。

#### 6 計介大任を果す

薩軍では計介の姿が見えなくなつたけれ共格別氣にも止める者はなかつた。

『餘程臆病者と見える。軍がこはくて小倉の方へでも逃げ歸つたに違ない』

『多分今頃は官軍につかまつて散々な目にあつてゐるだらう』

『いや、官軍につかまつてやられてしまつてゐるかもしれない。さて不惑なことをした』  
など、涼しい顔をしてゐる。

かくて三月二日の午後！突如一人の壯漢が高瀬の官軍の前哨線に現れた。そして哨兵目がけて走りより、

『自分は熊本鎮臺の本營から來た密使。早速、官軍の本營に取次いでもらひたい』

と願ひ出た。見れば身にはつゞれをまとひからだはよごれ、繩帶を締め一見山奥の百姓か乞食としか見えない。哨兵が之はテツキリ薩軍の間諜に違ひないと思つたのも無理はない。哨兵は有無をいはず彼を荒縄でくくり上げてしまつた。そして本營の方へ引立て、行つた。豈計らんや、之ぞ百難を冒し、萬苦を嘗めてこゝまで突破した忠勇の士伍長谷村計介であつたが神ならぬ身の哨兵にそれと知る事が出来なかつた。

官軍の本營は此時、熊本縣玉名郡船隈——船島の俚稱、現在の玉名村大字玉名に屬す——の三叉路に當る荒木甚吾の家に設けられてゐた。本營とは名ばかりで八疊二間を打ちぬいてそれを事務所にしてゐるのであつた。而も第一、



第二の旅團がごつちやに執務してゐるのであるからごつた返しをしてゐる。第一旅團では司令長官少將野津鎮雄、參謀長中佐岡本兵四郎、第二旅團では司令長官少將三好重臣が二十七日の高瀬の激戦で負傷して不在參謀長大佐野津道貫參謀大尉三原經是などがゐる。

參謀等は先づ計介の來旨を聞き訊して早速繩を解き之を野津少將の前へ連れ出した。計介は今やつと數日間の血のにじむ勞苦が酬いられたかと思ふと一時に胸が一杯になつた。そして一時にこみあけて來る無量の感慨が、目をうるませ、息づかひまでもはづませた。それに目の前にある野津少將閣下はかつて佐賀の亂でも一度面謁した事のある將軍であつたので彼の感慨は一層深刻なものがあつたのも無理はない。そのために彼はどうしても言葉が出ない。唯氣ばかりあせつてゐるのであつた。然しやつとの事で熊本鎮臺の司令官、谷少將からの命を傳達することが出來た。

流石の野津少將もどしうてこれ程までに堅固にかためてゐる敵兵の圍を逃れて來たものか多少の疑念をもつてゐたが谷少將からの暗號つゞりの報告書を取り出して差出すともう疑ふ餘地が一分もない。そして一々城内の模様を尋ねると、一々之に熱心に明確に答へ、しかもその一言一語に誠意がこもつてゐる。並びるる將校たちは誠忠無二の言動に全く感心させられてしまつた。

然し感心な事に自分の辛苦の模様については一言半句も語らなかつた。唯前後二回敵兵につかまつたことを簡單に話したのみであつた。野津少將は計介の勞苦を深く察し、しかも決死の大任を果した目ざましい功勞を賞し、慰勞の言葉を與へ、懇ろにこれをいたはり休養を與へてやつた。

然るに、忠義に燃えてゐる彼はすぐにでも熊本の本隊に歸つて復命したいと願つたがそれは餘りにも危険なのでどうしても許されなかつた。この話を傳へ聞いた官軍は一人残らずその忠烈に感じないものはなかつたといふことで、

さもあつた事であらう。

### 7 勇壯なる最後

熊本城の十重二十重の圍を潜りぬけ幾度か生死の巷に出入して千辛萬苦の末始めて城中の消息を第一、第二旅團の司令部へ通報連絡した伍長谷村計介の功績は幾萬軍人中の稀有の大殊勳であつた。されば野津少將は深く計介の功績を賞し強いて鎮臺へ歸つて復命しようとした計介の懇望を斥け、休養を命じたのであつた。然し忠君愛國の精神に燃ゆる彼はどうしてもじつとしてゐられなかつた。その翌日即ち三月三日から、

『どうか今日から戦線に立たして下さい』と願つてきかない。それでも彼の特別なる勳功を認めてゐる野津少將はどうしても之を許してくれない。計介は再三再四まごころをこめて、『どうぞ許して下さい、お願いです。私はもうじつとしてゐられません。からだもすつかり元の通りに元氣になりましたから』

あんまり熱心に願ふので遂に野津少將も根氣負けして三月三日の日にはとうとうその望を聞入れて午後から旅團の傳令をして働かせる事にした。

三月四日、この日はかの有名な田原坂の大激戦の第一日である。此の日第一、二旅團の主力は野津少將自ら率ゐる田原坂本街道に向ひ右翼支隊は野津大佐之を率ゐる吉次越へ向つて一散に突撃を開始したのである。田原坂の地形は實に天險無比とも稱すべき高山でもなく峻山でもないが、兩崖が高く街道は四字形をなしその底を街道が通じてゐるのである、しかし困つたことには坂を登るに従つて屈折がそこ、にあつてしかも登れば登る程、その坂が急になつてゐる。勿論此の兩側の崖上には地形に應じて十餘箇所堅固な堡壘を築いて之を守つてゐる。しかも之を守つてゐるのが薩摩軍人ならした薩摩健兒の薩摩軍であるからたまたまらない。實に難攻不落の要所といつて差支がない。



官軍は全力をあげて攻撃したが容易に之を抜くことは出来ない。悪戦苦闘を重ねること實に半ヶ月、今に如何ともすることが出来ない。

三月四日、この日こそと官軍は豫定の部署に従つて攻撃した。砲火は忽ち敵壘に向つて集中される。歩兵は散開して射撃する。敵も之に應戦して愈々刻々に大激戦となる。敵の射撃が少しく緩かになると一齊に突撃を試みる。敵は官軍をさうしておびき寄せては亂射をやる。官軍は散を亂してバタンと斃れる。

かくの如くにして攻撃を反復しても敵壘はなかく落ちさうにない。かくては果てじと死傷をかまはず突貫し辛うじて一壘を奪守すると他壘からはけしい銃火を浴びせ一齊に敵は日本刀をうちつけて斬りこむので折角取つた堡壘も忽ちとりかへされるといふ有様。

野津少將は之ではならぬと自ら馬を陣頭に進めて諸隊を指揮して鼓舞激励した。この時のことである。谷村計介は傳令として戦線近くまでやつて来た。硝煙は濛々として漲り砲聲は殷々として天地に響き、兩軍のあぐる喊聲は實に壯絶を極めてゐる。

計介はこの戦線に來つて折角占領した堡壘も又敵軍の逆襲によつて奪還される有様を打ながめもうぢつとしてはるられなくなつて来た。齒をギリ／＼食ひしぱり、腕を扼し、奮然として立つた。そして側に斃れて呻いでゐた一員傷兵の銃を奪ひ取るが早いか、單身街道右手の敵壘めがけてまつしぐらに暴進した。敵は「ソレ来た」といふので計介に猛火を集中させた、心は如何に石よりも堅き計介も、胸中は何かに忠義の焰に燃えてゐる谷村伍長も、身は鐵石でない。見る間に數ヶ所に重傷を受けた。それでも決してひるまなかつた。然し遂に敵の彈は、「萬歳」の一撃を擧げさせたまゝ、計介の一命を奪つてしまつた。

計介の戦死は官軍の士氣を大いに鼓舞した。然し薩軍の固めは愈々堅くなつたが、遂に田原坂を抜き、かくて城兵との連絡も出来、官軍しきりに薩軍を破り、やつと四月十五日に全く圍を解くことが出来た。遂に隆盛等は鹿兒島に退いて城山に據り隆盛以下諸將力殆ど盡きて戦死し、始めて戦亂が收つた。

#### 8 軍人龜鑑

名譽の戦死を遂げた谷村の死は上下の非常に惜しむ所であつた。計介時に二十五歳遺骸は熊本縣玉名郡木葉村大字宇蘇浦の陸軍墓地に埋葬され、今尙多くの戦友と並んでゐるが彼の墓は常に香花の絶ゆることがない。尙その一部は郷里宮崎縣東諸縣郡倉岡村に葬つた。

西南の戦役に於てその功績の最も偉大でその死の最も花々しかったのは何といつても谷村計介の右に出づる者はない。そこで谷將軍、樺山少將を始めとして熊本籠城の諸將士中には痛くその死を惜むと共に、何とかしてその名譽を不朽に傳へたいものと、より／＼記念碑建設の議が起り、之を公然東京に於ける熊本籠城會の席上で發表したのは實に明治十五年七月四日、谷中將は起つて之を主題とする一場の演説を試みたが、誰一人異存のあらう筈がなく、萬場議決し八月二十二日谷中將自ら碑文を撰することになり九月三十日その計畫を畏きあたりへ内奏した。明治天皇も亦この議を大いに嘉し給ひ御内帑金五十圓の御下賜さへあつた。一下士の身として無上の榮譽といふべきであらう。かくて又檄を全國の陸軍の各官衙學校鎮臺に飛ばした所、上は將官より下は兵卒に至るまでその人員約二萬餘の人々から夫々の寄附金が集り「軍人龜鑑」の四大文字は陸軍大將有栖川宮熾仁親王殿下が征討總督たりし御縁故を以つて御染筆あらせられ、かくてその記念碑は靖國神社神苑内牛ヶ淵公園に建立せられ、明治十六年五月六日靖國神社の大祭を期としてその除幕式が行はれた。











### 第三 孝行

#### 一 目的及び教材観

人はあらゆるものとの関係の中にその生活をつゞけてゐる。その密接なる関係の中でも、亦特に近親なものは親子との関係であらう。親あつての子であり、子あつての親である。親が子を可愛がり、子が親を慕ふのはそこに何等の理窟はない。理窟があつて後に親が子を可愛がり、乃至は子が親を慕ふのではない。たゞ、わけもなく、可愛がり敬ひ慕ふのである。所謂、さうせずにはゐられない自然の情である。而してこの自然の情に出發して、子が親の無限恩を省み純眞に感謝の心を行の上に現せば之が即ち孝なのである。かうした純眞な感恩の情が決して親を困らせ、苦しめ、心配させるやうに現はれよう筈はない。かゝる至情は必ずや親を安んずるやうに表はれるに違ひない。

然し、人はかうした純眞な自然の情がともすると自己一身の利己的利欲のなかに覆はれてしまふ。その結果親に對して心にもなき言動を無遠慮に振舞ひ不孝の行爲を敢へてなすこともなしとせない。之自らが利己、利欲の奴隸となつたものであつて、やがて自己がその本來の純眞性にかへつた時、悔恨の情に身を切らるゝ思をするわけである。されば人は皆、この本來の純眞に常に立ちかへり、私欲利己の支配から脱却して行くやうに心がけねばならぬ。

而して孝はよく『百行の本』といはれ又『百行のはじめ』とも稱せられ、我が國に於ては忠と共に最も大切な徳とせられた。即ち我が國民道德は古來、忠孝を以てその根幹としたのである。されば前課の忠に次いで孝の徳を説くこ

とは誠に大切なことであるといはねばならぬ。特に子供の時代は、所謂我儘の爲に父母の心を痛めさせ不孝の行爲に陥ることもなしとせないが、教科書にもある通り、『父母の心を慰めて孝行すべきことを教ふる』ことは本課の目的であり、頗る重要な事といはねばならぬ。

#### 二 教材系統

尋一、親の恩、親を大切にせよ、親の言ひつけを守れ。尋二、孝行。尋四、孝行。尋五、孝行。尋六、忠孝。高一孝行(一)(二)。高二、孝。

#### 三 指導要項

甲 二宮金次郎の例話

1 二宮金次郎の略傳

イ 金次郎の出生

ロ 金次郎の家柄

ハ 金次郎の勤儉力行

2 金次郎の孝行(一)

イ 二宮家の災難

ロ 金次郎一家の困窮

第三 孝行



3 金次郎の孝行(二)

- イ 父の病
- ロ 一家の困窮愈々加はる
- ハ 金次郎の孝養
- 4 金次郎の孝行(三)
  - イ 父の病死
  - ロ 母の決心
  - ハ 金次郎母の心を安んず
  - ニ 金次郎の勤勞

乙 訓辭と格言

- 1 金次郎の例話考察
- 2 訓辭と格言
- 3 實際生活の指導

四 指導 計畫

1 本課の例話として探つてある二宮翁は、次の第四課の「仕事に勵め」と第五課の「學問」と三課つゞいて説くことになつてゐる。更に又二宮翁の例話は高一、至誠の課にも出されてゐる。通じて、要する所先づ二宮翁の人

格をより深く理會せしめ、以て兒童の人格を陶冶させようといふのであるが、本課に於てはその中、特に翁の孝養について説かんとするものである。

2 本課も亦二宮金次郎の例話を眞によく取扱ふことが出来れば、既にその大半以上の目的は果されたものと思ふ。それで例話については十分細心の用意をして取扱ふ所がなければならぬ。

3 本課全體の取扱については色々の方法が考へられるが、先づ尋二孝行のふさの例話の復習から入るもよからう。又單的に「今日から二宮金次郎のお話を致しませう」といつて例話に單刀直入してもよいと思ふ。

4 金次郎の例話については、先づその人となりの大様を略説し、然る後に部分に入るやうにしたがよい。部分は出来るだけ逸話的の話を挿入した方が感銘を深からしめる。

5 金次郎の例話を終つたら、金次郎の生活の中にももる精神を捉へさせ、かくてその心を以て各自が自分の親に對して盡すべきことを諭し以て實際卑近の生活について指導をして行くことが大切である。

6 格言は訓辭の中に織込んで説く方が、では説き易いやうに思はれる。格言は割合に難解なものでこの格言が尋常三年程度の兒童にどの程度に理會され得るかは頗る疑問とする所であるが、こゝで眞にその眞意を理會し得なくとも、こゝで覺えて置けば生活經驗が豊富になると共に又深味をもつものとなつて來るであらう。

五 教材解説・説話要領

甲 二宮金次郎の例話

1 二宮金次郎の略傳



4 金次郎の出生 二宮金次郎といへば殆ど日本中の人に親しまれてゐる名前であつて、恐らくは尋常三年生あたりの子供でも或は唱歌になり、或はお話になりで聞知つてゐる子供が多い事であらう。今に神様として祭られ、又一般人から世の hands とし、模範として敬ひ尊ばれてゐる。金次郎の生れたのは天明七年九月四日、今から約百四十年前のことである。——正確には昭和五年から百三十六年前——今、小田原行の汽車に乗つて東京から下ると約二時間にして神奈川縣の小田原驛に着く、こゝから一里半、神奈川縣足柄上郡櫻井村大字柏山かしやがその出生の地である。柏山は今一つの大字となつて櫻井村の一部落であるが當時は柏山村といつて一つの村をなしてゐた。金次郎出生の遺跡は之を永久に残したい考からその宅地の跡に石垣を廻らし、碑を建て、保存してある。

□ 金次郎の家柄 その祖先については、平氏に出て、曾我氏を経て後二宮氏を名乗ることになつたといふことである——富田高慶氏著報徳記及び井口丑二著二宮翁傳——而して金次郎の家は宗家二宮家の分家である。宗家は代々萬兵衛の名を襲名してゐる。その萬兵衛の子供に銀右衛門といふのがあつて、之が別家を立てた。之が金次郎の祖父に當る。祖父銀右衛門は子供がなく兄萬兵衛の次男、利右衛門を養子として家を繼がせた。かくてその長男として生れたのが即ち金次郎である。母は隣村足柄下郡曾我別所村、川久保太兵衛の長女ヨシ子である。時に父は三十七、母は二十一歳であつた。

祖父銀右衛門は分家と共にいくらかの土地を貰つて家を興したが、其の後の勤儉に依つて家業が榮え家産十三石を有するに至つた。所が天明二年十月十六日を以て歿したので養子利右衛門がその後を嗣いだ。利右衛門の代になつても先代銀右衛門の勤儉によつて相當家産を譲られたのであるから、決して生活に窮するやうなことがあらう筈はなかつた。然し利右衛門は生來非常な慈悲慈善の心に富み、他人の難儀苦勞を見るとどうしても之を救はずにはゐられな

いといふ立派な性質を具へてゐた。そのため先代銀右衛門の貯へた家産も決して無駄な事に浪費したわけではないが漸次減る一方であつた。特に天明年間是有名な饑饉年が幾年も打續いた時代で、かの奥州の地方が澤山の餓死者を出したのもこの時である。相模地方はそれ程ではなかつたが、それでも、生活に困る者が可なり澤山出来た。かねて慈悲憐愍の心に厚い父利右衛門は是等の人々を見かねて色々と自分の力の及ぶ限りの施しをし惠を與へた。

そのために、貧窮に陥つた人々は大いに潤ふたわけであるが、元々さう裕福な身の上でない利右衛門一家はそのために傳來の家財は増さないばかりか大分減つて、やゝ一家の家計も傾き加減にさへなつたのである。然し、別にさしたる災難も起らねば一家の働き様如何ではそれは十分に挽回出来る見込はあつたに違ひない。

所が不幸にもこゝに一つの大災難が口を大きくして待つてゐたことを神ならぬ身の、利右衛門は知る由がない。寛政三年關東は非常な豪雨で凡ての川が非常に氾濫した。柏山村を通じてゐる酒匂川さかづも亦非常な大洪水でそのため堤防が缺潰して數ヶ村の田圃が皆ぶつつぶされてしまつた。この災難は利右衛門一家にとつては實に一つの致命傷ともいふべき大災難であつた。時に金次郎は五歳、次男友吉——後に三郎右衛門といふ——が二歳であつた。之からの利右衛門の家は一時に家計が傾いてしまつて、今は早やその日の生活にも窮する位にまで落ちぶれてしまつたのは返すくも氣の毒の至りであつた。

それからの利右衛門は刻苦精勵大いに家運の復興につとめたのでやつとのことで先づ田圃だけは大體舊態に復したけれ共如何せん、この時背負込んだ大負債だけはどうすることも出来なかつた。餘りの過勞のためかその後約六年後寛政九年頃から兎角父利右衛門は健康を害してしまつた。之實に重々の大不幸といはねばならぬ、家計が豊でなくなつたので思ふやうな養生も出来かね遂に寛政十二年四十八歳の分別盛りを一期としてこの世を去つてしまつた、一家



の大黒柱を失つた金次郎一家の悲歎眞に察すべきである。

時に金次郎十四歳、弟友吉——三郎右衛門——が十一歳、三男富次郎が二歳であつた。

ハ 金次郎の勤儉力行 それからの金次郎一家の悲惨は實に言語に絶するものがあつた。然し健氣な金次郎は勤儉力行よく家の生活を助けたのである。然し薄幸なる金次郎一家には尙も不幸が見舞つた。父がこの世を去つて涙もまだかはかぬに、その次の年には唯一人の親として杖柱と頼む母が僅かに十日餘りの病のために十六になる金次郎と十三と四つになる子供を残して父の後を追つてこの世を去つてしまつた。金次郎のなけきは今想像するだに氣の毒の至りである。

然しそれでも金次郎は決して氣をくじくやうな事はなかつた。金次郎は叔父萬兵衛の家に引きとられ他の弟二人は母の實家である川久保太兵衛——川窪と書ける本もあり——の家に養はれることになつた。

金次郎は叔父萬兵衛の家にあつてもよく働いた。そして暇ある毎に學問にも熱中した。こゝに約一ヶ年餘り厄介になり、それから親類筋に當る岡部伊助方に奉公することにした。その次の年にはやはり親類筋に當る名主二宮七左衛門の家に奉公した。奉公中は一意専心家業にはけみ、儉約を守り貰つた給金は殆んど之を貯蓄することにした。そのため、僅かばかりではあつたがいくらかの貯蓄も出来上つたのでその翌年文化三年二月この家を辭して自分の家へ復つた。時に金次郎二十歳の時である。それで金次郎が他家へ厄介になつてゐた間は先づ滿三ヶ年であつた。この永い間自分の家は誰一人訪れる者もなく全くの空家同然であつたので屋根は落ち壁は朽ち庭には草が茫々として生ひ繁り見るかけもない有様であつた。

金次郎は先づ雜草を刈取り、屋根の修葺をなし壁を繕ひ家らしい家にしてこゝに住むことにした。そして一家再興のために一心不亂に立働いたのである。かくて力行辛苦の結果こゝに二宮家は再び元の二宮家となつて再復することになつたのである。之偏に金次郎の力行勤儉の結果に外ならぬ。

金次郎の勤儉力行は終始一貫してゐた。そのため、日に日に彼の家は復舊が舉つて行くばかりであつた。所が吉凶禍福はあざなへる繩の如しで、金次郎の二弟が厄介になつた母の實家川久保太兵衛の家が其の後、幾くもなくして家運が傾きかけたので金次郎は之を救ひ、尙、二宮家の總本家も亦、家計稍々衰退に傾いたので之も亦彼は救つてやつた。

かくして金次郎は一面に於ては勤儉力行よく經濟的にも努力したのであるが更に彼が他の人と異なる所はかく家業に精を出す傍、彼は又學問にも熱心に勵んで人の道についてもよく古聖人の道を辿ることに努めたといふことである。そのために村の人々は彼の精進努力にも、又學問についても目を經るに従つて感ずるやうになり、彼の人格の光は界限に日一日と喧傳されて行つて、その名聲は次第次第に高まつて行つた。

その頃、この地の藩主即ち小田原侯は大久保忠真侯であつた。この大久保侯に仕へる臣籍の首位は城代であつて千五百石を領し、次は家老であつて、家老の家は凡そ十軒ばかりあつた。次は年寄、次は用人、この家老以下用人までを三役と稱した。而してその頃この家老の首席を服部十郎兵衛といつた。祿高は千石内外であつた。所が服部家では代々驕奢に流れ、遂に産を傾け十郎兵衛に至つて負債千三百兩、外に辨償の途もなく、一藩の儀表たるべき重職にある名家も借金のために破産滅亡の悲運に陥らんとしつゝ、あつた。

この矢先に金次郎の名聲が一時にこの地方近在に鳴り響いたので、この服部家復興の事一切をあげて金次郎に依頼することになつた。時に金次郎は二十四歳金次郎は永年辛苦を重ね、辛うじて今、家産を復し年々増殖興隆せんとす



る矢先ではあり、且この事業の容易ならざることを十分知りぬいてゐたから『私如きではとてもこの大事業の成就是困難でありませうから、他に適當な人を選んで頂きたい』といつて再三固辭したけれ共、たつての願なので金次郎もその知遇に感じてこの難事業に當ることにした。

かくて金次郎はこの難事業を五ヶ年にして成就せんと計畫し、先づ服部家に至るや、主人に向つて整理の全權を委せてくれるや否やを念を押し、更に主人に理を説いて、この大祿を食み乍ら一家廢滅の危機に陥るは不忠不孝の甚しきものであると責めつけた。主人は大いにその責を感じてその罪を謝した。こゝに至つて『既にその罪を深く悔ゆるならば自ら責めねばならぬ。自ら責むるとは如何なることかと云ふに、まづ食は飯と汁に限ることその一である。衣は綿に限ることその二である。無用のものを好まざることその三である。この三事を誓つて守らるゝや否やを確めた主人は誓つて之を守るべきを言明したので、次には婢僕に至るまでも堅き誓を立てさせ、粉骨碎心、薪の焚方までも監督して、大いに儉約勤勉を勵行したので事は豫期以上に速に四ヶ年にして全く成功し千三百兩の大債悉く之を濟まし得て尙三百兩の金を餘すことになつた。そこで内百兩を非常豫備金として主人に、百兩を慰勞として夫人に與へ残る百兩は金次郎に與へんとしたが固辭して受けず賞與にして婢僕一同に分配し自己は一物をも取らずして飄然として歸り去つた。是五年目の二月七日、即ち文化十一年のことである。

この大成功は愈々金次郎の名聲を高めずにはおかなかつた。當時小田原藩主大久保侯の分家、宇津家は四千石の旗本であつた。その采邑（即ち知行地）下野國（今の栃木縣）櫻町は芳賀郡物井村、横田村、東沼村等の諸村を含んでゐるが、元來が土地がやせてゐる上にその地の住民は遊惰で、放縱で、飲酒に耽り、争鬭を好み、博奕に時を過し、訴訟の絶え間がなかつた。そのために田畝も全く荒廢に歸し領民も離散する有様であつた。元祿の頃は貢租三千百十六俵、民戸四百三十三を有してゐたが、地瘠、民情のために漸次荒廢して今は貢米九百三十六俵、民戸百三十餘に減じ家は傾き田畑は野となり宛然亡國山河の狀を呈するに至つた。大久保侯は深く之を憂へて屢々吏を派遣し資金を投じてその復興を圖つたけれ共、更にその甲斐なく、そのために宇津家の當主飢之助教成は幕府の旗本であり乍ら費用無き爲に出勤することも出来ない有様で、江戸西大久保の邸が焼けてから之を再築することすら出来ず、全く困窮の極に達してゐた。

かくて大久保侯は二宮金次郎の人格力量を聞き、辭を低くし禮を厚くしてこの櫻町復興の事を托せんとした。金次郎はこの事業の容易ならざる事を思ひ固辭すること三年。到底その器でないとして斷つた。然るに藩主の熱誠と知遇とに感激し、遂に立つてこの難事業に當らんことを決心した。大久保侯は大いに喜び資本金數千兩を與へんとしたが二宮金次郎は之を悉く辭退していふには、

『他人の名目や他人の資本を目當に事をはじむるやうでは到底事業の成功を見ることは困難であります。自奮自闘、荒地を興すには荒地の力を以てし負債を償ふには負債の力を以てせねばなりません』

かくて大久保侯の下附金は之を斷乎として斷り、自ら家財一切、その他諸道具に至るまで賣拂ひ野州に赴いた。時に年三十六歳かくて二十年間、この地方の復興開發に眞に粉骨碎心、誠心誠意の凡てを披瀝して努力し遂に事業の完成を見たのは年五十七歳であつた。——高一修身書——

金次郎はかくの如く勤儉力行よく家産をおさめ更に親類其他の衰運に向へる家運を整理し到る所に於て成功し其の名聲は一時に天下に高かつたが、更に彼は道德と經濟との一致を基礎にして報徳教を説き所謂實學派の學者として亦其の名が高い。之偏に彼の精進勉學の賜である。



かくて安政元年十月二十日七十の高齡を以てこの世を去つた。然し彼の遺徳は今に尙天下の人士に景慕せられる所である。出生の地、小田原に報徳二宮神社が建てられ、下野、今市にも亦報徳二宮神社が建てられ共に縣社として縣民は勿論一般國民の尊信が厚い。そののみか、彼の徳を報ゆるに徳を以てするの精神は廣く天下に報徳社又報徳會となつて現はれ世道人心に偉大な感化を與へてゐる。金次郎の遺徳も亦偉大といふべきであらう。

金次郎の又の名を尊徳タカノリといつた。今は二宮尊徳翁で通つてゐる。彼がかゝる偉大な徳化を世に及ぼすに至つたについては涙なくしては聞かれぬ多くの事實がある。次に彼が如何に孝心に富んでゐたかについて述べることにしよう。

2 金次郎の孝行(一)

1 二宮家の災難 前にも述べた通り金次郎の父利右衛門は極めて慈悲心の深い人であつたために難儀な人を見ると之に施し、可愛想な人には恵んでやつたその人助けのために折角の身代もやゝ衰へかけてゐた矢先、かの寛政三年の大洪水のために拍山村近在を貫流する酒匂川も非常な大氾濫であつた。この時の洪水は餘程はけしかつたと見えて、床上四尺も水が上り、床の下には魚が泳いだとさへ云はれてゐるから大變なものであつたに違ない。そのために凡ての堤防は切れて、田地田畑はたゞ濁流の猛威に任せる外はなかつた、或は流され、或は土砂に埋り、或は缺潰した、その被害は實に目も當てられぬ慘狀であつた。金次郎一家も亦この大災厄を被り田畑は一畝も残らず流されてしまつたので金次郎の家は愈々貧困に陥りその日の生活にさへ困るやうになつてしまつた。

□ 一家の困窮 この時金次郎は五歳であつたが其時には弟友吉——三郎左衛門——も生れてゐたので父母はこの二人の子供の養育にも心を痛めつゝ、之が復舊にあらん限りの力を致した。父は朝はまだ暗い中から田圃に出て行つた。そして日は全く没して暗くならねば歸つては來なかつた。母も亦幼兒を背に負ひ金次郎の手を引いて田圃の復舊に力を盡した。幼心の金次郎にもこの當時の一家の困窮の有様が餘程心に刻みこんでゐたものと見えて終生忘れず、偶々話がこの事に及ぶと思はず知らず目には涙の露が光り、ひたすらに父母の鴻恩を謝したといふことである。

3 金次郎の孝行(二)

1 不幸にも父病にかゝる 父利右衛門は刻苦精勵二宮家の復舊に努力したので田圃は略舊態に復することが出來たが如何せん多額の負債に追はれて日一日と貧困に陥つて行つた。父利右衛門の働き振りは實にはたの見る目も氣の毒な程一生懸命であつた。この、身を粉にして働いた無理が障つたのか、杖柱と頼む父がかの大洪水後七ヶ年——寛政九年——金次郎十一歳の頃から遂に病床に臥することになつてしまつた。一家の困窮實に言語に絶するものがある。

□ 一家の困窮 そのために一家の困窮は愈々募るばかりである。それがため父利右衛門は思ふやうに醫藥をとることも出來なかつた。が困窮の中にもからだの事であるから何とか、やりくり算段をして村の醫者村田道仙(道川と書ける本もあり)にかゝつて病を養つた。村田道仙は至極慈悲心に富んだ醫者で難儀な人には無料でゞも治療をしてくれる程の情ある醫者であつた。然し物堅い利右衛門はどうしてもそんな厄介になるのは忍びなかつた。藥價は當り前に支拂はねば氣がすまぬ。然し、家は愈々赤貧洗ふが如き有様、それに藥價は重なる、とう／＼僅かばかり残つた田地を賣つてやつと金二兩を得て、之をかの道仙の所にもつて行くと道仙は之を見て且つ驚き且つ怪しみ、

「お前さんは家が貧しくて困つてゐると聞いてゐるにどうしてこの金を都合したか」

と尋ねた。すると、父利右衛門は「如何にも仰せの通り私は只今非常に暮しにも困る有様ですが」とて二兩の金を得た次第を話すと道仙はその心の清く美しいのを感じ入り、

「いやどうも誠に感じ入つたる話である。自分は今この金を頂戴せなくともその日の暮しに關はることは少しもない



御身はこの金なくしては妻子も餓え死するであらう。元來自分は謝儀を得んがために治療したのでないのであるから、どうかそれを意に介せず速かに歸つて田地を買戻し、妻子を養ふの資にしてもらいたい』

といつて之を受けない。然し利右衛門は肯かない、『恩を受けて之を謝せざるは人の道でない。申すまでもなく田地は農民の生命ではありますが人の大恩には替へ難い、枉けて受納して頂きたい』

と互に相譲ること多時、遂に兩人共感極り共々相手方の心根の美しいのに感じ入つて共に泣いたといふことである。かくてはいつまで経つても纏ることもないので遂に道仙の議によつて半は納め半は返し利右衛門に一兩を拂ひ一兩を惠まれ涙を流して拜謝し、その家を出て我が家へ急いだ。

所が家に残つてゐた母と金次郎の二人は、父の歸りが餘りおそいので氣にかゝり、遂に居たまらず金次郎は門の外に出て父の歸りを待つてゐると、父利右衛門が喜色を滿面に浮べよろこび勇んで歸つて来る。金次郎は『お父さん』といつて飛びつかんばかりに父のそばにかけより、『お父さんは今日は何がそんなにうれしいのですか』

と尋ねると、家に歸るや否や、母諸共にその日のありし次第を物がたり、『之でお前達を養ふことも出来る』といつてよろこんだといふことであるが、こんな有様で之を見ても金次郎一家がどんなに貧困に苦しんだか、といふことは十分察することが出来る。

ハ 金次郎の孝養 父の病氣は一張一弛、或は重く或は軽く、全くぶらぶらの有様であつた。そのため仕事も出来ず貧苦と戦ひ病と戦つて閻々の日を送らねばならなかつた。やつと十一歳の金次郎は少しなりと一家の生活の助けにと晝は山に行つて薪を取り、或は柴を刈り、夜はおそくまで繩をなつたり草鞋を作つたりして甲斐々々しく立働いた。

翌年金次郎が十二になつた時の暮に又末弟富次郎が生れた。母はその子の養育にも手が入るので益々一家の困窮は

増して来た。そのため金次郎は更に勇氣を出して仕事に精出した。弟の世話から父の看病のことまで夜に日をついで立働いたのである。病を養ふ父、困窮と戦ふ母、共に、かよい乍らもよく働いてくれる金次郎の骨折をどんなに感謝したことであらう。近在の者も皆金次郎の孝養に感心せないものはなかつた。

#### 4 金次郎の孝行(三)

イ 父の病死 母と金次郎との二人は、額に汗して血のにじむやうな努力をつとけながら一日も早く父の病氣の全快せんことを神佛に祈らぬ日とはなかつた。然し乍ら父の病氣はやつぱり依然として全快には向はなかつた。一時治つたこともあつたが、暫くして再發して其の後は日一日と悪い方に向いて行つた。母と金次郎とは看病至らざるなく心をこめてその全快を祈つた。然し父の病は決して樂觀を許さない有様であつた。

かくて寛政十二年九月二十六日病勢俄かに革りとうとう父はその妻と三人の子供を残し、心を後にひかれ乍ら息を引とつた。時に父は四十八歳、金次郎は十四歳、第三郎左衛門十一歳、末弟富次郎は二歳の乳呑子であつた。母は年僅かに三十四歳の未亡人となつてしまつた。

家には元より何一つ貯もなく一家の悲嘆の上もなく母は涙を呑み、金次郎は天を仰いで慟哭し、よその見る目もあはれなる有様で、村人達もこの様を見ては流石にもらい泣をせずにはゐられなかつた。

それに又此の年の六月には洪水があり、田畠を流された後のこととて、全く泣面に蜂の譬にも増して其の困難は何とも名状することは出来なかつた。されば茲まで、どうがなうがなして保ち得た祖父銀右衛門名義の中田一畝歩下田六畝二十八歩合せて七畝二十八歩を終にこの年の十二月、僅に一兩三步で賣拂はねばならぬ有様であつた。かくして一通りの整理はついたが繊弱き女手にて乳込見をかへて、十四歳の子供を相手にして働いてゐたのでは到底一家



四人の生活を支へることは出来ない。

母の決心 健氣な母は一家四人の生活を支へ、剩へ二宮家再興てふ夫の遺志を全うせんとの堅き決心があつたが然しそれをどうして達成しようかといふことになる。色々の障碍があつて思ふにまかせない。特に乳込見をかへてゐるたのでは何の仕事も出来かねる。そこで甲斐々々しくも母は決然と起つて大なる決心をしたのである。「富次郎をかへてゐるは何も出来かねる。いつその事他家へ預けてしまつて存分金次郎と二人で働いて見よう。」と堅く決めた。然し、いざとなると愛着の絆をどうすることも出来なかつた。然し、このまゝでは何とも仕方がない。煩悶に煩悶の末、愈々最後の決心をした。かくてこの事を金次郎に打明けると金次郎もどうしたらよいものかその判断に迷つた。然し父と別れて間もない今日、涙もかはかざるに更に弟と別れるといふことは到底忍ぶことの出来ないことであつた。

「それでは富次郎も可愛想だし、私なども一層さびしくなりませう」といつて引とめたが母は「いかにも富次郎を他家へやるといふことは不憫であるが、今はかうでもせねば外によい方法も考へられない。富次郎をさへ預けてしまへばお前と二人で精一杯働けるから、さうすることにしよう」かくして母は自分の懐の中に育て、来た富次郎を親類にあづけることに決心した。金次郎も母の堅き決心にほだされてやむなくそれに賛成した。

ハ 金次郎母の心を安んず それから母は富次郎を抱えて西柏山村にある親類、奥津甚左衛門の許に走つた。かくて來意を「かくく」と告げて依頼すると、金次郎一家の事情は十分知りぬいてゐることなので、「それは無理もないことだ」といつて心よく預つてくれた。

懐の中に乳房を含ませた富次郎を自分の乳房から引きはなして他人の手に渡すといふことは、いざとなると流石に

堪へられない事であつた。然しまだ堅い決心のほとほりのさめない時なので、こみ上げる恩愛の情をやつとこらへて後に心は引かれ乍らも家に歸つて行つた。歸ると金次郎に向つて「あ、之から一生懸命力のつゞく限り働くことにしよう」かうして大なる決心の色をその顔に見せた。

晝の間は仕事にまぎれてそれ程でもなかつたが夜になると母は流石に富次郎の身の上が案ぜられ、乳房のはるにつけ、胸の淋しさにつけ、思切ることが出来ない。子を育てる母性としてはさもある事であらう。母は眠らうとすればする程、目がさえて来て寝つかれない。涙が止め度なく流れて来る。側に寝んでゐた金次郎は、母のこの有様を見てとつて「母上にはどこか身體でもお悪いのではありませんか」と尋ねると母はせき出づる涙をおしかくし、氣をはり上げて、

「いや別にどうもあるわけではないが乳房が張つて眠れないまでです。二三日も我慢したら治ることです。」

と答へた。金次郎は母の心の中をそれと察した。そして今更の如く母の慈愛深きに感泣せずにはゐられなかつた。そして金次郎が思ふには「富次郎をあ、して他人に預けて母の心を痛めるといふことは誠に忍び難いことである。どうかして富次郎を連れ戻す工面はあるまいか」と種々考へるのであつた。その末、この上は一つ自分が今よりも精を出して働くより外に道はない。さうすれば母上も安心して富次郎を連戻ることにしてくれよう、かくて金次郎は、「お母さん。富次郎だけ一人あ、してよその家に預けておいては可愛想でなりません。私はいつも富次郎の様子ばかりが心にか、つて却つて仕事もはかどらない有様であります。たつた一人の赤ん坊を連歸つたとて別にさう、ちの生計がどうといふこともありません。この上は私が今までよりも一層働いて薪をとつても弟を養ひ上げるやうに致します。そしてお母さんの仕事のかはりも私が精出して働きますからどうぞお願です、富次郎を一刻も



早く連れ戻して下さいませ。」かう云はれて、母は今までこらへにこらへてゐた切なる情が一時にこみ上げて来た。母は金次郎の健氣な心に拜まんばかりにして、

「金次郎よ、よくも云つてくれました。お前がそれ程まで云つてくれるならば富次郎を早速連れ戻すことにしよう。わたしも決心して富次郎を預けはしたものの、夜になつて見れば乳房は張るし、どうして富次郎がこの一夜を明かすことかと思ふとどうしても寝つかれない。それではお前の云ふ通りに今からすぐと行つて連れ戻すことにしよう」

母はもうはね起きてゐた。そして早速用意をさへ始めた。金次郎も母の心中は十分察し乍らも、

「今夜はもう十二時も過ぎて大分夜もふけました。夜が明けましたら私が早速行つて連れて歸りませう。それまでお待ち下さい。」と、止めたけれ共母は、

「いや／＼お前が薪をとつてまで働いて弟を養つてやらうといふのに夜連れて歸る位は何でもありません」と云ひ／＼家をとび出してしまつた。そして夜陰奥津の家をたゞき事情を話して富次郎を引とることにした。狂せんばかりに思焦れた母が富次郎を我が懐に引とつて乳房を含ませた時の喜びは又どんなにあつたことであらう。それから富次郎を抱へて連れ戻りその夜は一家四人母をまん中にして涙を流してよろこび合つた。——こゝで兒童用の挿繪を見せたがよい——

二 金次郎の働き その後の金次郎の働きは實に目ざましいものであつた。そして、今はたつた一人の母に心から孝養をつくし、第二人の世話をして、出来るだけ母の心を安んぜんことにつとめたのであつた。——その働振りの詳細については次課仕事に勵めにゆづるがよい——

乙 訓辭と格言

1 金次郎の例話考察

次の如き問を發し、一は以て金次郎の例話を復習し、一は以て、金次郎が眞に父母の大恩に感じて、父母の手助けをし、その心を慰めたその精神を捉へさせることが大切である。

- 1 金次郎はどんな家に生まれましたか。
- 2 そのお父さんはどんな方でしたか。
- 3 そのために家のくらしがどうなりましたか。
- 4 家のくらしが傾きかけてゐる時どんな事が起りましたか。
- 5 そのため金次郎の家はどうなりましたか。
- 6 その後父が病氣になつた時金次郎はどんなにして手助をしましたか。
- 7 お父さんがゐなくなつた時、母は末の子をどうしましたか。
- 8 その夜金次郎は母に何といひましたか。
- 9 金次郎の行で一番感心する所はどんなことですか。

2 訓辭と格言と實際生活の指導

(金次郎の行について各自その感ずる所を述べさせ、それをきつかけとして訓辭に入る。)

金次郎が子供乍らも父母の難儀を心にかけて色々手助けをしたことは誠に感心なことである。我々は父母の大恩を心感じて常に金次郎と同じやうに、何か自分で出来ることは之を進んで行ひ、父母の手助けをするやうにせねばならぬ。金次郎のやうに貧乏でない人も世の中には澤山あらうし、又家の事情は金次郎とは大方皆異なることであらう



から、手助けをする其の事は異なるにしても、よく父母の命に従ひ、進んでその手助するといふことは、大事なことで之こそ立派な親孝行である。

又金次郎が、母が富次郎を親類にあづけてなけいてゐるのを察して、自分から一層働いて母の心を慰めようとしたことも大變感心な話である。我々はいつても、父母に心配をかけないやうに、進んでその心を安心させるやうにすることが大切である。それではどんなことをしたら私たちの父母は心配されるであらうか？又どんなことをしたら父母は安心されるであらうか？——各兒に發表——各よく考へてそれを實行することが大切である。

昔から『孝ハ徳ノハジメ』と言つて、親に孝行をすることは人間がふみ行はねばならぬ道の一番はじめであるといはれてゐる。それで孝行の出来ない人はどんなよい事をしようとしてもそれは出来ない。人がほんとうに人としての道をふみ行つて行くには先づ第一に孝行の道を全うせねばならぬ。實に孝はすべての道德のはじめである。

以上の如き訓辭を兒童の實際生活とよく結合し、或は考へさせ、或は發表させなどして説いて行く。

## 六 参 考 資 料

本課及次の第四第五課の二宮尊徳翁の例話の解説については次の如き参考書に據つた。特に◎印のものを最も多く参考した。

富田高慶著◎報徳記、井口丑二著◎二宮翁傳、留岡幸助著の二宮翁逸話、福住正兄述大澤彦一記、二宮尊徳略傳、津田光藏著二宮尊徳と現代、齊藤高行著報徳外記上下、岡野代忠著報徳教、井上愛之進報徳教の精神、二宮尊親著報徳分度論、富田高慶報徳論中里彌之助著二宮尊徳言行錄。

## 第四 仕事にはげめ

### 一 目的及び教材觀

本課は前課に引續いて二宮金次郎の例話を説くことによつて『仕事に勵みて怠慢ならざるやう心掛けしむる』を以て目的とするのである。

由來生を此の世に享けて居るものは一切必ず生きて行かんことを希はぬものはない。草木鳥獸皆さうで一も之に漏れるものはない。而して生きるといふことはその根本に立ちかへつてながむれば何れも皆自らの努力に待たないものはない。即ち自らが營み、自らが養ひ以てその生を完うしてゐるのである。親に抱かれる嬰兒と雖も尙且自らの力によつて乳を呑んで自らの營みをなし以て自らを養ふのである。然しその趣を更に仔細に省察することになると自らの努力は人々否、萬物一切相互に相關係し相扶け相待つて凡百萬物の生が全うせられて居ることに氣づかざるを得ない自力を以て得る一切のものも實は他の努力によつて我に與へられてあればこそその與へられたものを自らの力によつて享受し得るのである。自ら乳を呑む嬰兒は實に母の努力によつて與へられてゐるのである。米を購つて生を全うする我々は、自らの努力によつて得た金錢を以て自ら購ふが如きも、實は米を購ふべく農夫の努力によつて與へられてゐるのである。

かくてこそ一切の萬物はその生を全うしてゐるのである。即ち一切、無限の大恩によればこそ一切の生物はその生



を全うしてゐるのである。この宏大無邊な所謂無限恩なくしては一切はその生を全うし得ない。かく考へて來た時、吾々は之に報ゆる所なければならぬ、而して之に報ゆる方法は唯一つの道しか許されてない。それは實に自らが努力を捧げて報するより外にない。農夫が生を全うするの一切の恩であるから之に報ゆる道は農をいそしんで生活の糧を世に捧げることであり、吾々教師は教育の道に眞に精を出してその恩に報する。この報恩の精神が漲つて行はれば愈々社會はうるはしいものとなつて來る。

かくして一切吾々がこの恩に報する道は實に各々の執るべき『仕事に勵む』ことであり、之によるより外に報恩の道はない。この意味に於て、坐せる紳士よりも立てる農夫はどの位尊いものであるか知れないし、仕事に勵むことの尊さが深刻になつて來る。

## 二 教材系統

尋一、なまけるな。 尋四、仕事に勵め。 尋五、勤勞。 尋六、勤勉。 高一、勤勉。 高二、習業。

## 三 指導要項

### 甲 金次郎の例話

- 1 金次郎堤防工事に働く——共同事業の勤勉——
- イ 酒匂川の氾濫
- ロ 金次郎堤防工事に精を出す

ハ 金次郎草鞋を作つて之を配り人の勞を謝す

ニ 不休不息よく働く

### 乙 仕事にはげむべきことの訓辭

- 1 金次郎の例話考察
- 2 仕事にはげむべきこと
  - イ 教室の掃除其の他共同の勤勞に喜びて服すべき事——教師用書注意一——
  - ロ 總て事にぶしようなるべからざること——教師用書注意二——
  - ハ 其他

## 四 指導計畫

- 1 先づ金次郎の仕事に勵んだ例話を説き、之に因んで仕事に勵むべきことを訓辭し、かくて日常生活の指導をするやうな順序で取扱つて行くがよからう。
- 2 金次郎の仕事に勵んだ例話は之を分けて考へると二つの方面になる。その一は公共共同の仕事に精を出した事と、一は家業に勵んだ事との二方面である。その何れの方面もよく説いて聞かせるがよい。特に注意を要し、且つ力を入れねばならぬことは家事の都合上己むを得ないやうな事情にあると兎角共同の事業等には何とか申譯をしてその勞力を免れんとするものであるが、金次郎一家に於てはかくの如き困難な事情にあり乍ら尙且つ共同



事業へも出て、しかもその力の不足なることを氣の毒に感じ草鞋を造つて人に分配し以てその不足を償はんとした尊い精神を十分に味はしめることが大切である。

- 3 勿論本課は前課に於て説いた所と關係連絡をつけ且つ前課に述べた彼の一生の人爲りにも考へ合せて、十分にその仕事に精を出した精神について理會せしむる所がなければならぬ。
- 4 方法は例話は教師の説話によることが最もよく、訓辭日常の生活指導については彼等の實際經驗と連絡をつけ共學的に且つ説き且つ指導するがよからう。

## 五 教材解説・説話要領

### 甲 金次郎の例話

#### 1 金次郎堤防工事に働く——共同事業の勤勉——

4 酒勾川の氾濫 柏山村一帯の耕作地の真中を貫流する酒勾川はいつもよく氾濫するのでこの流域に亘る一帯の村人たちはこのためにいつも悩まされたものである。堤防が切れる。耕作地が荒される。誠に困つたものであつた。それで何より大切なのは川の兩側に築いた堤防で之が切れると何はさて置き、先づこの堤防の繕修をせねばならぬ。そこで村人達には一つの規約の如くに堤防が切れると戸毎に一人づゝ出てその作業に當り次の氾濫に備へた。

そこで金次郎のうちでも父が毎年のやうに幾日もこの工事に出行つたものである。

□ 金次郎堤防繕修に出て働く 所が金次郎が丁度十二になつた時のことである。又川の氾濫で堤防が切れてしまつ

たので堤防の繕修がはじまることになつた。所が困つたことにはこの時にはもう父は病氣のために到底この村の役目に出ることが出来ない。そこで僅か十二になつたばかりの金次郎は、健氣にも村のおつとめ大事と父に代つて出て行くことに決心した。上には短いはんてん着け、下には股引を穿いて細い肩に鋤を擔いで出て行つた。

僅か十二の金次郎は大人達の仲に交つて石を運んだり、土を運んだり、籠を編む竹を運んで之を割つたりなど一生懸命に働いた。然しどんなに力を出して働いて見ても、體は小さし、力はなし、仕事には不慣れであり大人の半分もの仕事すら出来なかつた。金次郎は之が臍甲斐なくしてしかたがなかつた。

「自分はかうして一人出て来て働いてゐるが到底一人前の仕事が出来ない。この大事な村のおつとめに誠に申譯もない事である、唯人様に御厄介になつてゐるだけである。何と考へても相濟まぬ次第である。」と一人嘆息したのであつた。

ハ 金次郎草鞋を作つて人の勞を謝す 一人前の仕事は出来ないにしても何とかして村の人達にこの恩を報ぜねばならぬ。色々考へた末、

「自分はこの弱い力でどんなに働いたとて、一人前の仕事は出来はしない。之は一つ毎晩家に歸つてから草鞋を作つて村の人達に差上げよう。」

かう考へつた彼はその晩から夜中に至るまで精出して草鞋を作つた。そして毎朝誰よりも早く工事場に出て行つて、来る人毎に、

「私は未だ子供で人の半分前の仕事さへも出来ません。それでも父は病氣のためにこの工事に出て働くことは出来ません。私は毎日々々皆さんの御厄介になつてゐるばかりであります。それでも皆さんはよく私の身の上を思つて下さ



つて一人前に思ふて辛棒して下さいます。誠に有難い次第であります。何かその御恩報じにと思つたが子供の事故精一杯働いたとて一人前の半分の仕事も出来ません。そこで御粗末乍ら草鞋を作りましたからどうぞ之でも穿いて御辛棒なさつて下さいませ」

かう云つて皆の人に草鞋を一足づゝ配つてやつた。——こゝで教科書の挿繪を見せるがよい——  
晝の仕事ですら、たつた十二の金次郎にとつては必ずや並大抵のことではなかつたであらう。その疲れたからだもいとはず家に歸つてからは夜おそくまで草鞋を作つて、少しでも村のつとめを果し、村の人達に謝恩の心を表さうとする金次郎の心根こそ誠にいぢらしくも尊いものではないだらうか。普通の人であつたら「自分の家は病人と女子供ばかりでとてもこの工事には出られないからこらへてもらいたい」位の弱音をはいてその責任を免れんとする所であるが金次郎にはさうした不心得がないばかりか、日夜にその共同の責任を果さうと眞に是粉骨砕心の努力を拂つたのである。村人達は金次郎のこの心情にどんなに感じ入つたことであらう。

二 不休不息よく働く さうした強い責任感から働く金次郎であるから、どうがなして少しなりとも餘計に仕事をし  
て自分の及ばぬ所、自分の足らぬ所を補はねばならぬと考へ、皆の人達が働く時には勿論、少しの油断もなしに働いたが、皆の人達が茶を呑み、煙草を吸つて休む時でも彼一人は、及ばぬ所を補ふのはこの時とばかりに石を運んだり杭を運んだり打込んだりして働いた。

村の人達は、

「金次郎よ、お前も人の休む時にはお茶でも呑んで休んだらよいだらう。小さいからといつてさう休みもせないで働くにも及ぶまい。」

といつてとどめても、彼は頭を横にふつて、

「いや、私には一人前の半分の仕事さへも出来ないのですから、こんな時にでも補ひをつけねば相済みませんから」といつて力の限り働いた。そのため金次郎は外の人に仕事及ばない／＼と思つて働いたが實際は土や石を運ぶことなどは他の大人たちにも決してまけない程の仕事をしたといふことである。誠に感すべき限りではないか。

## 2 金次郎は家業に精出して働く——家業の勤勉——

1 一家の貧困その極に達す 金次郎の家は、始は可なり富んだ家であつたのに父の代になつて漸次傾きかけ、そして金次郎が十一歳の時父を失つてからは一層貧困に苦しむやうになつた。當時金次郎の一家がどの位困窮してゐたかについては次の如き挿話がある。

隣村、堀内村に毎年正月の行事として神樂舞の催がある。そして戸々を廻つて米や錢を請ひ、神樂を舞はしたうちは錢百文を與へ、何も舞はせぬものも十二文だけは之に與へる習はしとなつてゐた。さてその一隊が近隣に来て笛や太鼓の音が頻りに聞え出した。そこで母は十二文のお錢はないかと財布を見たが勿論お金らしいものはない。どこにないかと針函から神棚の隅々までも捜したが一文もない。所がその一隊がやつて来ればどうせ十二文のお錢はやらねばならぬ。それにたつたそれだけのお金がない。母の心配は一方ではなかつた。そこで金次郎にその話をすると、金次郎が云ふのには、この家に入つてゐて——家はまだ昔乍らのもので相當大きなものであつた——銅貨十二文のお金がないといつても彼等は之を信ぜないであらう。最早や致し方もありませんからすまない事ながら何と云つても返事をせないことにしませうとて、彼の神樂の一隊がやつて来ても親子四人が息の根を切らして黙つてゐる。彼の一族は戸を數回たゝいたが返事がないので「留守でもあらう」といつて出て行つた。この時の母と金次郎の心の中こそ誠



にあはれの極みではないか。

之を見てもどの位金次郎一家が其の日々の生活に困つてゐたかを推察することが出来る。

□ 金次郎家業に精出す 一家の生活がかくの如き有様であるから金次郎の働方といふのは並大抵ではなかつた金次郎の家では既に耕作地もなくなり、働くために一等都合のよいのは薪取りであつた。

柏山村の村落から一里位行くと箱根の明神山の麓になる、こゝら一帯の山はその頃、個人持の山ではなく村人が自由に入つて薪を取つてもよいことになつてゐた。それでいくらかでも取ればとつただけその人の所有となり、取勝ちの山であつた。まだ人々も今ほど多くない時代のことであるからさうした山もその頃にはそこ、にあつたことであらう。そこで貧しい村人たちは薪がなくなるとこの山へ薪取りに來たものである。

別に所有の山もない金次郎の家にとつてはかうした山に行つて薪を取つて町に賣るのが資本も入らず又すぐにお金になるのであるから一番近道でよかつた。

そこで金次郎は朝はまだ小暗い中に起き出でこの山に薪や柴刈りに出かけた。馬一匹持たない金次郎の家であるから取つた薪や柴は皆之を背に負つてお晝までには歸つて來る。そして晝食を草鞋がけのまゝ、すませて又山に出かけて夕方になると又薪を背負つて歸つて來るといふ有様であつた。こんなにして日には二回づ、山に出かけて薪や柴を取つて歸つた。そしてひまある毎に町に之を賣つて、生計のもとでとした。

夜は夜で決して遊んでゐない。薪取りは夜は出來ないので或は繩をなひ或は草鞋を作ることに精を出した。晝の疲れもいとほす夜の更けるのも知らずに一心に仕事にいそしんだ。

村人たちは朝早く小鉈を腰にして薪を取りに出かけるその甲斐々々しい姿を見、又肩の折れる程の薪を負つて歸つ

て來る健氣な金次郎の姿を見ては誰一人として感心せない人はなかつた。

又夜更けてから、

『トントントン』

と葉を打つ音を聞いた村人たちは皆その音に聞入つて金次郎の感心な心がけをほめないものはなかつたといふことである。

ハ 金次郎弟の世話をなす かうまでして働く金次郎は、更に又一方では母の心を慰めてやり、二人の弟の世話までもいとほなかつた。我が子ながらも、その母は金次郎のいぢらしい心掛けに感謝して、人知れず有難涙をこぼしてゐたといふことである。

誠に感すべきことではないか。

乙 仕事に勵むべきことの 辭

1 金次郎の例話考察

次の如き發問をして金次郎の例話を對象化し以つて之を批判しその精神を理會させる。

- 金次郎はおとうさんのかはりにどんな仕事をしましたか。
- 金次郎は仕事をしまつて歸つてからどんなことをしましたか。
- 金次郎は何と云つて皆の人たちに草鞋を贈りましたか。
- 金次郎は人の休んでゐる間にどうしましたか。
- お父さんがなくなつてからどんなにして家の仕事を働きましたか。



○ 皆さんは金次郎のした仕事で一番感心することはどんなことですか。

2 仕事にはげむべきこと

1 共同の勤勉にも喜んで服すべきこと

前の發問に對する兒童の答を受けて次の如き訓辭をなす——實際生活の指導をも含めて——

金次郎が、たつた十二の少年乍らも村のために大人達と共に働き、しかも自分の力の不足を感じて人の休む間も働き、尙夜は草鞋まで作つて、之を村人達に配つてどうかして一人前の責任を果さうとしたことは實に感すべきことである。私達はさうした村の仕事などには出ないけれ共、皆と一しよに、共同の仕事をせねばならぬことは澤山あります。例へばどんな事がありますか？——一々兒童に答へさせる——さう、學校のお掃除などもその一であります又學校園の御仕事もさうですね、そんな御仕事はどんなにしてやらねばならないでせうか？——答へさせる——やつぱり自分の仕事ですね。決して人の仕事ではない。それでどこまでも皆の人が自分の仕事として熱心にやつて行くことが大切であります。皆が熱心になつてそんな共同の仕事をすればその仕事はきつと立派に仕上るでせう。それに一人でも不熱心な人があつたらどうでせう。とても立派に仕上るものではないのです。それでこんな仕事はいつも自分のつとめと考へてやつて行くやうに心がけねばなりません。

□ 家事の手傳に勵むこと 金次郎の家は貧乏でしたから、あのやうに家のお仕事に精を出したのですが、我々は薪をとつたり、草鞋を作つたりするやうな事はなくともお家の仕事を御手傳ひせねばならぬことは少くありません、さあどんな事がありますか？考へてごらん下さい。——答へさせる——

そんなことはどうせねばならぬでせうか。之もよく分つて居りませう。よくお父さんや、お母さん、その他のお

云ひつけを守つて熱心に立働かねばなりません。

ハ すべて仕事に骨惜しみせぬこと その外私達のする仕事は澤山あります。例へばどんな事がありますか？——あけさせる——

こんな仕事に骨惜しみをするのが一番いけないことです。自分のせねばならぬ仕事はどこまでも熱心にするやうに心がけねばならぬ。さうすることが私達のつとめであり、すべての人のなすべき道なんです。

## 六 参考資料

金次郎の幼時公共の仕事に努力したことについては次の如き逸話が殘されてある。

### 酒匂川の『土手坊主』

報徳記によれば『小田原酒匂川其源富嶽の下より流出し、數十里を經、小田原に至つて海に達す。急流激波、洪水毎に砂石を流し堤防を破り、動もすれば田畑を押し流し、民屋を毀つに至る。年々川除堤の土工息まず。故に邑民毎戸一人宛を出して此役に當らしむ先生年十二より此役に出で以て勤む。』とあるが如く、幼少ながらも瞬間も翁の腦裡を離れなかつたものは此酒匂川であつた。翁の生存した天明年間より天保安政時代にかけて、洪水や飢饉が頻々として到り、此酒匂川も屢々溢れて田地田畑を荒した。翁の家も素は富んで居つたが、極貧洗ふが如くなつた原因の一は、確かに此酒匂川の堤防が決潰した事によるのである。そんな風であるから、少しく雨が降ると、柏山の村民は何れも心配して、如何にして堤防を守らんか、如何にして氾濫を防がんかといふ事に苦心焦慮した。翁は幼少の時からいたく此事に腐心し、假令雨の降らぬ時でも、屢々堤防に至りて、小破を繕ひ、大破を治め、始終堤防を其遊び場の如くして居つた。それ故に金次郎の居らざる時は堤防に行けとは、當時二宮家と親しく交はりしものゝ言ひ做した所であつた。そこで村民は誰いふとなく、翁を稱して『ドテ坊主』と綽名した。或年堤防が大破損して小田原藩の經費のみでは復舊しきれず幕府の



補助を求めて修築した事があつた。當時幕府よりは御普請奉行出張し、駕籠に乗つて堤防を検分せしかば、翁は當時猶幼少なりしにも拘らず、始終御駕籠の側に陪行して、遠慮なく嘴を入れ「其處をそうしては水あたりが強い此處はかうせねば蛇籠が持たない」など口を入れるので其都度附添ふ村役人は手に汗を握つたといふことである。幕府の役人をも恐れず敢て言を進むるに至りては「ドテ坊主」の勇氣も亦感ずるに餘りありといはなければならぬ。斯様に「ドテ坊主」の譚を研究する時は、其不名譽なる緯名の内に燦然たる公德心の光や己を捨て、他を益せんとする公共的精神が明かに見えて、不名譽の稱號は變じて名譽の賞讃となるのである。(留岡幸助氏『二宮翁逸話』)

松苗を堤上に植う

翁は十二三歳の頃或農家に傭はれたことがある。一ヶ年許りそこに居つて、雇人交代の際暇を請ふて歸宅された。その時主人が拾一枚と錢二百文とを呉れたので、翁は辱なく之を推戴き、恩を謝して主家を出られた。然るに道の左程にも遠からざるに、翁の歸りが遅いので、母親は大層待ちあぐんで居られた所へ、日没頃とヨックリ歸宅された。母親が歸宅の遅かつた譚を聞くと「暇を取る時に主人から拾一枚と錢二百文とを貰つて歸る途中、松の苗木を賣る者に逢つた。ところが其商人のいふに『今日は日没近くになるまでも買ふ人がなくて甚だ困つて居る。どうか買ふては呉れまいか』と云ふから、主人より戴いた二百文で其松苗を求め、年々困る水害を防ぐ爲に之を堤防に植ふるがよからうと思つて酒匂川の堤に植えて來たので、それが爲大層遅くれました。』と云はれたので母親は感涙に咽んで、我が子の善行を悦ばれたと云ふことである。今日では此の松の苗木が成長して堤防の固めともなり、柏山村の景色を添へる並木ともなつて居る。後年國民人の爲に献身的の働きをされた翁の幼時は、既に普通一般の人々と違ふ所がある。(留岡幸助氏『二宮翁逸話』)

## 第五 學 問

### 一 目的及び教材觀

學問といふことを本質的にながめて行けば、それは、それ自身、我々の生活の對象となるものである。といふのは之を半面から見れば、學問をして、之によつて、即ち之を手段として、自分の生活上の助けとするとか、人格の修養に資するとか自分の職業上に利用するとかいふ、利用厚生の意味をはなれて、それ自身、独自の目的對象たり得るものであるといふ意味である。だから、學問をせよといふことは、單にそれだけで意味をもつことになる、然らば、それは何故にかと問ふ者あらば、唯一言、人間の本來要求するものなるが故にと答へれば足りる。それ故に學問に精出すといふことは實に尊い人間本來の要求を満すといふことであるといはねばならぬ。

然し、學問は又かく第一義的にも見ることが出来るが第二義的にも亦尊いものである。即ち、之を利用し應用する價值として大切なのである。吾々が人生に生ける所以のものは實に自分として能ふ限りの努力を以て人生に貢献するといふことである。より大なる貢献を人生の上に全うせんためには學問の力に待たねばならぬ事の多いことは、前述べるまでもないことである。身を立て、家を興し、乃至は世を益して自分としての人生に於ける意義を全うするためにはどうしても今後に於ては相當に學問に通ずる所がなければならぬ。かくてこそ、人としての義務を全うし得る人となることが出来るのである。



かくの如く、學問は人生の上に寄與する所の上からも大切であるが人間としての人格徳育の上からも大切な事であつて、昔は寧ろ學問をするといふことはこの方面により多くを期待したもので、學問即修養と考へてもよい位であつたのである。學問はこの意味から見ても極大切なものといはねばならぬ。

要するに何れから見ても學問は大切で教育勸語にも『學ヲ修メ』と仰せ給ふた次第である。修身書の教師用書に本課の目的をあけて、

「學問に勉強して勝れたる人となるやう心掛けしむるを以て本課の目的とす」

といつてゐるが、之は寧ろ學問することによつて、徳性の上からも人生に働く上からも勝れた人となるやうにとの考であらうと思ふ。この上からも亦學問の大切な事は當然の歸結である。わけて兒童たちは目下殆ど學問の修養に努力を捧けてゐる時代であるから、よく斯の道に勵むやう指導するといふことは大切なことであらうと思はれる。

## 二 教材系統

尋一、よく學びよく遊べ。 尋二、勉強せよ。 尋四、勉強。 尋五、勉學。 高一、勉學。 高二、修學。

## 三 指導要項

### 甲 金次郎の例話

- 1 金次郎幼時の勉學
- イ 金次郎の勉學

ロ 『キ印の金』といはれるまで勉強す

ハ 『グルリ一遍』といはれるまで勉強す

ニ 何を勉強したか

- 2 伯父の家に於ける勉學

イ 引續く一家の不幸

ロ 金次郎の勉學

ハ 伯父の態度

ニ 金次郎の志愈々堅し

ホ 金次郎夜ひそかに本を読む

ヘ 學問の向上進歩

- 3 金次郎の出世

### 乙 學問の必要と我等の覺悟

## 四 指導計畫

- 1 先づ金次郎の例話を説くがよい。本時の例話を徹底させるには前二課即ち、『第三、孝行』『第四、仕事にはけめ』に於て取扱つた事項を復習し且之と連絡づけて取扱ひ特に本課に於ては彼が學問に熱中したことを説くやうにしたい。



2 特に彼が學問に熱中したことについては、かゝる貧困、かゝる不便、かゝる不幸、かゝる時勢の中にあり乍らも尙且つ奮闘努力、爲さざればやまざる意氣と寸陰を惜しんだ心持を十分に感得せしめてほしいものと思ふ。そして、彼のあらゆる事情と目下の兒童の境遇とを比較して考へさせ惠まれたる自分等は一層彼よりも勉強せねばならないとその意氣を振起せしめることが大切である。

3 金次郎のかゝる強き意志を更に一層明瞭にせんとする結果として往々にして伯父萬兵衛の金次郎に對した態度が極めて冷酷に取扱はれ勝ちである。その當時の時勢、當時の事情から推して考へるに、決してそれは悪意に出でたものとも考へられなければ、又故意に冷酷な態度を執つたものとも考へられない。この點から、ともすると伯父萬兵衛に對して氣の毒な有様に取扱はれてしまふのは如何にも同情に堪へない。尤も伯父萬兵衛をして、極めて冷酷な人物であつたやうに論じてゐる本もない事はない。然しそれでは少くとも厄介になつた金次郎の意志でもなく本人としてもさう人が考へる程冷酷なものではなかつたであらうと考へられる。注意をして取扱ふことが大切である。この點は修身書教師用書にも特に意を用ひるやう注意を記してゐる位である。

4 尙、修身書にも注意してゐるやうに伯父萬兵衛の家にある時は、金次郎は常に伯父に忠實従順に仕へたことも彼の學問に熱中したことを説くと共に、之に附帶して説くことが大切である。

5 最後の訓辭の場合は特に、

一 自ら進んで勉強することの大切なこと。

二 熱心なるべきこと。

の二ヶ條について十分訓辭することが大切である。

## 五 教材解説・説話要領

### 甲 金次郎の例話

#### 1 金次郎幼時の勉強

1 金次郎の勉強 金次郎の一家は父利右衛門が病に死んでから、愈々その生活が苦しくなつて來た。そのために金次郎の勞苦は一通りではなかつた。然し金次郎はかゝる困苦窮乏の中にあり乍らも、よく母に事へ弟を世話し、あまつさへ生活のために凡ての力を傾けて、柴を刈り繩を絞ひ薪を取り草鞋を作つて立働いた。その上、村の堤防工事は、年端も行かない身空で、いたいけな様子を乍ら大人の中に交つて立働いたといふことは、實に感じても尙餘りある所である。

然し金次郎のえらさは決してそれだけに止まらない。金次郎には内心非常に堅き志があつた。その志といふは何ぞといふに之こそ即ち學問の志である。金次郎は幼い乍らもやがては立派な人間になりたいものと、堅く決する所があつた。將來立派な勝れた人になるためにはどうしても勉強せねばならぬ。學問にはけまなくてはならぬ。

金次郎の心の中には實にこの勉強しよう、學問しようといふ心が燃えてゐた。こゝに金次郎の他の普通の人と異なる所があつた。その頃はまだ時勢が時勢で現今のやうに學問の發達もなく普及もなく、普通並みの考からすればたゞ食つて行ければそれで満足した時代であつた。然し、一度深刻に人生問題を考へるとなるとそれでは人間として満足出來ない。人間と生れたからには何とかして生き甲斐のあるやうな生き方をせねばならぬ。それには人間としてふむべき道をよく辨へなくてはならぬ。人のふむべき道をよく辨へんには學問するより外に道はないと、悟つた所に何とい



つても時勢が時勢であつただけに並々ならぬ所が彼の心中にひそむ事を覚えざるを得ない。

然し、金次郎の内心に燃ゆるやうな勉學の心は之を自由に満足することは出来なかつた。年端も行かない金次郎は幼い時からすぐに生活といふ苦しみと戦つて行かねばならなかつた。生活のために苦しいあえぎをつゞけなければならなかつた。そのために存分勉強のために費す時間のあらう筈もなく、一切の事情が彼をして自由に勉強することは到底許さなかつたのである。然し、心の中にさへ燃ゆるが様な熱心があればその方法は何とかつくものと見えて、この苦しい中にも尊い學問が日一日と遂げられ、一年と積まれて行つたのである。

ロ 「キ印の金」 その勉強の一端を語るに足る一挿話がある、それは今にその綽名を以て残つてゐる、綽名といふと大體ほめたものでなく、名譽なものでもないが彼の綽名こそは今にして見れば之ぞ實に千古に尊い値を有するものである。

その頃土地の人々は金次郎を稱して「キ印の金」といふ綽名で呼ぶ者が多かつた。「キ印」とは今でもよく云ふことで説明するまでもなく「氣違ひ」とか「狂者」といふこと、同意味の言葉である。だから「キ印の金」とは「氣違ひの金次郎」といふ意味であることはこゝに説明するまでもあるまい。

「キ印の金」とはよくもつけたものである。實に嘲笑冷罵の聲である。然し當時にこそ、それは嘲笑であり冷罵であつたのであつて今に至つて彼を見ると、それは一個金鈴の聲である。

世人は何故に「キ印の金」なる綽名を彼に附けたのであらうか。

金次郎は内心實に鐵をも焼きつくす程の熱烈なる勉學の志を有してゐるのである。然るに、彼には生活の窮乏と戦はねばならぬ苦しみがあつた。寸暇あれば働いて少しでも一家の生活の安定を計らねばならぬ。そのため、勉學のた

めに特に時間を設ける餘裕がない。仕方がない。彼の勉強は仕事をしながら本を読むことであつた。而して彼が仕事をし乍ら本を読むのに最も都合のよかつたのは彼の明神山へ柴刈りや薪取りに行く往復の途中であつた。されば彼は必ず仕事へ行くときには小鉈を腰に忘れないと共に懷中に本を入れて行くことを忘れなかつた。そして途中は大聲をはり上げて本を読んで行つた。山に着くと仕事に勵み歸路には又薪や柴を肩に負ひ乍ら手には本をもつて聲をはり上げて読み乍ら足を運んだ。口さがない村人たちはそれが一度や二度ではない、いつもこれを繰返すのであり、その上きたない身なりをした金次郎が遠慮會釋なく大聲でやるのであるから正氣の沙汰とは考へられず、誰云ふとなしに「キ印の金」といふやうになつてしまつたのである。

背には薪を背ひ手には本を持つて、唯一心、何等の邪心もなく、ひたすら學の道にいそむ金次郎のこの姿こそは心ある人にとつては實に此の上もなくけだかくも又尊いものに映じたであらう。唯、村人たちにはその尊い心を納得するだけの力を有せなかつたのである、こゝには申すもかしこきこと乍ら、明治大帝の御愛玩し給ふたといふ金次郎の置物が、今現在、明治神宮の寶物館の中に納められてある。之は金次郎が背には薪を背ひ、手には本を持つた姿のもので銅製の黒く光つたものである。之を目のあたり見たとき自ら頭の下るを覺ゆる。明治天皇も亦之を愛し給ひ時々之を表御座所に御飾り遊ばされたと云ふことである。

ハ グルリ一遍 尙又、彼の勉強の有様を物語るに十分な挿話として次の如き逸話が殘されてある。

今でこそ米を搗くのに電動機を用ひて殆んど人手を借ることはない、然し昔ほどの家でも自家用の米は皆之を白米にするために臼の中で之を搗いたものである、米をつくのには杵でつく。杵をトンと打ち下しては一足轉じて又トンと打下しては一足轉じ、白のまはりをトン／＼打ち乍ら一步一步はつて一様に米がつけるやうにする。



金次郎もよく白を搦いた。勉學の心に燃ゆる金次郎はこの白を搦く間にも何とかして本を読む方法はあるまいかと考へた末、遂に一つの方法を考へついた。それは白の近くに一つの本臺を作りその上に本を開いて載せて置く。かくてトントンと搦いてまはつて来て本臺の所に來ると本を一度だけ読む。かくて又トントンと搦いてまはる。その搦いてまはる間に讀んだ所を覚えたり意味を考へたりする。そして又本臺の所にまで來ると、本の次を又一度だけ読む。そしてその意味を考へたり文句を覚えたりして搦いてまはる。かやうにして白を搦き乍ら一まはりグルリとまはる毎に本を讀んだのである。このことがやがて金次郎の「グルリ一遍」の綽名となつてしまつて、誰いふとなしに金次郎とはいはず「グルリ一遍」といふやうになつてしまつた。時間もなければ、先生もない、金次郎の勉強は實に苦心の限りであつたがよくもかうした苦しい中でも勉強をつゞけたものではある。

ニ 何を勉強したか それでは金次郎は何を勉強したか。彼が最初に勉強したものは、先づ假名、名頭、實語教等から進んで遂に漢書に及び就中最も大學を好んで日夕之を讀誦したといふことである。是等の書籍類は現在柏山村の二宮兵三郎氏に保存されてあるが、彼の用ひた、大學の本は普通の朱註訓點であつて、所々に片假名にて解釋を施してある。之全く金次郎が手づから勉強の際に施した二つとない尊いものである。例へば精密メノコマカ、峻徳コウ大ノトク、文理スヂメ、君子ヨキヒト等がそれである。

然し、金次郎の勉強は決して本を讀むことばかりではなかつた。習字についても大分努力した、習字は困つた事に道の往復や、白を搦く間には出來ない、しかたがないからいつも草鞋や、繩を縛つて、夜業を終へて、深夜萬物皆寢靜つてから、唯一人起きてゐて一心にお稽古をしたものである。習字をするには紙や硯や筆が必要である。然し、金次郎の家は今や貧困と戦つてゐるので到底是等の道具を備へることが出來ない、習字をする紙を一枚求めることが出

來ない。それでも心に熱心さへあれば紙はなくとも、硯はなくとも、筆はなくとも習字は立派に稽古が出來た。では彼はどうして習字を稽古したか。

之も餘程考へた末のことであつたらうが彼は酒匂川に行つて綺麗な砂をとつて來て、それを文庫のカケゴの中に盛り砂を立派にかきならし、その上に杉の箸をもつて丁寧に稽古したのであつた。その時用ひた手本は祖父銀右衛門の書いたお手本で今尚二宮兵三郎氏に保存されて居り、その文庫は同地足柄下郡久野村田中重太郎家に保存されてあるといふ。

其の他又算術の類も勉強したといふから彼の勉強は本を讀むことから算術習字のことにまで及んだのである。

金次郎の身の上に比べると實に私等は贅澤この上もない。贅澤をしながらも勉強の進まないのは一體どうしたわけであらうか。苦しい勉強をしながらも金次郎の勉強はグン／＼進んで行つた。これ全く、彼の熱心からである、私達にはどうしても彼程の熱心が足りないからである。

勉強の事で、先づ何よりも大事なものは、その人その人の心の中にある熱心である。熱心がなければ、どんなよい先生にお習ひしても、どんな贅澤な道具を使用しても、又どのやうなよい本をもつてしても決して學問は進むものではない。お道具では學問は進まない。道具はなくとも心の中に熱心さへあればあんなにまで勉強は進んで行く、おそろしいものではないか。

## 2 伯父の家に於ける勉強

1 引續く一家の不幸 運の悪いときはどこまでも悪いもので金次郎の一家は又もや一大不幸に見舞はれたのは何といつても氣の毒の至りである。



金次郎一家が杖柱とも頼む父に死別したのは金次郎十四歳の時であつた。その後はたゞ一人の母を杖とも頼んで一心不亂に働いて来た。その唯一人と頼む母までもが病におかされることになつたとは何とした不幸なことであらう。しかも僅か十日間ばかりのいたづきで母は十六歳の金次郎を頭として十三歳の三郎左衛門、五歳の富次郎を残してこの世を去つてしまつた。泣くにも涙も出ない。叫ばんにも聲さへ出ない。唯呆然として母のなきがらに取りすがつて途方にくれるより外はなかつた。時に母はとつて三十六歳の分別盛りであつた。何とした不幸なことであつたらう。「天にも地にもかへがたき一人の親、杖とも柱とも頼む一人の母、どうかいま一度息をふきかへして我が一家に幸を與へ給へ」

と天に向つて金次郎は慟哭した。しかし過ぎし事は如何に神佛に祈つても到底歸るべきことでもなかつた。

かなしい葬儀もすませ四十九日も悲しき中に過ぎてしまつた。年かさの行かない三人だけではどうすることも出来ない。親族一同相談の上で、金次郎は伯父萬兵衛の家に、他の弟二人は母の實家川窪大兵衛方に引とられることになつた。萬兵衛の家は金次郎の家の隣にあつたのである。

□ 金次郎の勉強 萬兵衛の家に引とられた金次郎はそれから決して勉強するといふ心はさめなかつた。勿論そのために萬兵衛の家の仕事を怠るといふやうな心は毛頭なかつた。伯父萬兵衛は全く無學の百姓であつた。たゞ働いて生活をしてゐる村の人達と何一つ變つた所もない人で別に特別の教養もなかつた。そこで人としての仕事は先づ働くことより外にはないと考へてゐた。金次郎を引取つても金次郎をたゞ働かせればそれでよいと考へてゐた。それは決して間違つた考といふことは出来ない。時勢が時勢であるから無理もないことであるといふべきであらう。だから、先づ一人前の學問をして人間としてより立派な修養を積んで出来る丈け立派な人間たらんことを念頭に描いてゐる金

次郎とはそこに既に世の中を見る所が違つて居つた。この考の相違からやがて金次郎には思はぬ壓迫も加へられたのであらうがそれは決して伯父萬兵衛の悪意に出たわけではなく考への相違に依つた事であらう。

働くことに於ては誰にも劣らぬ程の修養と習練を我が家で積んでゐる金次郎は伯父の家に來てからも決してその家業に怠ることのあらう筈もない。唯、一心に働いて働きつゞけたのである。伯父がどんなにやかましい命令を發してもどんな無理なことを云ひつけてもおとなしく之に従ひ、決して之に反抗するやうなこともなければ骨惜しみをすることもなくゾンザイな仕事をすることもなく、どこまでも眞面目に正直に立働いた。

身を粉にして働き乍らも金次郎は決して學問をすることを忘れなかつた。金次郎のえらい所、普通の百姓たちと異なる所はこゝにある。彼は夜はいつもおそくまで行燈の火影で本を讀んだり字を習つたり又算術を習つたりして勉強した。

ハ 伯父の態度 金次郎の心のわからぬ萬兵衛には之が續に障つてしかたがなかつた。自分で學問をしたこともなく又どんなものであるかも理解はなし、全く閑人の贅澤事としか思つてゐない萬兵衛にとつては無理もない事ではあるとい、堪りかねたか、一心に勉強してゐる金次郎の所に立つて、

「一體勉強などして何になるのだ。貧乏人に學問は何より禁物、之程の贅澤は又とはあるまい。そのため不用の油は澤山入るし、外の仕事は出来ないし……少しはお前も考へて見るがよい。小さな身體で滿碌仕事も出来ないくせに贅澤な勉強のために大事な油を費すとは何事だ。そのやうな無用な事はやめたがよからう」

とひどくきめつけた。厄介になつてゐる金次郎には伯父の考がどんなに間違つてゐるやうとも之に反抗することなどは思ひもよらぬことである。



『お悪うございました』

と一言お詫びをして、おとなしく勉強をやめて床に就いた。

二 金次郎の志は愈堅し ても金次郎の勉強に對する志は、それ位の事に枯れてしまふやうなかよはいものではなかつた。何と叱られても自分が勉強して立派な人間になりたいとの考は間違つてゐるとは考へられなかつた。然し、よく考へて見ると伯父の言葉も無理とは思へなかつた。

『何から何まで伯父上の厄介になつて居り乍ら、それに夜おそくまで油を費す』  
としみじみ彼には考へさせられた。

『然し、唯今こそ勉強せねば一生つまらぬ人間で終らねばならぬ。何とか伯父上にも迷惑をかけないでうまい工夫はないものであらうか』

とよくよく考へた上、やつと考へついた事は、

『之は一つ、自分で働いて、油を求めらるに如くはない。それには仕事の餘暇に油菜を植え、菜種を採り、之でもつて油にかへることにしたらよいだらう』

といふことであつた。さう決心すると、彼は仕事の餘暇を利用してどこにか空地はないかと探し歩いた所二町程南の方を流れてゐる仙了川（千兩川とも書く）の土手が空地になつてゐる誰の所有でもない。金次郎は伯父の家の仕事の餘暇々々には必ずこゝに出で来てこの空地を耕した。そして僅かばかりの種子を播いたのである、かくて其の後は餘暇ある毎に手入を施すことを忘れなかつた。日に日に成長する油菜をながめた時、一面に花を開いた有様を見た時、金次郎の胸中には人知れずよろこびの叫びが擧げられてゐたのである。

いつしか夏のはじめ頃となり菜種も收穫の頃となつた。金次郎は之を取入れて見ると大凡そ七八升もの收穫があつた。金次郎は小躍りしてよろこんだ、早速隣村の油屋喜右衛門の所に行つて油とかへてもらつた。種一升到油二合替が當時の相場であつたから、かれこれ一升五合位の油が手に入つた。

『之だけあれば大分本が讀めるだらう』

と思ふと金次郎は立つてもゐてもゐられない位であつた。かくて金次郎は夜、暇になると、自分で得た油をともして勉強に一心になつてゐた。

然し、伯父萬兵衛はそも／＼勉強といふことが贅澤な事だと考へてゐたのであるから虫が好かない。貧乏人の子供に學問などは生意氣だ、位に考へて居つたものだから、

『又お前は本を讀んでゐるのか。百姓するのに學問が入るものか。自分で求めた油で勉強するのであるからよいやうなもの、學問する程の暇があるならばなせ繩でもなはないのだ』

かういはれると彼は又、おとなしく之に従はねばならなかつた。彼は一心に考へてゐる勉強をやめてしまつて又繩をなひはじめるのであつた。今時、父兄に勉強せよ、勉強せよとせき立てられるやうな時勢とは大變な違ひ方であるといはねばならぬ。

ホ 夜ひそかに本を讀む 然し、學問することを中絶するといふことは、どうしても彼には出来ない事であつた。今の中に學問しておかねば立派な人にはなれない』彼のこの信念はどこまでも金鐵の如く堅きものであつた。金次郎は晝は晝で力の限り働いた。又夜は夜で一心不亂に働いた。そして夜の仕事が終つてから皆の人が寢靜まるのをまつて一人こつそりと起き出で、行燈に火を點し光が漏れないやうに行燈に着物をかけその許で専心、心ゆくばかり勉強に



耽つた。

へ 學問の進歩 金次郎の勉強は一心不亂であつた。決してその場のがれのよい加減なものではなかつた。たゞ誠心誠意、専心獨學力行したのであつた。所が人の一心とは恐るべきものである。いつしか彼のこの一心がつもりつもつて、彼の學問は大分深くなり、又廣くもなつて來たのである。それについては次のやうな話が残つてゐる。彼の勉強がどの位徹底し進んでゐたかを知るのによき挿話である。

月日のたつのは早いもので金次郎もいつしか十八歳の年となつてしまつた。金次郎はその年の二月、即ち彼が十八歳になつた年の二月である、彼は二ヶ年の永い間の厚恩に心から感謝の意を表し乍ら伯父の家を辭し親戚に當る岡部伊助方に仕へることになつた。伊助の父は名右衛門といひ、土地のもの知りで學問も相當にあつたので、時々村の子供等を集めては本の講義などもして聞かせる程であつた。又時々、學者を招いて來て村の人々を集めて本の講義をさせる事も屢々あつて、村には一寸稀に見る心がけのよい人物であつた。所が學者の先生がその家に來て講義をする時には、金次郎は暇ある毎に之幸と縁先にゐて之を立聞するのが常であつた。金次郎としてはありさうなことである。又伊助が講義する時でも暇さへあればやつて來て之を聞いた。所が、もとゞ伊助は學者を以て世に立つてゐる人ではないから、時々本の講義に困難な所があると、之が説明に困つてしまふことが多かつた。すると、金次郎が横から口を入れて、之を説いてやつて伊助を驚かせる事が度々あつたといふことである。金次郎の勉強が、どの位進境を見せてゐたかはこの話で察する事が出來よう。

### 3 金次郎の出世

岡部伊助方へ一ヶ年奉公し、更に二宮七左衛門の家に一ヶ年仕へ、かくして金次郎は年二十歳になつた。是まで彼

は洪水の爲に或は埋没し、或は荒蕪に歸してゐた土地を開墾し、人が捨てたる苗を拾つて之を植え、その收穫を一家再興の資本とした。最初に之を行つたのが彼が十七歳の時であつて、この時租一俵餘を得たがこの後年々之を増殖して行つたのであつた。

二十歳になつた時には、既に奉公の給金や、その他、右のやうにして働き出して得た貯へも相當に出來たので遂に一家再興を決意し豫ねて入質してあつた田地九畝十歩を金三兩餘にて買戻した。かくて、かねて四ヶ年の永い間空家にして置いた元の家に歸つて來た。四年といへば可なり永い年月である。庭には雜草が生茂り、屋根は朽ち、壁は落ちて見るかきもなくなつてゐた。金次郎は庭の雜草を取り、屋根や壁を修覆して、こゝに愈々一家再興の基礎を固めることが出來た。

かくて金次郎は夜に日をついで、それこそ一生懸命の努力をつゞけて働いた。そして三ヶ年にして田一反歩を買ひ、三十歳の時には更に一反五畝歩を買ひ、十年を出でずして金次郎は年來の宿願二宮家再興のことが愈々完全にその緒についたのである。

かくして嘗つては「キ印の金」と冷笑した村人たちも「グルリ一遍」と嘲笑した人々も、金次郎のまのあたりに見るこの出世に驚かざるを得なかつた。先の冷笑は尊敬となり、前の嘲罵は驚愕となつたのである。

かくして彼の勝れた人格は次から次に喧傳され、遂に小田原侯の家老服部家は非常に借財がかさみ財政全く困難なため、この復興整理を金次郎に依頼することになつた。時に彼は僅かに二十三歳、金次郎は誠心誠意之に當たり遂に五ヶ年の中に之が整理に成功して、一文の借財もなくなつてしまつた。又下野の小田原藩侯の分家宇津家の櫻町采邑が全く荒廢に歸し、幾度かの復興事業も失敗に終つてゐるのを金次郎の努力によつて完全に復興し、彼の人格感化は愈



々偉大なものとなつたのである。

更に彼の學問は愈々進境を見せ多くの著書となつて現はれた。著はす所實に二千五百冊の多きに及んだ。かくして學問德行二つ乍ら人に勝れ人のために、はかること非常に多く、安政三年十月二十日この世を去るや天下の人々は齊しくその死を悼み、相模國小田原城跡と下野國今市との二ヶ所に報徳二宮神社を建立し―共に縣社なり―その遺徳を傳へ、今や金次郎は神として世の尊信を集めその徳化は今日に至るも尙愈々盛になりつゝ、ある有様である特に彼の教を報徳教と稱し、その教によりて世を教化せんとする報徳社又は報徳會等の團體が今日日本全國各地に組織せられ、愈々その徳化を廣く且つ深くなしつゝ、あるのは彼の人格の偉大を物語るものといふべきである。

### 乙 學問の必要と我等の覺悟

#### 1 金次郎の例話考察

次の如き問を發して金次郎の例話を批判し、その精神を捉へさせる。

イ 金次郎の行について最も感心することはどんなことであるか。

ロ それではどんなにして勉強したか。

ハ 母がなくなつた後には金次郎兄弟はどうなつたか。

ニ 伯父の家に厄介になるやうになつてから金次郎はどんなにして勉強したか。

ホ 金次郎の勉強したことについて自分達の身の上と比べて特に感心することはどんなことか。

ヘ 金次郎はしまひにはどんな人になつたか。

等について答へさせ、答に應じて或は補説し或は訂正して、金次郎がかくの如き貧苦の身の上であり乍らも、よく勉強

強したことについて十分理解させる所あらねばならぬ。

#### 2 勉強の必要と吾等の覺悟

金次郎がかくの如き勝れた人となつて人の尊信を受けるやうになつたのは全く金次郎が一方には家業に勉強すると共に他面よく學問に勵んだことにある。もし金次郎が貧苦にかこつて勉強する所がなかつたならば必ずやかゝる立派な人には成り得なかつたことであらう。

吾々はこの世に生れたからには立派な人となつて世のため人のために盡すやうにせねばならぬ。それにはどこくまでも自分の仕事に勵むと共に學問に勵んで自分の心をみがかねばならぬ。

別けて只今の私達は學問に勵むのがその仕事であり役目である。吾等はどんなにでも勉強する時間があれば、習ふべき先生もある。又父母も吾々の勉強することをどの位喜んでくれるか知れない。吾々は今勉強する事が大切である。金次郎はどのやうに勉強したくても、家は貧乏であり、習ふに先生もなく、時間もなくて思ふ半分も四半分程も出来なかつたが、彼の一心から、あれ程の立派な學者にもなり、人物にもなることが出来た。それに比べると我々はどのやうな幸福であるか分らない。吾々はこのやうな幸福な境涯にあるのであるから、その有難い恵みに對してさへもよく勉強せねば勿體ない事である。

## 六 參考資料

### 二宮翁年譜

天明七年

七月二十三日誕生、父利右衛門三十七歳、母ヨシ二十一歳。

### 第五學 問



寛政二年	四歳
同三年	五歳
同十年	十二歳
同十一年	十三歳
同十二年	十四歳
享和元年	十五歳
同二年	十六歳
同三年	十七歳
文化三年	二十歳
同四年	二十一歳
同六年	二十三歳
同七年	二十四歳
同十一年	二十八歳
同十三年	三十歳
文政元年	三十二歳
同三年	三十三歳
同四年	三十五歳

八月二十八日弟友吉生る。

關東大洪水家屋流亡す。

父大病、父に代りて徭役に出征。

十二月晦富次郎生る。

六月洪水田島再び流亡す、九月二十六日父歿す、四十八歳、十二月地所賣渡證あり。

正月太神樂に與ふる錢なし。

四月四日母歿す、三十六歳、六月洪水田島三たび流亡す。金次郎は伯父萬兵衛方に、友

吉十三歳富次郎四歳共に川窪方に行き家亡ぶ。

菜種を作り稻を植ゆ。

田九畝十歩を買戻し一家再興す。

六月六日富次郎天す九歳。

此の頃中島キノ女を娶る數年後離婚。

服部家整理着手。

服部家成功二月七日歸家。

友吉三郎左衛門養子となる。

農業出精に付大久保侯より褒詞を賜ふ。

四月二日岡田波子(十六歳)を娶る、十一月量器改正、賞として一年の貢を免ぜらる。

正月伊勢參宮、九月彌太郎生る、外四人と櫻町見分命ぜらる。

同五年 三十六歳

同六年 三十七歳

同七年 三十八歳

同九年 四十歳

同十二年 四十三歳

天保元年 四十四歳

同四年 四十七歳

同六年 四十九歳

同七年 五十歳

同八年 五十一歳

同十年 五十二歳

同十一年 五十四歳

同十三年 五十六歳

同十四年 五十七歳

弘化元年 五十八歳

同二年 五十九歳

同三年 六十歳

同四年 六十一歳

櫻町典役を命ぜられ九月六日赴任十一日一應歸去。

三月二十八日舉家櫻町に移る。

文子生る。

徒格に取立て切米五石二人扶持を給せらる。

三月成田不動に参籠。

櫻町成功す尙手戻り無き縁命ぜらる、青木村の急を救ふ。

飢饉を豫見し領民を救ふ。青木の堰を修む。

大久保忠真侯大文字を賜ふ。門井辻二村仕法。

正月十一日櫻町論功行賞、鳥山飢饉救助。

二月金千兩賞賜、小田原飢民救助。

富田高慶入陣。

門人大に進み在塾常に百を下らず、菲山江川氏に招かる。

十月三日幕府普請役格に任じ切米三七俵三人扶持を給せらる印旛沼を見分す。

七月十六日陣屋附を命ぜられ眞岡に移る。

日光神領起返方見込徴せらる。

相馬仕法着手。

日光仕法鑿形六十卷を献す。

五月二十六日東郷に移る、棹ヶ島其他仕法着手。



嘉永四年 六十五歳 春、文子結婚冬死亡二十八歳。

同 五年 六十六歳 彌太郎結婚三十二歳。

天保六年 六十七歳 二月十日日光仕法命ぜらる、十二月より着手。

安政三年 七十歳 十月二十日終焉。

明治十三年 政府二代の功を賞し尊親に金百圓を賜ひ、高慶を正七位に叙し、並金帛を賜ふ十月相馬

同 二十年 充胤『報徳記』を宮内省に上り天覽を賜ふ。

同 二十七年 八月十四日福住正兄其の著二宮翁夜話を宮内省に上り、天覽の榮を得。十一月十六日特

同 三十年 旨により二宮先生に從四位を贈らる。

同 三十一年 四月十四日小田原報徳二宮神社遷宮鎮座式を擧ぐ。

同 三十三年 十一月十四日今市の報徳二宮神社遷宮鎮座式を擧ぐ。

同 三十九年 十一月二日今市の報徳二宮神社に尊行及富田高慶を合祀す。

同 三十九年 六月九日今市の二宮神社縣社となる。

十一月東京に於て五十年祭を舉行す。次で報徳會組織成る。十月十日小田原の二宮神社

縣社となる。

金次郎伯父の家にありし當時の勉學について、

——井口氏著二宮翁傳中より——

金次郎夜々燈下に書を讀むに萬兵衛油の浪費を憂ふ。金次郎乃ち其の意に從ひて之を中止しやがて村内仙了川堤防の空地に油菜を植え夏に至りて豐實を得たり。乃ち堤上に至り自ら謂へらく『之を收穫するに菑を要すれ共之を借り

來るは本意に非ず。天祖天神は獨力にてこそ豐葦原の瑞穂の國を開發し給ひけれ。我豈人に借るべけんや、人の初めは裸體にてこそ生れたりしものなるに、我には身に一衣あるさへ過分なれ。いでこれを以て菑に代へん』と、赤裸々となつて衣を地に敷き菜種を扱きて其の上に揉む。村童之を望み見て『アレ金次が裸體になるよ。例のキ印が何をするぞ』と集り來りて之を見る。彼は固より平氣にて菜種揉み終りて七八升を得、そのまゝ之を衣に包みて油商の店に走りゆき以て種子油に換へ以て再び燈下に書を讀む。然るに萬兵衛は猶も容赦せず、燈油は自ら辨すと雖も讀書の爲に夜業を爲さざらば不都合なりと責む。金次郎乃ち夜々索綯ひ菑を織り、夜更けて人定まりて夜私に起きて燈に衣を掩ひ讀書以て曉に至ること屢々ありき、云々。  
以て金次郎の意氣を見ることが出来る。



## 第六 整頓

## 一 目的及び教材観

日常の實際生活の上から、「平常物を整頓しておくことの大切なるを教ふる」ことは大切な事で、本課の目的とする所は實にこゝに存する。俚諺に、「人一生の半分は物探し」といふ意味のものがあつたやうに記憶してゐる。成る程よく考へて見ると人一生の半分は物探しではないかと肯かされることが多い。我々は一寸外出するでも、やれ靴下はどこだ、帯皮は、ネクタイは、帽子はといふ有様で、大騒ぎしないと外へも出られぬ始末である。甚だしいのになると停車場の改札口に来てから、洋服のポケットを總探して乗車券を探り求めてゐる人すら見受ける。かう考へて來るとどうも人一生の半分は物を探して暮すやうな氣もする。

特に反省の力の鈍く、日常の實際経験の乏しい兒童は、物を始末することに於て、極めて無頓着の状態である。然し、物の整頓とかいふやうなことは多く習慣の結果にまつことが大であるから、特に習慣の可塑性の大なる年少の時代にかうした良習慣を養成して置くことは頗る大事な事であるといはねばならぬ。

物の整頓をよくするといふことはそれだけ仕事の能率を高めるものである。人一生の半分を無駄な物探しに費すとは一個の比喩であり誇張であるとするも、兎も角冷静に考へて見た時、物の不整頓不始末がどの位吾々の仕事の能率を低下させる事であらう。吾々が生をこの世に享けてゐる本義が、自分にして能ふより大なる貢獻を人生の上に齎ら

すといふことであるならば吾々は常に、より能率の高い生活をして行くことが人生に對する義務である。この意味からも整頓を正しくするといふことは大事な事であるといはねばならぬ。

それと共に、物を整然と整へるといふことはそれが又心情の上にも少からず影響を與へ、その人の氣持をサツパリさせるものであつて之が又人格修養の上から見て極めて意義深いものである。

かゝる見地に立つて青少年時代の年少の時期にかゝる習慣を養ふやうに意を用ふることは大切な事であるといふべきである。

## 二 教材系統

尋一、始末をよくせよ。尋四、規律。尋五、主婦の務。高一、(女生用) 規律。

## 三 指導要項

## 甲 本居宣長の例話

## 1 本居宣長の爲人

## イ 本居宣長の誕生

## ロ 本居宣長の勉強

## ハ 宣長の學問

## ニ 古事記傳



ホ 宣長の功績とその光榮

2 本居宣長の整頓

イ 宣長の整頓

ロ 家人に對する訓戒

乙 整頓に對する心得

1 宣長の例話考察

2 整頓の必要

3 整頓の心得

### 四 指導計畫

1 實際授業に於ては、實際生活から入つてもよいだらう。例へば『皆さんは、靴下の始末が悪くてさかしたことはないか』、帽子の始末が悪くてさかしたことはないか』とか、兎に角自分の不始末から困難を感じたことを追憶せしめ、一體どうしたらそんな不都合は起らないでせうかなどの如くに進んで、これについては誠に感心なお話がある。それは本居宣長といつて今から二百年ばかり前の人であります。この人は大變偉い人であつて——とそ  
の略傳人となりを説いてその整頓に心がけたことの話をして行く。

2 すぐに例話から入つてもよい。今日から本居宣長といふ人のお話を致しませうといふやうに、

3 何れから入るとしても、本例話に於ては先づ本居宣長の人格の大様をうかゞはせ、その人格的背景の上に彼の

整頓といふことを描き出すといふことが大切である。

4 かくて整頓などいふことは兒童の生活事實であるから、單に一回限りの授業でなしに常に注意してその實際生活の指導をしてやるといふことが大切である。由來整頓といふやうな事はその人の習慣にならねばならぬ。習慣にまで徹底してはじめて本課本來の使命を果したものと見ねばならぬ。習慣にまでといふことになるとどうしても反復之に注意して『さうせずには居られない』といふ所まで徹底さすべきである。

### 五 教材解説・説話要領

#### 甲 本居宣長の例話

##### 1 本居宣長の人と爲り

1 本居宣長の誕生 本居宣長は今から凡そ二百年前——享保十五年五月七日——伊勢の國松坂に生れた。遠く祖先に遡れば桓武天皇より出でたる平氏の一流であるが、數代前にこの地に移り來つて商工業をするに至つた。父、小津三四郎右衛門定利の代には、愈々商賣繁昌し江戸にも多くの支店を有するに至つて土地の大富豪として目せられてゐた。父定利には實子なく養子を入れて家を嗣がせることにした。所が父定利三十五の時宣長が生れ、鍾愛限りなく、一日千秋の思で只管その成育を待ちわびてゐた。宣長は幼い時から利功な性で、八歳になると西村三郎兵衛といへる師匠につかへて手習を授けさせた。所が、父定利は宣長十一歳の時不幸にも江戸の支店にて客死したので、その後は商賣上の事は養子として入れた宗五郎(定治)に任せ、只管母勝子の手によつて育てられた。宣長は、後、岸江之中・齊藤松菊について四書を、濱田端雪に射、山田、宗安寺の住職に歌道を授かつた。宣長は人並勝れて、頭もよく、その



上學問に熱心なのでその進歩はメキ／＼として上り人も驚く程であつた。

□ 宣長の勉學 宣長が幼にして父に別れたことは、彼第一の不幸であつたが、再び彼は第二の不幸に遭遇せねばならなかつた。それは義兄宗五郎定治の死である。宣長が家業をよそに自分のすきな學問に熱中し得たのも全く義兄がその家業をついだがためであつた。それに義兄には子供もなくして世を去つた。時に宣長は二十一歳、當然宣長が家業をついで行かねばならない所であつた。然し、母勝子は到底宣長は商人としての器でないことを見抜いて、斷然、商賣を止めて學問をさせることに決心した。實に世にも稀なる賢婦といふべきである。當時は、家産も漸く衰へかけてゐたが、それをすつかり整理して遂に宣長は慈母勝子の命するまゝに意を決して、醫を以て身を立てんと、その道の修業に京都に上ることになつた。時に寶曆二年二十三歳の春三月、百花方に艶を競ふの頃であつた。京に上るや、醫學に入る階梯として儒學の研究に従はんがため、先づ堀景山の門に入つて勉學し、更に二十五歳の時典藥、武川幸順の弟子となり、其の家塾に寄宿して、醫藥の研究を遂げ、二十八歳の冬十月慈母の命するまゝ、幸順の許を辭して郷里松坂に歸り、やがて醫業の門戸を開くことにした。然し、一度、醫業の門戸を開いたが、それは母の命に従ひ且一家經營の資を得るに止まるもので彼の本心はどこまでも、學問に興味を有し、暇ある毎に、又應診の往復にも讀書に耽つた。

ハ 宣長の學問 當時學問といへば所謂儒學で支那の學問であつた、儒學を以て學問の精神と考へ、支那といへば當時衆望の的でもあつた。そのために日本の國を自ら東夷と稱した程であり、荻生徂徠の如き大學者すらも孔子の畫像に贊して自ら夷人物茂卿と記した程である。山崎闇齋がその門人に向つて「支那若し孔子を大將軍とし孟子を副將軍として我が國に攻め來らば諸子之を如何せんとする」と問うた所が一同顔を見合せて答ふことが出来なかつたとい

ふ話は有名である。宣長がまだ京都にあつて醫術を習ふ傍ら學問に熱中してゐる時（年二十七）始めて僧契沖の著書を見て大に感ずる所があつた。それから我が國古來の學問に興味を起した矢先、その翌年、賀茂眞淵の著書を読むに及んでいよくその志を堅くした。かくて眞淵が伊勢松坂に宿つたときその旅宿に訪ひ、遂にその門人となつた。時に宣長三十四、眞淵は六十七、眞淵は夙に古學の研究に没頭してゐたが、この事業は頗る困難で之が完成を見ずして既に老齡に達し餘命幾ばくもなきことを感ずるに至つた、この時才子宣長と會し、その非凡の才を看破し我が大事業を繼いで之を大成してくれるのは宣長を措いて他になきことを痛感し、此處に宣長を得たことを非常に喜び古學研究に對する注意を與へ且つ之を激勵した。その後宣長は醫業の傍ら國學の研究に全力を注ぎ治療に赴く途中駕籠の中にも決して本を手からはなさなかつた。

ニ 古事記傳 かくして宣長が生涯の心血を傾注した大事業は古事記傳の完成であつた。古事記傳は年三十五の時に稿を起し爾來三十四年の長年月を費して漸く六十九歳の高齡に達して完成したのである。古事記傳は古事記の註釋であつて卷數實に四十八、考證精確論斷明快千古の疑問を氷解し得たものが多い。（古事記とは我が開闢以來人皇三十四代推古天皇までの事を記したもので當時片假名平假名なく漢文の所々に邦語を挿入し我が詞で讀むやうに記してある本書は諸家の舊記古傳が年を経るに従つて亡佚し又虚偽に流るゝを憂へ天武天皇が博聞強記の稗田阿禮に古傳説を誦み習はしめられたものを元明天皇の和銅四年に博士太朝臣安麿が阿禮から聞きとつて筆記して出來上つたものである）宣長の著述は六十餘種の多數に及んでゐるが一として尊重すべからざるものはない。が然し古事記傳は實にその最たるもので之の著述を以て徳川時代に於ける國學は大成し得たと言つてもいい、位である。宣長の研究は凡て我が國體の善美なる所以を明らかにしたものであつて、



- 一 我が國は萬世一系の天皇統治し給ふこと。
- 二 嘗つて一度も外國に侮辱を受けたことのないこと。
- 三 他に比類なき神代の傳説を有すること。
- 四 人情風俗の醇厚なること。

等は特に宣長が明確にした諸點である。年六十一歳の時自ら自己の肖像を描いてこれに題して詠んで曰く、

しき島の大和心を人間は朝日に匂ふ山櫻花

と。しき島は大和の枕詞、大和心は大和魂といふが如く我が國古有の大精神である。『我が日本の昔から傳へられた所謂大和魂はどんなものかと問ふ人があつたら、それは丁度朝日に照り輝いてゐる山櫻花の花のやうなものであると答へよう』との意である。

**ホ 宣長の光榮** 宣長の國學研究の功績は實に偉大なものであつた。かの明治維新の大業の如きも亦この國學研究の力が與つて大であつた、宣長は享和元年九月二十九日七十二歳を以て歿したが、その功績の偉大なることは年を経るに従つて世人に認められ明治八年にはその功績を慕ふものがあつて山室山神社を建てて之を祭り、明治十三年明治天皇三重縣下御巡幸の砌にはその功勞を追賞し給ひ侍從富小路敬直を勅使として墓所に參向せしめられ、金幣を賜はり次で明治十六年には正四位を贈らせ給ひ、三十八年日露戰役平和克復御報告のため神宮御親謁の際侍從日野西資博を勅使として參向せしめられ從三位に御陞位の御沙汰さへあつた。宣長の光榮この上もないと云ふべきであらう。

## 2 宣長の整頓

**イ 宣長の整頓** 宣長はか程までの大事業を完成し上げた實に古今稀なる大學者であつた。彼がかく迄に偉大なる事業を完成し遂ぐるまでには彼の勉強努力は一通ではなかつた。寸時を惜しんで古今の書籍に目を通したものである。それであるから彼が集めた書籍は夥しい數に達した。彼が五十六の時に書齋の中においた彼の圖書目錄には百三十九部の書名が載せてある。この外に原稿あり、草稿あり、拔書あり、詠筆あり、その他を合すると實に澤山なものであつたのである。宣長は之等の藏書を一々丁寧に本箱に入れて秩序正しく整頓してゐた。しかも彼の整頓法は單に整然と列ねたといふだけでは決してなかつた。先づ書籍を國史、文學、漢學等と色々の部類に別け、本箱を明瞭に定めて何番から何番までの本箱は何の部の本、何番から何番までの本箱は何の部の本と、ちやんと之を定めて置いた。そして同じ本箱の中でも本の順序をしつかりと定めて置いて未だかつて之を違へたことはなかつた。それであるから如何なる小さな本を探し求めるでも決して時間を費すことはしなかつた。吾々は本といへば雜然と之を列べてゐるがために目の前にある本が見つからないでごつた返しをすることも際々あるが、宣長に限つてかゝることは決してなかつた。暗夜、燈なくとも手さぐりに、しかも自分の求める本を探し求め得たといふことである。誠に吾々の範とするに足る所である。

**ロ 家人に對する訓戒** かくて宣長は常に家人に向つて、『凡そ物は何でも之を探し出す時のことを思つて、收め入るゝ時に、心を用ふべきである。收める時は多少の勞ありとも出す時の速かなることをよしとする』と戒めてゐたといふことである。實に味ふべき言ではないか、吾々は用が終れば二度と同一のものは用ひないものとして大方は不始末に陥るものである。處が今必要といふ時になるとさあ大變である。家中大騒ぎをせねばならぬ。大騒ぎしても見つければよいのであるがそれでも見つからぬことさへないでもない。こゝに於て宣長がその家人を戒めた言は實に尊い言であるといひし胸にこたへる。吾々は物を始末するとき之を探し求める時のことを考へて始末するならば之を探し



求めるときは實に手輕であるに違ない。

## 乙 整頓に對する心得

### 1 宣長の例話考察

次の如き發問を試みて、宣長の例話を批判し、以て宣長の崇高な人格を景仰せしむる所がありたい。

イ 本居宣長はどんな事で名高い人ですか。

ロ 宣長は澤山な本をどうしておきましたか。

ハ 宣長は家の人にはどんな事をいつてきかせましたか、等。

右の如き問によつて兒童に答へしめ、或は之を補説し、或は深究せしめて、次の訓辭に入る。

### 2 整頓の必要

所が私達はよく物を不整頓不始末にして困る場合が多い。どうですか。

『皆さんは物を不始末にしておいて之をなくしたことはありませんか？』

——と問ひ、之に答へしめて、更に——

『それでは、その時どんなにしておいたならなくなかなかつたのでせうか？』

と疊みかけて、之について考へしめ、尙、

『それでは、物をなくして之をさがすのに大變困つたことはありませんか？』

『そんな面倒をなくするにはどうしたらよいでせうか？』

などの如くに考へさせて、常に物はよく之を整頓し、きまり正しく置くことが大切で、物を不整頓不始末に置

いては、

イ 紛失のおそれ多きこと。

ロ 破損のおそれ多きこと。

ハ 急の用に間に合はぬこと。

ニ さがすのに非常な時間と努力を費すこと。

ホ 常に不快の念にかられてゐること。

等の不利なることを説き、常に物は整然と始末して無益の時間と努力とを省くことの大切なることを説いて聞かせるがよい。

### 3 整頓をよくする上の注意

それでは整頓をよくするにはどうするか、その心得について説いてやるがよい。それには、

イ 使つた物は必ず元の位置に始末すること。

ロ 時々整理をすること。

ハ 不用の物は之を捨て、しまふこと。

等で特に學用品、靴下、帽子、履物その他兒童自身の物品の始末の仕方について十分に指導し、特に學校の机中の整頓等については検査をし最も便利のよい整理方を指導するがよい。尙教室内の庶物についてもその整頓の仕方を、何は何所に、このやうに、何々はこんなにといつたやうに、黑板拭、雑巾、バケツ、掛圖、其の他の用具の始末を實際的に指導して置くことが大切である。



## 第七正 直

## 一 目的及び教材観

「常に心を正直に持ちて一時の利害に迷はされざるやう教ふることを以て本課の目的とす」とは教師用書に指示されたる本課の目的である。然らば正直とは如何なることであらうか、教壇に本教材を取扱はんとする教師は少くともこの問題についての確なる概念を有してゐなくてはならぬ。正直とは之を反面から見れば「偽はらぬ」ことである。従つて「偽はる」ことは不正直といふことになる。然らば正直が偽はらぬといふことであるとすれば何を偽はらぬことであらうか。この問題が當然起つて來ることになる。それは蓋し他人を偽はらぬといふことも考へられるが又己を偽はらぬといふことも考へられる。即ち己を偽はらぬとは己の爲すべき普通の道即ち良心の命する道をそのまま、履行してこの良心即ち自己の本心を偽はらぬといふことであらうと思はれる。己の内面に響く良心の聲に内聽して只管に之に心従して行くこと之即ち正直である。而してそれは普遍一貫の道であるから、他一切を偽らぬ正直の道となるのである。それで要するに正直とは我が本心即ち良心の命する所に心から服従して行くこと、反面から見ればこの本心即ち良心を偽らぬといふことであると結論することが出来る。

然し、私達は屢々この本心を偽つて不正直に陥る。我々をして我が内なる本心を偽らしめて不正直に陥らしむる最大なるものは實に我々に存する所の私欲である、一時の利害である。修身書の例話について見れば反物に疵ある事を

知つて之を告ぐるは之正直であるが之を知り乍らも言葉巧に之を客人に賣らんとするは不正直である。而して之をさうした不正直に陥らしめて行くものに不當の利を貪らんとする私欲である。一良心はこの場合疵あることを客人に告げよと命するが、かくては利益を得ることが出来ないから私欲は、この良心の命をふみにちつて疵あることを告げずして完全なものとして偽り賣れよと命するであらう一かく考へると總ての場合私をして不正直に陥らしめ、本心を迷はすものは實にこの利己私欲の心である。されば我々が正直ならんためにはどうしてもこの利己私欲の心を良心その者に統一して行かねばならぬ。統一するには大なる克己心が、強き意志が、決然として立つ勇氣が必要なのである。而して正直は人間普通の道で内心何等恥づる所なく臆する所のないものであるから常に正直なる人は内心何等の不安なく心はいつも春の海の如く平靜であつて、こゝに人間最高最深なる幸福に恵まれるのである。之に反して己を偽り人を欺き世を偽ることあれば、如何に富貴を得ると雖も、常に良心の苛責に堪へず内心常に平靜を失ひ煩悶懊惱の日を送らねばならぬ。物質的に如何に恵まれようとも内心恥づる所あつては、誰か人間生活の幸福を享受することが出来ようか。

更に正直を社會的にながめてもその結果は頗る重大である。世の一二不良の徒輩のあるために社會生活のおびやかされる所の大なるを思ふ時、正直の徳が如何に社會的に見て大切であるかは多くを言はずして明らかであらう。

この點から見て本課の如きは實にかうした點から見ると大切な課といはねばならぬ。

## 二 教材系統

尋一、うそを言ふな。 尋二、正直。 尋四、忠實。 尋五、誠實。 尋六、良心、清廉。 高一、至誠、正直。



### 三 指導要項

#### 甲 正直なる丁稚の例話

- 1 或人その子を丁稚奉公に出す
- 2 其の丁稚客に反物に疵あることを示す
- 3 主人の立腹と解雇
- 4 丁稚の出世と商店の没落

#### 乙 正直に對する心得

- 1 虚言をいはぬこと
- 2 過失をかくさぬこと

### 四 指導計畫

- 1 本例話は假作であるから、修身書に掲げられた説話要領の主旨をよく體して、いま少しく實際的に敷衍して取扱ふことが大切である。それではないと眞にこの例話を活かすことが出来ない、特にこの若者が獨立してから努力と正直とを旨として商賣に精を出し、そのために世の信用を博して商賣がメキメキ繁昌して行つた有様の如きもつと具體的に説話することが大切である。

- 2 説話もさうであるが、又訓辭の場合特に十分意を用ふべきことは、正直を以て、商賣繁昌の方便として行つたやうに説いてはならぬ。それでは正直なる徳が、一つの方便となり、道徳が一の功利に墮してしまふ。即ち、商賣は繁昌させねばならぬ。それには正直にせねば信用が得られないから正直にしたといふやうに説くことは主客顛倒であつて避くべきことである。即ち正直は正直として商賣の繁昌すると否とにか、はらず人の道であると説くべきである。所が人の道として正直を行つた所が、端なくも世の信用を博して商賣が繁昌したといふやうに説くならば、正直は商賣繁昌の方便としたものではなく、正直は正直として取扱ひ商賣の繁昌は之は附随したものであるから道を道として行つた事になる。かう説くことが大事である。實際の説方からすれば一寸の相違の如きも、見解には雲泥の相違がある。
- 3 取扱の實際に於ては先づ例話から入るがよいだらう。説話を説き終つて、次の時間にこの例話の批判をなし、且つ正直に對する訓辭をし、各兒の行爲を反省させて見るといふことが大切であると思はれる。反省といつても、極々アツサリしたものでよい。
- 4 訓辭に於て、尋一うそを云ふな、で取扱つた教材と——狼にかみころされた話——尋二、正直の課で取扱つた教材、——松平信綱が將軍秘藏の屏風を破つて之をかくさず正直にあやまつた話——と連絡づけて取扱ふがよい。

### 五 教材解説・説話要領

#### 甲 正直なる丁稚の例話

- 1 或人其の子を丁稚奉公に出す



或所に、正直者の夫婦があつた。この夫婦の中に、一人の男の子供があつた。二人の親はこの子供の行末を喜んで貧しい乍らも、楽しくその日を働いて送つた。男の子供もだん／＼年をとつて来たので、何とか先々のことも考へてやらねばならない。二人の夫婦は、「さてこの子を何にしやうか」と色々と考へて見たが、結局商人にしてやうといふことに話がきまつた。そこですぐ近くの町の或呉服店に丁稚奉公にやることにした。愈々子供が丁稚奉公のため家を出る時に父は、「商人は何よりも正直が大切だ。正直に主人の云ひつけを守つて働けよ。」と懇ろにさととしてやつた。「からだを大事にして主人の云ひつけを守つて正直に働いて決し恥さらしをせないやうに氣をつけて下さいよ」とは母のやさしい御教へであつた。

## 2 丁稚客に反物の傷を示す

丁稚になつたこの子はいつも正直に働いた。そして、親の教に違はぬやうにと心得て主人の云ひつけは何一つ怠らず働いた。或日のこと一人の婦人が来て反物を需めた。丁稚は數多の反物を出してこの婦人に見せた。婦人は色々と見た上で一反の反物が氣に入つて之を買ふことに決めた。丁稚は早速その反物をまいて婦人に渡さうとする時、ふとこの反物には傷のあることに氣づいた。正直なこの丁稚は直ちに、「あ、この反物にはこの通り傷があります。どうぞ外のものをお求め下さい」として、その傷を示した上、他の反物を色々と示した。婦人は丁稚の注意によつて始めてその反物に傷のあることに氣がついた。それから婦人はその外の反物について色々と調べて見たが結局氣に入つたものはなかつた。そして、「どうも氣に入るのがございません。又参りませう」と言つて出て行つてしまつた。

## 3 主人の立腹と解雇

この有様をはたで見てる主人、怒るまいことが、大變な腹立ちやうである。

「下手な商賣をして反物を賣りそなつたではないか、折角氣に入つた品に傷があるなどと言つたら誰が買ふものがあるか、それで商賣が儲かると思ふか」かう言つてさん／＼に怒つた擧句、

「汝の如き者はうちへは置けない。汝のやうな者がうちにあつてはうちの商賣は立つて行けない」そしてすぐに一通の手紙を丁稚の父親に向けて出した。父親は主人から、

「御息に不都合のかどがあつて當商店には置かれないから早速身元引取りに来てもらひたい」といふ意味の手紙を受取つてびつくりした。「一體どんな不都合なことをしたのだらう。困つたことを仕でかしたものだ。」と心配の餘りをそ／＼主人の家に子供引取りに出て行つた。

「一體どのやうな不都合を致しましたでせうか。一向つまりません子供で申譯もない次第でございます」と挨拶をすると主人は事の次第をこと／＼に話してきかせた。丁稚の親は主人の話を聞いて見ると、どうも自分の子供には少しも不正なこともなさ、うで却つて正直に振舞つたといふ事は褒むべきことのやうに思ふ。そして色々と考へて見るとこんな不正直な主人に仕へてゐては、どうも先々立派な商人にはなれさうには思はれないので主人の命令通りにこの店から暇を貰ふことにした。

「どうもとんだ事を致しまして申譯ありませんでした。それでは致し方もありませんからお暇を頂戴します。」と言つて父親はその丁稚を連れて歸つた。

## 4 丁稚の出世と主人の没落

店を追はれた丁稚は父に連れられて家に歸つた。然し決して父はその子供を叱らなかつた。却つて「お前は誠に感心なことをした。正直にして店を追はれるのなら仕方がない」かう言つてほめてくれた。そして再び他の呉服屋に雇



はれることになつた。丁稚はこの店でも正直に働いた。所がこの店は幸なことには常に店の信用といふことを重んずる正直な店であつたから、この丁稚の氣質にもよく合つた。それで丁稚はいよく正直に立働いた。そのため、この呉服店は日に／＼盛になつて行つた、やがてこの丁稚は一人獨立して呉服屋を始めることになつた。この丁稚は一人獨立してもやつぱり正直を旨として立働いたので、人々の信用は益々厚くなるばかりであつた。「あの店の品ならば間違はない」と世間の人々は云つて皆呉服物は大方この店に入つて求めるやうになつた。

所が先にこの丁稚を追ひ出した呉服屋はその後もやつぱり利益のことばかり考へて不當の儲を食つてゐた。そのため一時は儲高も大分あつたが後には誰云ふとなしに、「あの店の品はよくない」「あの店の品は信用がおけない」などと云はれるやうになつて日一日とこの店は落ちぶれて行つた。そして幾年かの後には全く客足がなくなつたといふことである。

## 乙 正直に對する心得

吾々はどこまでも正直でなければならぬ。決して虚偽に陥らぬやうにあらねばならぬ。勿論正直にするといふことはその爲に一時の不利を蒙ることもなしとは云はれない。然しかゝる物質的な利害得失のために人間としての正直の心を傷つけるやうなことがあつてはならぬ。どこまでも正直を以て凡ての生活を貫きたいものである。正直ならんためには、

### 1 嘘を言はぬこと

是が最も大切なことの一つである。「嘘を言はぬ」語は簡單であるが我々はともすると嘘をしらず識らずの中に云つてゐることがないとも限らぬ。特に吾々が虚偽虚言を吐く重なる原因は、

イ 自己の才能を表はさんとして事實を飾ること。

ロ 目前の利益に迷うて事實を捏造すること。

ハ 談話を面白くせんとして事實を誇張すること。

等である。我々は注意してかゝる虚言に陥らぬやうに氣をつけることが大切である。我々がしばしば虚言を吐く時、世人の信用は全く地に拂ふに至り、何者も相手にしてくれぬやうになる。尋常一年に於て習つたことく、「狼が来た」と嘘を云つて叫び、近隣をさがせた子供は何時の間にか近隣の信用を失つてしまつたのである。かくてほんとうに狼が来た時、「狼が来た」と叫んで助けを求めたが近隣の人達は少しも相手にせず、この子供ははかなくも狼のためにかみ殺されてしまつたのである。全くこの通りである。次に正直ならん爲には、

### 2 過失をかかさぬこと

である。之又大切なことであつて、兒童等は自己の過失を隠さんとして往々にして不正直に陥るのである。尋常二年に習つた松平定信の如きは實によき手本といはねばならぬ。



## 第八 師をうやまへ

## 一 目的及び教材観

古來東洋に於ては君恩、親恩、師恩など、言つて師の恩を尊ぶ思想には厚いものがあつた。君恩の厚きことはこゝに申すも畏し。親恩の厚きも亦こゝに説くまでもないことであるが師の恩も亦深くして廣いものがある。親を以て身體的の親、育ての親とすれば師は將に精神育生の親である。勿論、親より精神的な陶冶を受くることは頗る深くして廣いものが存することは否定し得ないが、然し吾々が心を靜かにして我が精神内容について考へて見る時、その全部の礎は之を教師によつて築かれたものであるといふことを強く感ずることであらう。こゝに師恩の鴻大なることを感ずること愈々切なるものがある。前述した如く古來師を敬ひ尊ぶ風は我が國にも厚いものが存在したが、教育が普及しその制度が劃一になつた今日に於て教育の中にも多分に行政的氣分が浸入し、師恩など、いふことも昔の面影に見る影もなく、特に中等學校以上に於ては平氣に恩師に綽名を附し、甚だしきはストライキさへ行ふ有様で、憂國の士識者の意見にまつまでもなく實に慨歎に堪へざるものが在る。人格に深味をもたせ、輕調浮薄の風を除くことの一助にしても、かうした教材をほんといふ兒童に徹底せしむることは大切な事である。勿論それは、師を敬ふことそれ自體が大切なことであることと言ふまでもない。

本課は教師用書に「師を敬ひて禮儀を盡すべきことを教ふるを以て本課の目的とす」とある通り、師恩の深きを

説き、師を敬ふべきを話し、以て常に師に對して禮を失せざるやう心得しむることがその目的とする所である。

## 二 教材系統

尋六、師弟。高二、習業。

## 三 指導要項

## 甲 上杉鷹山の例話

- 1 上杉鷹山の人と爲り
- 2 鷹山其の師を敬ふ
  - イ 鷹山細井平洲に教を受く
  - ロ 平洲を米澤に招く
  - ハ 平洲の江戸出發
  - ニ 鷹山の出迎
  - ホ 鷹山平洲に師の禮をもつて接す

## 乙 師弟の道

- 1 上杉鷹山の例話考察
- 2 師弟の道



## 丙 本課に因みて行逢の作法

## 四 指導計畫

- 1 師を敬へといふことは、考へやうによつては、皆さんは私を敬ひなさいといふやうなことにもなつてしまふので誠に取扱に困難な材料である。然し、師を敬へといふことは實に普通の大道であつて、單に自分を敬へなどいふ局部的のものではない。普通の大道であるから私達は何等憶する所なく堂々説き得る筈である。
- 2 けれ共、説く態度には決して自分を敬へなどいふ考が微塵もあつてはならぬ。もしさうした考で取扱ふならば誠に片腹痛い教授である。どこまでも、子供と共に、我が師を敬ふ態度でなければならぬ。教師はこゝで教師といふ衣を脱いで、自分の師に對する生徒となり児童となつて自分の師を敬ふ態度でありたい。
- 3 教授の順序は先づ以て例話を取扱ふがよい。本例話を取扱ふには、鷹山公の人格的背景を作ることが大事である。そのために先づその人と爲りを説き、その上でその師に對してとつた彼の尊い生活を説いてやるがよい。
- 4 鷹山の敬師について、吳々も注意をすることは、兩者の地位を理解させること、當時の時勢をおほろけながらも理解させる事である。即ち、封建時代、階級思想の極點にある時勢に於て、一は大名一は儒者といふ地位である。にもかかはらず、師に對する禮を鷹山があやまる所なくとつたといふ點を十分に味はしむるべきである。

## 五 教材解説・説話要項

## 1 上杉鷹山の人と爲り

上杉鷹山は日向國の一小藩主秋月種美の第二子である。江戸麻布一本松なる秋月家の邸に生れた。幼少の頃から極めて聰明な性で所謂一を聞いて十を知る程であつた。十歳の時米澤藩主上杉重定の養嗣子となつた。上杉家の祖先は彼の有名な上杉謙信であつて其の所領は北陸、東山の二道にまたがり石高の大なることは當時ならぶ者はなかつた。後豊臣秀吉のために會津に轉ぜられて百二十萬石に削減され更に關ヶ原の戦には豊臣氏に味方した爲に家康のために三十萬石に減ぜられ更に五代上杉綱憲の時には十五萬石に減封されてしまつた。かくの如く次々に減封され乍らも、格式交際等は昔の如く大藩としての禮をつくさねばならず、そのため年々の費用と石高との調和がとれず次々に借財が募るばかりであつた。

鷹山は十歳にして、上杉家に養嗣子として入つて後は、師範役藥科眞祐に就て習字を學び、十四歳の時から當時學徳共に並ぶ者なしと云はれた細井平洲に就て修身、治國の道を學んだ。聰明なる鷹山はよく一を聞いて十を知り學問はめきくと上達し、その上鷹山は言行謹嚴にして、識見高く養父重定を始め藩主一同その將來に望を囑した。鷹山が元服したのは年十六の時、之から鷹山は名を治憲と改め、その翌年養父重定の後を襲つて十五萬石の米澤藩主となつた。

當時上杉家の借財は積つて山の如く凡そ十一萬兩を越えたと云はれた。人民から年々納める租税は僅かにその利子を支拂ふにも足らぬ位であつた。鷹山はこの憂ふべき大患の中にその藩主となつたのである。どうにかしてこの苦境を脱せねばならぬ。

受けつぎて國の司の身となれば忘るまじきは民の父母



の一首にその大なる抱負を述べ明和四年九月（襲世してから五ヶ月の後）江戸に居る老臣を始め、藩士一同をその邸内に集め大檢約令を發布した。かくて本國の方では父重定から十二月に同じく布達をした。かくて躬らその模範を示した。即ち今まで藩主の衣食料は五百五十四兩であつたのを二百九兩に改め今まで五十餘人の奥女中がゐたのを僅かに九人にし今まで藩主の膳部は大抵二汁五菜であつたのを一汁一菜に改めた。しかし、藩内には色々の反對や非難もあつたが、鷹山は斷乎としてその所信を實行した。その上又一面に於て盛に殖産興業の事に力を盡したので、遂に米澤藩をして泰山の重きに築き上げてしまつた。かの有名な米澤織の如きも鷹山がこの時に際して奨励したものであつて、今にその名聲の絶えないのは、實に鷹山の餘光とや云ふべきであらう。領民はその徳を慕ひ神として鷹山を祀り今に地方民の崇拜する所である。

## 2 鷹山師弟の道を正しくす

1 鷹山細井平洲に教を受く 鷹山は幼少の頃から聰明の譽高く十四歳の時から細井平洲に就て教を受けた。細井平洲は尾張の人で當時最も世に聞えた學者の一人であつた。平洲は尾張の國細井に生れたが幼少の頃から學問を好み農業をするを喜ばず常に書を読んで楽しんでゐた。十六歳の時、京都に出て師を求めたが適當の人を得ず父から貰つた五十兩の金は僅かに十兩しか費さず残は皆書物を購つた。一ヶ年京都に滞在して求めた書物を二匹の馬に駄して國に歸つた。かくて購ひ求めた書物を片端から書齋に屏居して讀み耽つた。そして、一ヶ年殆んど一回だに外へも出でなかつたといふ。

後に其の頃有名であつた中西淡淵に師事した。やがて、平洲の學は愈々上達した。後、江戸に出て塾を開いて、多くの弟子をとつて學問を教授してゐた。學徳共に高く、來り學ぶ者甚だ多く、その世評は一時に高くなつた。彼が三十七歳になつた時、その學徳を傳へ聞いた米澤藩では平洲を米澤に招いて、その學問を教はることにした。是平洲が第一回の米澤入りである。

鷹山は時にとつて十四歳であつた。鷹山は平洲に師事してからは毎月、一日と六の日、即ち毎月一日、六日、十一日、十六日、二十一日、二十六日の六日間藩邸に於て平洲の講義を聞いて大いに勉強に勵んだ。鷹山は天性聰明な上に熱心學問に勵んだ。それに師は學徳共に世に勝れた細井平洲であるので鷹山の學問は日に日にメキ／＼と上達した。平洲は滞在すること約一年、この間に平洲の徳化は領内普く行渡り藩士の學問も大いに進歩した。

かくて平洲は一旦江戸に歸つたが、後に二度の招待を受けて、第二回の米澤入りをした。それは彼が四十九歳の時で、當時、鷹山公は藩主の職にあつて大いに藩の政に精勵してゐる時であつた。この時にも平洲は約一ヶ年その地に滞在し藩内の教育に力を致した、前後二回に亘る平洲の滞在は領内に非常によい感化を及ぼし、國內一般に學問を好み風俗習慣等も非常に改善されて來た。鷹山公の治蹟のかくまで顯著なりしも亦平洲の薰陶に負ふ所が決して尠少でない。

□ 平洲を米澤に招く 鷹山は十七歳を以て藩主の職に就き、職にあること十九年、年三十五歳になつた時、職を其の嗣子治廣に譲り、自分は隱居をした。鷹山は隱居をしても、師平洲先生の高恩を忘れず、いつか機會を得て、親しく米澤にお招きして、先生のお目にかゝりたいものと考へてゐた。隱居をしてから凡そ十年ばかりも経た時のことである。日頃の望を果したいと治廣に命じて、平洲に三度目の米澤下りのことについて内意を聞くことにした。所が平洲もその厚い芳情に感じ非常なよろこびを以て承諾をした。こゝに於て平洲は三度米澤に下ることになつた。時に平洲は六十八の高齡に達し、鷹山は四十五才の壯年を過してゐたのである。



ハ 平洲の江戸出發 かくてその相談がきまると、米澤の方では途中の介抱のために服部吉彌なる者と、日々の色々の世話をするものとして勝手方の老吏内田吉左衛門を遣はし、更に轎夫（カゴカキ）までも人選に注意して正直親切なるものを江戸まで送つてやつた。更に、その上、お供として數人を選んで江戸まで送届けた。そして寛永八年八月二十五日—陰曆—をもつて是等の人々に守られ、更に門人上田雄次郎、菱刈卯三郎の二人を引連れて江戸を出發することにした。途中、所々の旅宿に於ても、米澤聖君様の御師匠だとのふれだして見ず知らずの人々が羽織袴で見送りする者さへあつて、流石の平洲も鷹山公の徳化の偉大なことに屢々驚かされる程であつた。

二 鷹山の出迎 かくて九月五日、出發後十一日振りで米澤藩の南境、板谷關にかゝつた。するとこゝにはもう、米澤藩の教育の事を司つてゐる役人をはじめ澤山の藩士たちが前日から平洲のお出を待つてゐた、九月五日の夜はこの關所に一夜を明かし翌六日にこの嶺を下り、米澤のお城から三里を隔てた大澤といふ所まで來ると、鷹山公自ら親しく御出迎になるといふことが聞えた。そこで平洲は愈々駕を急がせた。そして八ッ過ぎ即ち今の午後三時頃に羽黒堂といふ所まで來ると、もう鷹山公のお供の先驅が目についた。平洲は驚いて駕から下りた。

平洲が如何に鷹山の師であるといつても鷹山とは既に身分が異なる。鷹山は今でこそ隠居をして居れ、元は一國の藩主である、その職にこそないがその権力から云つてもその待遇から云つても皆藩主同様である。その高貴の身分を以て我が師を敬ふの餘り自らその師の御出をお願ひした上しかも自らはるる出迎をなすとは實によく自分の師を敬ひその禮を正しくしたものだといはねばなるまい。

駕から下りた平洲は靜々と歩んで行く。五六町を歩んで普門院といふお寺の前まで來ると澤山なお供の人々は道の兩側に居列び皆うつぶして恭しく平洲の至るを待つてゐる。それかと見ると道の眞中には鷹山自ら、如何にも敬虔な

る態度で、我が師平洲先生の御來着を待つてゐる。

向ふからしづくと平洲は六十八歳の老軀を兩足にのせて進んで來る。やがて鷹山公の姿を目にとめた平洲は驚き直ちに地べたに兩手をつかへて拜しやうと考へたが、さうしては先方鷹山公も亦師に對する禮として地に手をついて答禮されさうなので遂に兩手を足先につけるやうにして恭しく敬禮をした。二十何年か振りの對顔。それに身に餘る御手厚いもてなしに平洲は只々老の目に一杯涙をた、へて一言をも發することが出來ない。こちらは鷹山、鷹山も久々の對顔、二十年前に教へを受けた先生、今は昔の面影もなく老齡に達してゐられるが、慕はしさ、親しさの餘り只感極つて、目には一杯の涙をた、へ、何といつて挨拶してよいかその言葉さへ出なかつた。何と美はしい場面であらう。二人の間をとけて流れてゐる美しい氣持は何にたとへんものもない。鷹山はや、あつて、やつと「先生御安泰」と一言を發し得たのみであつた。ついでお寺に案内する由を傳へて寺の門内へと進んで行つた。第一の門から中の門までは約三町程もあつて坂道になつてゐる。道の兩側には並木がつゞいてゐる。

ホ 鷹山どこまでも師の禮を以て接す 鷹山はどこまでも平洲に師の禮を以て接した。鷹山は平洲より先には一步と雖も進まなかつた。そして平洲には杖を用ひるやうにとさへしきりに進めた。けれ共平洲は禮を失すると思つて之を用ひなかつた。鷹山は先生にもしも坂道で躓くことでもあつてはとの心遣から肩を並べ手を引かんばかりにして坂道を上つて行つた。

こゝで兒童用書の挿繪を見せるがよい。先導は僧侶、や、はなれて平洲、之に全く肩を並べて進むのが鷹山である。後はお供の藩士である。向ふに見える屋根に普門院の末寺——成就院今は廢寺になつてゐる——成就院から普門院までが凡そ一町ある。手前に見えるのは山門である。



かやうにして、老先生をいたはり乍ら、普門院の本堂まで案内した。本堂に着くと、鷹山は先づ階を上つて堂の板の間に伏し、平洲先生をうやくしく迎へ、設けの座に案内し懇ろにもてなし先生に對する挨拶をし、町重にその後の話等もした。かつては十五萬石の領主、藩政の改革を斷行して領内の尊信を一身にあつめてゐる鷹山公からかほどの待遇を受けた平洲の心中や果してどんなであつたであらうか。

かくてそこへは當藩主、治廣の使者及び養父重定の使者等も來つて旅の勞をねぎらつてやつた。平洲は勿體なさ、有難さに、涙がこぼれ、やがて盃を賜つてお酒なども頂戴したが、愈感極つて、聲さへあけて有難涙にかきくれた。

この有様を見てゐた列座の藩士たちも皆鷹山公の丁重な、そして禮儀正しいもてなしと、平洲の心中を思ひやつて皆もらい泣をするばかりであつた。

今この普門院を訪ねるとその境内には『敬師記念碑』といふ石碑が建立せられ、このうるはしくも床しき美談を、千古に傳へるもの、如くである。

平洲は、こゝで一休みした後、鷹山に案内されてお城に入つた。城下の人々は皆、鷹山のこの禮儀正しい行列を拜し、感泣する聲が斷えなかつたといふことである。かくて、かねて用意の三ノ丸の内、鷹山公の館から三町許りへだたつた家へ着き、こゝに落ちつくことにした。旅館にあてられたこの家は、屋敷も廣く建物も整つて申分のない家であつた。かくて平洲は米澤に止ること五十二日間、その間至れりつくせりのもてなしを受け十月二十八日名残りの涙を流しながら別れを告げて江戸に歸つた。鷹山はその折にも亦羽黒堂まで見送りこゝで涙乍らに永の別れを告げた。

## 乙 師弟の道

## 1. 例話考察

先づ鷹山の例話を終へたなら——出来る丈け時間を異にし次の時間にするやうにして——次の發問をして例話を復習し且、鷹山の尊い精神をとらへさせる。

- (1) 上杉鷹山はどんな身分の人でしたか。
- (2) 鷹山が教を受けた先生は何といふ方でしたか。
- (3) 鷹山が大名の位を讓つてから平洲先生をどんなにしようと考へてみましたか。
- (4) 平洲が米澤に行く時どんなにしましたか。
- (5) 鷹山は平洲に遇つた時どんなやうでしたか。
- (6) 寺の坂道をのほる時はどんなでしたか。
- (7) 本堂についてからはどうでしたか。
- (8) 何故鷹山は平洲先生をそんなに大事にするのでせうか。

## 2 師弟の道

最後の發問に對する答を受けて、

- (1) それでは先生に御厄介になつてゐるのは鷹山ばかりでせうか。
  - (2) どんな御厄介になつてゐるでせうか。
- と發問して、日頃先生の御世話になつてゐることを具體的に説いて聞かせる。かくて先生に對する禮儀をみださぬやうに注意し特に、

- (1) 言葉遣。



- (2) 行逢つた時の禮。
  - (3) 先生と共に歩く時の注意。
  - (4) 先生とお別れしてからの心得。
  - (5) 其の他。
- について説いてやる。

### 丙 本課に因みて行逢の作法

本課に因んで左の如き作法を授けて實習させる。そしてこの後は常に注意して之が實行出来るやうにする。

- 一 知人に行逢つた時は少し前にて禮をすること。
- 二 尊長に行逢ひたる時は數歩手前にて止り丁寧な禮をなすこと。
- 三 帽子を戴ける時は右手にて之をとり其の内面に向けて右股の外側に軽く觸るゝ程にすること。
- 四 右手に物を持つてゐたら左手に持ちかへるか又は左掖にかゝへ右手で帽子をとる。
- 五 両手に物を持つてゐてやむを得ない時は帽子はそのまゝで禮をしても差支ない。

## 第九 友 だ ち

### 一 目的及び教材觀

君臣の誼、父子の親、夫婦の愛、兄弟の友、親族の情の外にあつて最も親しい關係にあるものは實に朋友である。是、教育勸語にも「朋友相信シ」と諭させ給へる所以である。朋友の道はどこまでも相信するでなければならぬ。相信するとは互に誠心誠意を以て相交るの義である。純眞の心を以て相交るの意である。一旦の利害のために相交るが如きは眞の朋友の道でない。眞の友は、苦を相共にし、樂を相共にし平然として友のために自己を捧げる程の情誼がなければならぬ。その苦しみ、その不幸、その困窮を見ては相救ひ相助くる程の心掛けがなければならぬ。

兒童愈々長じ學校生活にも慣れて來て、彼の經驗は愈々深く益々廣くなり、同輩に接する機會と範圍も深くして廣くなり所謂友人なるものが自然の中に出來て來る。この時に於て、前學年に於ても取扱つた所であるが本學年に於ては更にこれを深めて朋友に對する道について説き、そのあるべき心得を論ずことは大切なことであるといはねばならぬ。本課は修身書の教師用書にその目的として「朋友は互に情誼を重んじて相救ひ相助くるやうに心掛けしむるを以て本課の目的とす」と掲げてある通り、朋友の道について説かんとするものであつて、兒童の生活の上から考へても大切な材料である。



## 二 教材系統

尋一、友だちは助け合へ。 尋二、友達に親切であれ。 尋五、朋友。 高二、朋友。

## 三 指導要項

### 1 友情に富める友藏の例話

- イ 友藏と信吉とは共に同一工場に雇はれて働く。
- ロ 信吉主人の怒にふれて工場を解雇さる。
- ハ 友藏の新機械發明。
- ニ 友藏その賞の代りに友の歸參を申出づ。
- ホ 主人の感激と信吉の歸參。

### 2 朋友に對する道

- イ 例話の考察。
- ロ 朋友の道。

## 四 指導計畫

1 本課の例話は假作であるから先課に於ても述べたやうに修身書の例話要領の主旨をよく體して、細部に亘る點

は具體的に且實際的に敷衍することが大切である。

2 本例話取扱上に特に意を用ふべき點は、友藏が一身の利欲から嶄然として超越し、たゞ朋友信吉の身の上に同情して、之を救ひ助けたいといふ、その心情を十分に味得させるといふことである。我々の當に爲すべき道をやまらしむるものは實に我が身につつき纏ふ所の利欲である。友藏にしても、新機械を發明して「汝の望むものあらば何でもその賞として與へよう」との言葉に對しては我利我欲の起らないわけではなかつたらうが、それを超越して朋友信吉を助けんと申出た所は所謂利欲に迷はず我が爲すべき道にまつしぐらに精進した所で、に朋友に對する尊い教訓が含まれる。尙、信吉のため主人に辨解の勞をとつた所、更にその賞として家を作り與へようと云つた時、そんな事には頓着なしに友人信吉の家へ飛んで行つた所等は見のがせぬ大切な所である。

3 本課は先づ例話を説き、次にその例話の批判をなし、朋友に對する日常の心掛けについて説いて聞かせるやうに取扱ふがよいであらう。その心掛けについて説くためには、常に日常卑近の事項に着目してその指導をせねばならぬ。

## 五 教材解説・説話要領

### 1 友情に富める友藏の例話

1 友藏と信吉とは同一工場に雇はれて働く。或村に友藏と信吉といふ二人の友だちがあつた。二人は同じ土地に生れ幼少の時から同時にしかも同じ學校に通ひ苦樂を共にした最も親しい友だちであつた。二人は同時に小學校を卒業したが、共に工業に志し幸にも同一の工場に雇はれて共に同じ工場で働くことになつた。二人は互に心をはけまして



未來の成功を楽しみながら一心に仕事に精出して働いた。

□ 信吉主人の怒に觸れて工場を解雇される 然るに信吉は其の後、ふとした過失のため工場に損害を與へた。彼は主人の怒にふれこの工場を解雇されねばならぬ悲しいことに立至つた。友藏は大變之を残念に思つて色々取なして主人の怒を解いて信吉をもとの如く、この工場に留まらしめるやうに骨を折つたのであるが、主人の怒はなかくはけしくて一寸のことでは解けさうにもなかつた。信吉も折角親しい友藏と、互に日夕はけまし、はけまされて來て、將來の成功を夢みつゝあつたのに、今、この工場を逐はれることは、身を切られるよりもつらいことであつた。そこで信吉自身も百万主人に陳謝したけれ共、やつぱり主人の怒は容易に解けさうにはなかつた。

今は萬策盡きた。二人はこゝで泣く／＼も別れを告げ、信吉は力のない足をひきずり乍ら、すみなれた工場の屋根をながめ見送る友藏の姿を振りかへり／＼我が家をさして歸つて行つた。

それからの友藏は親しい友だちもなく、この工場に淋しく働いてゐるが、何時も信吉の身の上を忘れることはなかつた。そして折もあらば主人に願つて再び信吉の歸參を願つてやらうと心がけてゐた。

ハ 友藏新機械の發明 仕事に忠實熱心な友藏はその後も熱心仕事に當り、かたはら新しい機械の工夫に心を砕いてゐた。所が愈々その志が遂げられて友藏は非常に有利な一つの新機械を發明することになつた。この新機械の發明はこの工場のためにとつては非常に大きな手柄であつたので主人のよろこびは一通りではなかつた。

ニ 友藏其の賞の代りに友の歸參を願出づ 主人は喜びの餘り之を賞して、「汝の望むものがあるならば何でも與へよう」とまで言つた。友藏は考へた末、「私には別に何も望はありませんが、唯先頃解雇された信吉のことが日夜心にかゝつてなりません。その後歸參を願ふ機會もなく今日に至りました。もし主人にて私の微功を賞し給はんとならば

何とぞ彼の過を宥して元の通りに使つて下さい。たゞ私の願はこの一事でございます」ときつぱり答へた。

ホ 主人の感激と信吉の歸參 主人は友藏のこの言を聞いて痛くその友情の厚いことに感じ入つた。「汝の友に對する情誼の深いことは感ずるに餘りがある。然らば汝の望の通りに信吉の過を宥し歸參を許可することにしよう」主人は之を承諾した。友藏は新機械の發明に成功した時にもまして大に打喜んだ。然し、主人は尙も言葉をついで云ふには「更に賞として家を造つてやらう」とまで云つたが、「いや／＼私は信吉の歸參さへ叶ふならば私の願はそれで足りました。その上の賞などは敢へて望む所ではありません。今は寸刻も早くこのことを友人に知らせたいと思ひますからしばらくお暇を賜りたい」と出て行つたがやがて信吉を連れ歸り主人に詫びしめたので、主人はその將來をいまして之を宥してやつた。信吉は友藏に厚くその厚意を謝した。友藏は信吉の歸參を我がことのように喜んでゐた。

## 2 朋友に對する道

### 1 例話の考察

主なる設問

- (1) 友藏と信吉とはどんな仲でしたか。
- (2) 友藏と信吉とは同じ工場に雇はれてどうしてゐたか。
- (3) 信吉が過をして工場を出される時友藏はどうしたか。
- (4) 友藏は新機械を發明して主人が思ふ通りの賞を與へようと云つた時何を望んだか。
- (5) それからどうしたか。
- (6) 二人の仲について感心な所はどこか。



(7) 友達同志はどうせねばならぬか。

ロ 朋友の道

○友達同志は互に仲よくすること (前の發問に對する兒童の答を受けて次の通り訓辭をして行く)。

先づ友達同志は仲よく交らねばならぬ。一寸やそつとのことで喧嘩争ひをするやうな事があつてはならぬ。所が友達同志であればある程よく喧嘩争ひをすることが多いものであるが、之は多く、仲のよい友達であると、つい失禮なこともでも平氣で言つたりしたりするからである。仲のよい友達でもよく禮儀を正して交ることが大切である。

○互に助け合ふこと。そして又友の不幸や困難を見ては必ず之を助け慰めてやるやうに心がけねばならぬ。尋常二年の時に文吉が重さうな風呂敷包をかへて伯父の家に行くのを小太郎が助けてやつたやうに互に情をかけて之を助けるやうに心がけることが大切である。

○忠告をすること。又忠告を心よくうけること。又人はどんなゑらい人でも自分で氣づかぬ悪い癖や缺點があるものである。友人の缺點や悪い癖などについては之をそのままにして置くことは不親切なことであるから忠告をしてやるのが友に對する道である。然し忠告するには決して怒つてやつたり人の目の前などなせず、ひそかに靜かにいさめてやるやうにするがよい。昔から「良薬は口に苦く忠告は耳に逆ふ」と云はれる通り忠告をうけた人は、ともすると負け惜しみを云ひたいものであるが友人の忠告は事をおとなしく聞くべきである。そして自分に缺點あらばその缺點をなほすように努むべきである。かやうにして友達同志はいつくまでもその友情をこまかやかにして些細なことに怒つてその友情を傷つけるやうなことをないやうに心がけることが大切である。

## 第十 規則に従へ

### 一 目的及び教材觀

人の生活は社會共存の生活である。吾々は一瞬間と雖もこの社會共存の生活から脱却することは出来ない。人間生活は即ち社會共存の生活であり、人間の生活のある所そこには必ず社會共存の生活が存するわけである。一室に蟄居して外界との交渉を一切遮断したりと雖も決して單獨孤立の生活ではないのである。その口に糊する食物について考へて見よ。その纏ふ衣服に就いて思つて見よ。何れか社會の恩恵でないものがあらう。かく考へ來つた時吾々の生活は一切が社會生活であつて決して單獨孤立の生活たる事は出来ない。一人の言行一切は他社會一切と關係交渉し一切社會人の影響は漏れる所なく個々人の上に關係交渉をもつのである。

然るに人間の生活には常に社會的に妥當する善的生活があると共に他面反社會的な利己的我欲の生活がある。即ち人間は一面には社會的に生きんとする尊い精神的な生活があると共に他面には利己的に生きんとする我欲の生活がある。それで人間の生活をそのままに放任して置く時常に其人の生活は社會的な善の生活であるといふことは出来ない。社會をおびやかすやうな恐ろしくも亦惡むべき行爲が行はれて社會は全く社會の意義を完うし得ず共存の理想を實現して行くことは困難である。それであるから必然的に凡ての團體、凡ての社會的組織の中には一つの守るべき規則が出来てその社會組織、團體それ自身を保護するのである。而してあらゆる社會組織團體組織の中に於て最も組織立つ



たそして最も確乎たるものは國家である。國家も亦その國民の安寧秩序を維持しその共存の意義を十分に發揮する上から、國民各自の爲すべきこと、爲すべからざること、爲して可なることを規定してその意志の限界なるものを定めてゐる。之即ち法である。されば法は國家がその國民を苦しめるために設けたものでなしに國民の社會共存の生活を十分に全うせしめんために設けたものである。されば國民はこの法を絶対に遵守することを要する。萬一この法を國民が蔑にせんか一時に社會の秩序安寧は混亂に陥りその共存の意義は没却されてしまふに違ひない。特に現代の如き立憲治下の國民は國法を堅く遵奉して國民としての又社會人としての義務を完うするやうにせねばならぬ。

## 二 教材系統

尋二、規則に従へ。 尋四、法令を重んぜよ。 尋六、憲法。 高一、公正。 高二、國憲國法(一)(二)

## 三 指導要項

### 甲 春日局の例話

- 1 春日局の人と爲り
  - イ 局の生立と江戸下り
  - ロ 竹千代の養育
  - ハ 家光の信任
- 2 春日局よく掟を守る

イ 局夜おそく歸りて城に入らんとす

ロ 番士掟を守つて局を入れず

ハ 局掟に従ふ

ニ 局番士を賞す

### 乙 凡て規則には従ふべきこと

- 1 局の例話考察
- 2 凡て規則には従ふべし
- 3 兒童の實生活の指導

## 四 指導計畫

1 本例話に就て篤と考へて見るに春日局が掟に従つたといふことは當然守るべきことを守つたと云ふに過ぎずして別にとりたて、之が一般の模範ともなり得ないやうにも考へられる。然し、仔細に考へれば確に範とするに足る立派な行爲であることに氣づく。即ち、それは春日局の當時に於ける地位身分權力といふ背景から考へた時その行爲の尊い所以が分る。即ち當時に於ける將軍家光の局に對する信任は非常なものであつて、局の權力は實に大であつた。かゝる權力ある局でありながらおとなしく掟は掟として之を遵守した所に尊い所が存する。されば本例話を活かすためには、どうしても當時に於ける局の地位權勢といふものを十分に理會させる所がなくてはならぬ。然らざれば本例話は例話としての價值を没却する。



- 2 こゝで規則といつてもさうむづかしい法律といつたやうなものと考へてはならぬ。學校内に於て考へて見れば植物園には入つてはならぬ。何時になつたら必ず歸宅せねばならぬ。廊下は走つてはならぬといつたやうな、日常卑近の色々な諸規定といつたやうなものを對象にして實生活を指導して置くことが大切である。かうした實生活の指導には、先づ兒童をして、守るべき規則を大體どの位知つてゐるか、宿題にでも出して書かせて、之について指導して行くのも面白い。
- 3 全體としての取扱はさうした實生活の指導から入つてもよいし、又例話から直接入るのもよい。例話から入るとすれば、最後に局の生活を批判し、且つ、規則の守るべき理由、彼等の實際守るべき規則にはどんな事があるか、それについての實際的指導をして置くことが大切である。
- 4 尙又規則を守らない人があつて、之から生ずる不都合等についても實際經驗に訴へて説いて見るもよい。さうすると規則の守るべきことの如何に大切であるか分るから。

## 五 教材解説・説話要領

### 甲 春日局の例話

#### 1 春日局の人となり

1 局の生立と江戸下り 春日局は徳川時代に於ける有名な女性であるから、よくその人となりに就ても知る人が多くであらう。春日局の生れたのは今から凡そ三百年前である。父は齋藤内蔵助利三といつて明智光秀の股肱の臣であつた。然し光秀は本能寺に信長を殺したので秀吉が光秀を山崎に討つた。この時に局の父利三は光秀の一方の部將と

して勇しく戦つて遂に討死をしてしまつた。それから局は母と共に叔父稻葉刑部少輔道朝を頼つて京都に出て住居した後、局は年頃になつて通頼の娘として稻葉佐渡守正成に嫁した。

慶長九年徳川二代將軍秀忠には目出度も嫡男が江戸城西の丸に生れた。幼名は家康の幼名をそのまゝをとつて竹千代と名づけ將軍秀忠祖父家康の寵愛は一通ではなかつた。「何とかしてよい乳母をさがしてその養育に當らせたい」とは大奥一同の希望であつた。それには何といつても、上品な京方面から探すのがよからうとて京都にその人を求めた。京都では京都所司代板倉勝重が主としてその人選に當つた。所がその頃江戸といへば武術一片の荒武者ばかりのゐる所としか思つてゐない。京の女は誰一人として之に應ずる者はなかつた。しかたがないので板倉勝重は粟田口の高札を立て、希望の者を募つた。所がこの高札に應じて願出た一人の女があつた。之ぞ後日有名な春日局である。

□ 竹千代の養育 かくて局は江戸に下つて家光(幼名竹千代)の養育に當つたのであるが、時に局は二十六歳であつた。竹千代は生來の強情者でその養育は一通りや二通りの苦辛ではなかつた。それでも局は心をこめ、あらゆる困苦を忍んでその養育の任に當つた。

竹千代が三歳になつたとき弟國松が生れた。國松は又どうしたものか兄竹千代とは似ても似つかぬ温順な上に懶口な子供であつた。國松生れて後の大奥に於ける寵愛は國松に集り、年をとるにつけてその寵愛は愈々深くなるばかりであつた。そのため、二代將軍の家督は二男國松にも譲られさうな形勢にさへなつた。かうなると折角三代の將軍に仕立てようと丹誠こめて養育した春日局は立つても居てもゐられない氣持ちがする。もしも嫡男、竹千代様をさしおいて世嗣が定るやうなことがあつてはお家の一大事である。春日局は深愛一方ならず、遂に意を決して伊勢参りといふことに名をよせ江戸を發した。そして途中駿府に至り、家康に事の仔細を訴へた。當時家康は將軍職を子秀忠に譲



り、自分は駿河に悠々の生活を送つてゐた。それだが何といつても第一代の將軍であるからその一言は千金の重きをなした。事情を聞いた家康は事容易ならずと見てとつて局が伊勢から江戸に歸ると自らは鷹狩りと稱して關東に下向しこゝに竹千代を世嗣と確定して駿府へ歸つた。翌元和二年家康は靜岡に薨じた。それから四年たつた元和六年には竹千代も年十六になり元服の式をあげて名を家光と改め二十歳にして三代將軍となつたのである。家光が一代の名將軍であつたことはこゝに申すまでもない。この時に局なかりせば世の中はどんなに變つてゐるかも知れまい。

ハ 家光の信任 家光は深く春日局の鴻恩に感じてゐた。家光が將軍職に就いてからは殊の外局を信任して大奥のことは事の大小悉くその意に任せた程であつた。それで大奥の中に何か事が起ると一切を春日局に任せてその意のままに取計らはせたのである。その一例として次の如き話が殘されてある。かつて春日局が家光の命によつて上洛してゐた留守中のことである。城内に仕へてゐた伊勢慶光院の婢女が何か不都合なことを仕出かして處罰しなければならぬことが出来た。この時にも家光は何等自ら手を下して之が處罰を敢へしようとはせなかつた。そして一時主人にその身柄をあづけておいて局の歸りを待ち局に一切の處置をまかせた。大奥のことは萬事がこの通りであるから局の權勢といふものはそれは／＼すばらしいもので誰一人として彼の女に並ぶ者はなかつた。然し局はどこまでもつゝ、ましい女であつたから權勢をたのんで專横なことを振舞ふやうなことはなかつた。かくて一生を家光に仕へた。その仕へるやどこまでも誠心誠意で、かつて家光が抱瘡を病んだ時の如きは全く身を以て之が看護に當り一命にかへてもその平癒を授け給へと東照大權現に祈願した程であつた。然るに局は六十五に達した時病にかゝり遂にこゝに一生を終つた。東京市小石川の麟祥院といふお寺に葬つた。現在小石川區にある春日町は局の屋敷跡であるといふことである。

## 2 春日局よく控を守る

局はかくの如く家光の信任を一身に集め大奥内に於ける權勢は殆ど並ぶ者もない程の身分地位にあつたのである。然し權勢に誇るやうなことはかつてなく誠心誠意をもつて家光に仕へ又女としての道をも全うした人で衆人の範とすべきことが頗る多い。わけてもよくその控を守つたことはものがたいもので吾々の手本とする所である。

イ 局夜おそく歸りて城に入らんとす 局が或時のこと城外へ用事があつて外出した。所が思はず時間が長びいて時刻をおくらししてしまつた。それから従者と共に急ぎ、平川口にかゝつてゐる御門から城内に入らうとした。

ロ 番士門を守つて之を入れしめず 所が將軍の居城は夜は門をとざして非常をいましてゐた。そして城内から特別の通知がない限りは何人と雖も入ることは出来ないといふ定であつた。局がこの門にさしかゝつた時には既に閉門の時刻を過ぎてゐたので門は堅く鎖されてあつた。夜、門をこの通り閉ぢるのは城内に不心得者の入るのをいさめるためである。然しこゝへ差しかゝつたのは大奥内に於て權威ならぶ者ない春日局である。春日局といへば門番の士といへども決して知らない者はない。決して危険なものでもないものである。

従者が門を開けることを要求しても門番の士はどうしても開けない。そこでやゝ聲をあらけて『門番の士よ、今春日局の御歸りであるぞ、不都合をせずに速かに開門せよ』と叫んだ。従者から見れば權威ならびない春日局である由を告げたならば必ず門を開けてくれるに違ひないとも思つたのであらう。それは又誰でも考へさうなことではある然し門番を承つてゐる士はよく／＼控を守つてなかく／＼聞入れない。

番頭の初鹿野傳右衛門は『城内の定なれば上役の許あるまでは如何なる身分の方と雖もお通し申しがたい』といつて聞入れなかつた。

ハ 局よく控に従ふ 春日局はこの有様をよく聞いてゐた。番頭のいふことは如何にも尤もなことであるのでその門



外に待つことにした。その時は極寒の時でその上夜のことではあり、寒風が身を切るやうに吹きすさんだ。局はその寒風に吹きすまされながら番士の門を開けるまで門外に立つて之を待つてゐた。このやうな時であるから局が自ら番士に話合をつけたら何とかならぬこともなかつたらうが掟を靜かに守つて、かゝる寒夜にもかゝらず門外に立つて番士のさしづを守つたといふことは誠に感すべき事である。

番頭初鹿野は直ちに上役に開門するか否かの手續をとつて伺に行つたがなかく歸つて來ない。愈々寒さはつる夜は更ける。それでもやつぱり局はおとなしく門の外に立つて待つてゐた。數時、門にまつてやつとのことで上役の方から沙汰があつて門が開かれた。そこではじめて春日局は門の内に入ることが出來た。

ニ 局番士を賞す 遙かに夜が更けて城の内に歸つて來たので將軍家光も不思議に思つたのであらう。「どうしてそんなに歸りがおそかつたか」と局に尋ねた。すると局は事の次第をつぶさに物語つた上、番士のとつた處置について自分が寒さにさらされ乍ら門外に立つて難儀したことなどは更に思はなかつたやうに口を極めて之を賞讃した。そして「私は規則が大變堅く實行されてゐるのを感じ致しました。」と申上げた。すると家光は笑ひ乍ら「門の出入はきびしくしてあるから」といつて更に打笑つたといふことである。

局がこのやうな高い身分であり、しかもその權勢すぐれてゐたのにもかゝらず規則の大切なことを知つて門番風情の云ふことも堅く守り、寒夜に身をさらし乍らも更に不平一ついはないで之をおとなしく守つたといふことは感すべきことである。そのみならず大變よく規則を守つたことを賞讃した上、「昨夜は大變迷惑をかけた」と云つてかの番所へ菓子折さへつかはしたといふことは誠に感すべきことである。

乙 凡て規則には従ふべきこと

### 1 局の例話考察

主なる發問

- イ 春日局はどんな身分の人でしたか。
- ロ 幕府の大奥ではどんな身分でしたか。
- ハ 局が夜おそく歸つて來た時どんなことがありましたか。
- ニ 其の時局はどうしましたか。
- ホ その翌日局はどんなにしましたか。
- ヘ 局の行で最も感ずる所はどんなことですか。
- ト 掟は何故守らねばならないのですか。

### 2 凡て規則は守るべきこと

右の最後の發問に對する兒童の答に應じて、凡て規則は守るべきものであることを説いて聞かせる。

吾々は學校に來ては學校に於て守るべき色々の規則がある。「廊下を走つてはならぬ」とか又「遅刻してはならぬ」とか云ふやうなのはそれである。又道を行くには、そこに守るべき規則がある。その外色々の規則がある。吾々はどうして是等の規則を守らねばならぬのであらうか。

それは先づそれ等の規則がどうして、又何のために出來たのであるかについて考へて見ればよく分る。一體かうした色々の規則は何のために出來たものであらうか。それは人々を苦しめるためであらうか。それとも人のためになるやうに、であらうか。道を通る時に皆が左を通るといふことはどうであらうか。之を考へて見ると皆が左を通らない



でメチャに通つてゐたらどんなに人は不便なことであらうか。又その爲にどんな澤山な故障が起ることであらうか。かう考へて來ると凡ての規則は人々お互の幸福になるやうにこそ出來たものであるといふことがはつきりと分る。

公園に行つて花を折りつつはならぬといふ掟がある。公園の花は人々がながめて楽しむものである。之を皆が勝手に折取るといふことになつては澤山な人の迷惑をすることになる。

かうして規則が出來てゐると自分一人の勝手から云ふと或は自由なこともあるかも知れない。公園の花を折取つて自分の家の花瓶にでもさせば自分一人は樂しめるがかうした規則があつて之を守るといふことになると、どうしても一人では樂めないからこんな規則があると困るといふ人もあるかも知れない。然し皆のことを思ふと、どうしても一人一人の不自由はあつても規則を設けて之を守るやうにせねばならぬ。

規則は何時もみんなの人のことを考へて出來たものであるから、どんな時でも又どんなことがあつても之を堅く守るやうにしなくてはならぬ。

### 3 兒童の實生活の指導

それでは我々には守るべきどんな規則があるであらうか。それについて次の如く項目にわけて兒童に一々具體的な規則を考へさせ乍ら實際生活の指導をなす。

- 一 教室内では
- 二 學校内では
- 三 道を歩く時には
- 四 公園内では

- 五 電車や汽車汽船中では
- 六 其他

## 六 參考資料

### 春日局年譜

天正七年	誕生。
同 十年	父に別る。
慶長九年	竹千代の乳母として江戸に下る。
元和元年	秀忠將軍職を家光に譲る。
寛永六年	家光痘瘡を病みその全癒を禱る。十月上洛し從二位に叙し春日局の號を賜はる。
同 九年	再び上洛し緋袴着用を許さる。
同 十一年	男稻葉丹後守正勝歿す。
同 十七年	三度上洛す恩遇愈々厚し。
同 二十年	九月十四日歿す。本郷區湯島龍岡町麟祥院に葬る。



## 第十一行 儀

### 一 目的及び教材観

教師用書に『常に言語舉動を慎みて行儀をよくすべきことを教ふるを以て本課の目的とす』とあるによつて本課の目的とする所は明瞭であらうと思ふ。

我々が日常生活に於て言語舉動を慎んで行儀作法を正しく守るといふことは實に大切なことである。古來特に東洋に於てはこの禮式作法行儀といふ様な事を重んじたものである。人にして禮なければ禽獸と擇ぶ所なしとまでいはれた位である。而してその意は今に至つても決して異なる所はないやうに思はれる。我々が日常その言語を慎み舉動を正しくするのは、一は以て他を尊敬し一は以て自らを尊ぶ心である。即ち我々はどこにか自然欲のまゝに放縱なる生活を遂げて行くことを恥づる心が存する。他人の面前で大ビラに食事をする事すら何所にか恥づる所があつて室を異にするとか人目をさけるとかするやうになる。動物は凡てが自然欲のまゝに一切の行動を臆面もなく遂げ、實に見るに堪へない事すら珍らしくない。之その内面に恥づる心がないからである。然し前述する通り物を食ふといふことはやむを得ない自然的な要求であり乍らも人間にはどこにかこれを露出して行ふ所に恥づる心がある。この恥づる心は反面から見れば自分は人間であるといふ自尊自重の心である。この心が現はれて一切の行爲一切の行動がよく規矩に則り人間らしい整然たるものとなるのである。而して又それは他人を尊重することである。他人を人格的に遇する

ことである。動物的な醜き行動は他人と雖も之を恥ぢ之に對して不快の念を起すことは勿論である。この心を尊敬して他に對して正しき行動に出づることは實に人を人間として人格として遇する所以に外ならぬ。かくの如く考へ來つた時、行儀を正しくすると云ふことは人間生活の上から極めて大切なことであり、且道義的に考へても深い根柢のあるものであるといふことがいへよう。

### 二 教材系統

尋一、行儀よくせよ。尋二、不作法なことをするな。尋四、禮儀。尋五、禮儀。高一、禮儀。高二、恭儉

### 三 指導要項

#### 甲 松平好房の例話

- 1 松平好房の人と爲り
- 2 松平好房行儀を正しくす
  - イ 父母のいます方へ足を伸ばさなかつたこと
  - ロ 他所へ外出の場合
  - ハ 外出から歸つた場合
  - ニ 父母より物を賜はりし場合
  - ホ 談父母の事に及びし場合



乙 行儀についての心得

- 1 父母に對する行儀
  - 2 他人に對する行儀
  - 3 獨りをつゝしむこと
  - 4 行儀に對する其の他の注意
- 丙 坐せる姿勢の實習

四 指導計畫

- 1 先づ松平好房の例話を説き、次に行儀に對する心得について説き、終りに坐せる場合の作法を實習するがよからう。
- 2 松平好房の例話は逸話的なものでなしに例話であり乍ら極めて抽象的なものである。取扱ふ教師は之を出来る丈け具體的に實際化して取扱ふことが何より大切である。
- 3 行儀に對する色々な心得は單に抽象的に聞かせるでなく、成る丈け具體的に説明して、兒童にとつくりと納得せしむるやうにありたい。
- 4 坐せる姿勢の實習はどうしても、作法室に於て行はねばならぬ。それがないと實習が出来ない。それは女兒のみに限らないで男兒童にも十分よく練習させるやうにすることが大切である。

五 教材解説・説話要領

甲 松平好房の例話

1 松平好房の人となり

今から二百六七十年前に松平好房とて非常に行儀の正しい感心な人があつた。好房は大和の福知山の藩主松平忠房の嫡子であるから、お殿様の世嗣として生れたわけである。幼い時から、世人の感心する程の立派な人物で、親に對しての孝道の如きは特に今に云ひ傳へられてゐる所である。そして又非常に禮儀作法の正しい人であつて行儀を亂したことはなかつた。さうした立派な人物で大いにその將來については父忠房をはじめ、好房を知れる程の人は皆大きな望を囑してゐたのであつたが、不幸、好房は年僅かに二十一歳、父忠房に先だつてこの世を去つたのは、誠に惜しみても餘りある所である。

今好房が非常に行儀の正しかつたことに就いてその一二の例を話して見ると次の如きものである。

2 好房行儀をよく守りしこと

1 父母のいます方へ足を伸ばさなかつたこと 好房は特に父母に對しての行儀が正しかつた。幼い時分から自己の居間にある時でも勿論父母の目の前ではさうであつたが、かりそめにも父母のいます方へ足を伸ばしたことはなかつた。人の前に足を出すことは非常に失禮にあたるものである然し吾々はともすると父母の面前でも親しきに馴れてその方へ足を伸ばすやうなことも少くない。まして父母と室を異にしてゐる場合などは父母のいます方に足を伸ばす位は平氣でやるが、好房は決してそのやうなことをしたことはなかつた。勿論それは殿様で最も貴族的な生活の内にあ



つたことであるから、自然さうした行儀も物堅いものであつたかも知れない。然しどこまで好房が親を敬する心によつてよく行儀をさほどまで正したといふ事は何といつてもその心だけでも我々の範とすべき所ではないか。

□ 他所へ外出の場合 常に親を敬ひ尊ぶ心のあつた好房は又他へ外出する場合は必ずその行先を告げて外出した。かつて無断で外出などしたことはなかつた。之も云ひやすくして實行するとなると吾々の如き凡人ではなかく困難な事である。好房は、かつて無断一人勝手に方々遊びまはるやうなことはなかつたが、是又感すべき事ではないか。

ハ 外出から歸つた場合 外出の時はその行先を告げて外出した程であるから、外出から歸つた場合も決して無断で自分の居間にはいるやうなことはなかつた。必ず先づ第一に父母の面前に坐つて敬禮をなし恭しく挨拶をし、その日のありし次第をつぶさに物語りその上で自分の居室に入るのを常とした。誠に届いた心がけと云はねばならぬ。一寸したことではあるが、かうすることに依つて父母の心がどんなに和やかなものであつたであらうか。

ニ 父母より物を賜はりし場合 父母が何か物を賜はる時には又非常に禮を厚くし之を拜して受け、推し戴いて厚く御禮を言上した。そしてそれ等の品物は特に丁寧に取扱つた。

ホ 談父母のことに及びし時 吾々は六週間現役に於て、言皇室のことに及べば必ず不動の姿勢をとるべきことを訓練されたものである。この意味は外でもない、皇室に對して尊敬の意を表する意味に外ならぬ。恰も之にも似たやうな行が好房には自然の中に行はれた、一は言皇室に關することであるが、好房のは父母にまでそのことが及んでゐたのである。近侍の者とても話をしてゐる最中談一度父母のことに及べば必ず好房はその居すまるを正したといふことである。以て如何に父母に對しての行儀作法を正しく守つたかといふことが察せられる次第である。

### 乙 行儀についての心得

#### 1 父母に對する行儀

吾々にとつて何が親しいと云つて父母にもまして親しいものはあるまい。然し人はともするとその親しきに狎れて禮を失するといふやうなことがないでもない。それについては好房の如きは實にどう思つて見ても感心する外はない尤も好房は大名の家に生れ、しかも今とは時代も變つてゐる。吾々の生活とは既に身分も變れば時代も變つてゐるのであるから、吾々の如きは好房と同様の行儀を形の上に於てすることは出来ない。然しその形の上のことでも學ぶべきことも必ずあるには違ないが、それにもまして吾々が大いに學ぶべき點は實にその精神その心根である。どこくまでも父母を敬するといふ精神だけは大きいに學ばねばならぬことであると思ふ。そしてその心を以て各々父母に對する行儀を正しく守りたいものである。

#### 2 他人に對する行儀

こゝに説いた例話は凡て父母に對して行儀を正すものであつたが、決して行儀よくするといふことは、父母に對してばかりではない。父母以外の他人に對しても、よく行儀を正しくすべきである。兄弟に對しては兄弟に對しての行儀があり、又その他目上の人や友達同志にも夫々に守るべき行儀があるからよく氣をつくべきである。

#### 3 獨りを慎むこと

行儀正しくするといふことは決して父母やその他人の面前ばかりではない。人が見てゐるやうとるまいとよく自分の行儀を正しくするといふことが大切である。人のゐない所であるからと云つてみだらな振舞をする時は何時の間にかそれがその人の習慣になつてしまつて思はず野卑な言葉や動作が出るものであるからよく氣をつくべきである。

總じて吾々は自分の言葉や動作に氣をつけ行儀を正しく守らぬと自分の品位を落し、又他人も自分を蔑視するであ



らう。吾々はよく自分の品位を保つ上からも常によく行儀を正しくせねばならぬ。

4 行儀に對する其の他の心得

イ 人の面前にて耳語、あくび等をなし、又法外なる大聲を發するなどは慎むべきことで、かうしたことに依つて他人はどの位不快を感じるであらう。

ロ 目上の人の談話中は特に之を静聽し、其の談話中に決して他人と言葉を交へぬこと。之も子供にはよく有り勝ちなことである。之はよくその行儀を辨へないでかゝることになるものであるから、十分説いて聞かせることが大切である。やゝ實演的に説くことも大切である。

ハ 人に嘲笑などをせぬこと。之はよく異郷の人、特に外國人又は不具癡疾の人に對して嘲笑などをしやすいものであるから十分注意すべきである。

ニ 歩み乍ら物を食し横臥して書籍などを見ぬこと。歩み乍ら物を食ふ程いやらしくも亦見苦しいものはない。かうしたことについてはよくさうした経験を發表せしめその經驗に訴へて説いて聞かせる事が大切である。横臥して書籍を見ることは大人にはよくあり勝ちであるが注意すべき事の一つである。

丙 坐せる姿勢の實習

最後に適當に時間を設けて坐せる姿勢の實習をなさねばならぬ。坐せる姿勢であるから、作法室を使用するより外に方法はない。

坐せる時の姿勢。上體を眞直に保ち兩足の拇指を少しく重ね兩手を膝の上に置き又軽く組み前方を正視すべし。

## 第十二 勇氣

### 一 目的及び教材觀

『眞の勇氣を養ひ言ふべきことは斷じて言ひ行ふべきことは斷じて行ふやう教ふるを以て本課の目的とす』とは教師用書に掲げられた目的である。凡そ我々が日常の生活、日常處世の上から勇氣の必要な事は喋々を要せない所であらう。教師用書にもある通り、言ふべきこと、行ふべきことは斷じて行ひ、自ら善なりと信じ、我が當に爲すべきことに對しては進んで之を斷行し、些の逡巡をせないのは之全く勇氣の致す所である。されば世に云ふ進取の氣象などと稱せられるのも實は之一つの勇氣と見るべきであらうと思ふ。更に又我々の生活上に於てはあらゆる艱難辛苦の振りかゝる場合も少くない。かゝる時薄志弱行の徒は全く意氣を喪失して何等爲す所なきものであるが之亦一に艱難辛苦に堪へ得るだけの勇氣の缺けたるがためである。一切の困苦に堪へる所謂忍耐の如きも亦是一つの勇氣と見るべきであり、更に世によく云はれる克己の如きも亦勇氣で、二元葛藤の内面的苦惱を我が爲すべき道に統一してよく私利私慾我利我執を抑制し、我が行くべき道を正しく行はしめるもの、是に勇氣の力に依らないものはない。かく考へたとき、勇氣の必要が日常處世の上に如何に大切であるかはその觀察に難くない所であらう。然れ共、特にそれが非常大事の場合に於ては、それが非常大事の場合であるだけそれだけ、一段大きな勇氣を必要とするものである。

我々はかくの如き非常大事の場合が常にその身に振りかゝつて來るとは思はないけれ共亦さうした事が絶對的にな



いといふことも斷言出来ない。勇氣の徳が日常の生活に於てすら大切であり、更に、たまに遭遇せんとも限らない非常大事の場合には、特にその必要があるとすれば、日頃よく修養して勇氣の心を涵養して置くことは大切である。但し勇氣について考へる場合大切な事は眞の勇氣と勇氣に以て非なるものとの存することである。この兩者については篤と區別を立て、夢似て非なる粗暴血氣を以て眞の勇氣と曲解してはならぬ。

## 二 教材系統

尋一、元氣よくあれ。 尋四、克己。 尋五、勇氣。 尋六、沈勇。 高一、勇氣。 高二、義勇奉公。

## 三 指導要項

### 甲 木村重成の例話

- 1 木村重成の生立
- 2 木村重成の武勇
  - イ 大阪冬陣
  - ロ 今福の戦と重成
  - ハ 鳴野の戦と重成
- 3 重成の沈勇
  - イ 講和の成立

### ロ 血判状受取

### 乙 勇氣に對する訓辭

- 1 重成の例話考察
- 2 勇氣の必要
- 3 勇氣と粗暴

## 四 指導計畫

- 1 本教材の中心は彼の木村重成の例話である。即ち彼一生中の最も花々しく且、最も彼の眞面目を發揮してゐる大阪冬の陣に於ける奮戦と彼の血判状受取りである。本課取扱の大體は、先づこの例話から入るがよからう。そして前にも屢々取扱つたやうにその例話の批判をなし訓辭に入るがよい。
- 2 重成の例話を生かすためには先づ大體彼の人と爲り生立を説きその人格的背景を描き、その背景の許に本課を取扱ふがよい。
- 3 重成奮戦の様子は修身書に説く所は餘りに抽象に過ぎ單純に過ぎるからいさ少しく具體的に詳説してその奮戦の有様を描出するがよからう。
- 4 血判状受取りもその實状を今少しく描出するやうにありたい。單に通り一遍の説話に終つては何等の感興もない。
- 5 勇氣については特に粗暴血氣にはやることを嚴に區別せねばならぬ。その點は目的に於てあけてある通り、眞



の勇氣を我々は希求してやまないものでなければならぬ。眞の勇氣とは言ふべきことは断じて言ひ、行ふべきことは断じて行ふ是である。只、弱きをいぢめたり、亂暴狼藉が勇氣と間違はれてはならぬ。この點は篤と説いて聞かすべきであらう。

## 五 教材解説・説話要領

### 甲 木村重成の例話

#### 1 木村重成の生立

大阪の役に於て名高い木村重成は木村重茲の子である。木村氏は祖父の代から豊臣氏に忠勤をぬきんでた家柄である。祖父定證は元龜天正の頃に秀吉に仕へ戦功あり、父重茲も亦秀吉に仕へて屢々戦功を立てた。父重茲は秀吉がその子秀次に關白を讓る時、その御附人とされ、それ以來、主として秀次に仕へた。然るに秀次はその身を修めず屢々暴戾な行が多かつたので、遂に秀吉の怒にふれて自殺せねばならぬことになつた。

重成の父重茲もその責任を感じて攝津茨木大門寺に於て相果てた。その長男、志摩介——重成の兄——も父の自殺を聞いて京都正行寺で自殺した。時に重成は僅かに三歳、彼の曲折破亂の生涯は早くも茲にその幕は切つて落された。所が其の頃大阪城内には秀吉の寵兒秀頼が生れてゐた。方々からよい乳母をと探したが、一向之ぞといふよい乳母が見つからない。進める人があつて、重成の母は大阪城内に秀頼の乳母となり、淀君の側にあつて秀頼を養育することになつた。この時、重成も亦母に伴はれて大阪城内に入つたのである。かくて秀頼と重成とは乳兄弟として成人したのである。奇しき因縁といはねばならぬ。

#### 2 重成の武勇

1 大阪冬の陣の發端 かの戦國の世を一統し、更に雄志を海外にまでも圖り、二度まで明國を討たんとして、兵を朝鮮に向けた豊臣氏も、秀吉が慶長二年伏見に薨するや、次第に勢は徳川家康に傾きかけ、別けて慶長五年、關原の戦後は天下の實權は殆んど家康のものとなつてしまつた。然し、それかと云つて、未だ家康には大阪の豊臣氏のこと氣にかゝつてならぬ。いつ如何なることを以て仇を報ぜられんも計り難い。成程、今は豊臣氏は攝津、河内、和泉に六十五萬石を與へられ、徳川氏の一大名となり、豊臣、徳川全くその地位をかへてはゐるもの、豊臣秀頼は、堅固な大阪城にあり、かゝつて加へてその富力は豊かで、城内の倉庫には糧米、金銀財寶がいくらあるか知れないとまでいはれてゐる。それに秀頼漸く長じて十三歳になり上下の信望愈々厚く、秀吉以來の恩顧の武士が數多くつき従つてゐる。天下の實權を握つたといふもの、家康にとつて大阪方が氣になるのも無理もないことである。

そこで家康も何とかして豊臣方の勢力をおとしたいものと、終始その念頭を去らなかつた。所がこゝに端なくも廣寺の鐘銘事件といふ大問題が勃發した。事の起りは何でもないのであるが家康が事をかまへたといへば、かまへたものといつてもよい位の問題である。秀吉在世中に京都に方廣寺を建て、十六丈もある木像の大佛を安置したが、慶長元年に起つた大地震のためにすっかり毀れてしまつた。秀吉は再建を思ひ乍ら薨じてしまつた。そこで家康は秀頼に向つてその再建をすゝめた。慶長十三年に工を起し五年が、りて出来上つた大寺の高さは十五丈、中に大佛六丈三尺の佛像を安置し、同時に一萬七千貫の大鐘も出来上り八月三日大佛開眼供養の式を舉げる段取りになつてゐたがこの大鐘に京都南禪寺の和尚清韓の撰した鐘銘の中に、『國家安康、君臣豐樂』の句あることを聞き、之はつつきり家康を咀ふものであるとこのことから遂に、大阪の豊臣方と關東の徳川方との間に戦端を開くことになつた。



家康からわけのわからぬ無理難題をふきかけられた大阪方も、愈々事急なりと見てとると大野治長、弟治房、木村重成の面々相謀り淀君も女だてらに決心し、諸國へ書を送つて兵を招けば秀吉の舊恩に感ずる眞田幸村、後藤又兵衛基次、塙直之、長曾我部盛親等の面々相集ること九萬餘、兵糧は二十萬斛に上り、一年や二年の籠城も敢て心配ないまでに準備が出来上つた。關東方では待つてゐました、とばかりに駿府にあつた家康は近畿、北國、中國、西國の諸侯に命じ慶長十九年十月二十三日には己に京都の二條城に入つた。家康の子秀忠は大軍を率ゐて西上し、十一月一日伏見に着し翌二日に二條城に家康と會見した。かくて十一月十八日には家康、秀忠共に大阪に入り茶臼山に上り大阪城の形勢を視察した。徳川方の率ゐる軍勢二十一萬と稱せられた。

□ 今福の戦 大阪方はそれ／＼部處を定めて徳川勢に備へた。木村重成も一方の部將として東二の丸を守つた。大和川は大阪城の北方を東から西へ流れてゐるが、その北岸を今福堤、その南岸を鳴野堤と云つた。こゝの備をかためてゐるのが大阪方の部將矢野和泉守である。十一月二十六日、徳川方の部將、佐竹義宣が精銳の軍勢數多を率ゐて、勢銳く押寄せて來た。矢野和泉守は部下を勵まし、こゝを先途と戦つたが多勢に無勢どうすることもならず、一人残らず花々しい戦死を遂げてしまつた。

勝に乗じた佐竹勢は一度にとつと攻入つて、片原町から町口の柵も一氣に奪取し、二、三の柵も勢に乗じて奪ひ取つてしまつた。城中には注進が引切なしに達する。城中では立てもゐてもゐられない有様。

ハ 鳴野の戦 之を聞いた木村重成。部下の將士に鐵砲の手の者五十人を加へさせ、一散に今福堤へと馳け出した。

重成部下の將、川崎和泉守が鋭く馳せ向ふと佐竹勢漸く浮足立ち町口を捨て二、三の柵を固めにかゝつた。そこへ更に、大井、平塚の手兵が馳け付けたので激戦愈々急となり、佐竹勢苦境に陥り遂にたまりかねたかこの柵も又捨て、

退く。そこへ七手組の頭、堀田勝喜と共に馬にふんまたがつて馳けつたのが木村重成である。猛然と立つた木村重成、こゝを死守する佐竹勢、こゝに猛烈な一大激戦が開展された。時は恰も己の刻、午後の二時頃である。城中では木村と佐竹の取組はよい取組であるが佐竹勢には次から次に新手の援兵を送つてゐるから、事危険なりと見てとつて音に聞えた後藤又兵衛基次が木村の軍勢にかけつた。

この時、木村重成の軍勢は川向に控へてゐる上杉の陣所から雨霰と打出す鐵砲に打ちすくめられ、堤の蔭にうつ伏して頭も出し得ない有様である。そこへ又兵衛、馬廻り十人ばかりを引具して堤の上に伸上りざま、鐵砲を打出して味方を勵ました。この勢に引立つて、木村の軍勢も一度にとつと打出したので今度は遂に上杉の軍勢が打ちすくめられてしまつた。この時又兵衛「秀頼公のお聲もありましたから、あなたの手兵は長い間の合戦に氣もからだも非常な疲勞、新手の私がかはつて一戦致しませう」と重成に申入れると「御厚意は有難い次第乍ら、この差し迫つた場合に入り替など致して敵に隙を見せては一大事、それに又、若年の私がおめ／＼あなたに入替つてもらつては何とも申譯の次第もございません」と断れば 又兵衛「如何にも、如何にも」とうなづく。かくてこのま、後藤又兵衛の軍勢は横合から佐竹勢見がけて砲先を向けて盛に打出した。さすがの佐竹勢も、このはげしい砲先にひるめき出し、浮足立つと見るや、時刻はよし、と木村重成、猛然と立ち、馬を陣頭眞先に進め、者共つゞけと一目散に柵に向つて突入した。このすさまじい勢に佐竹勢は一度に崩れ出し柵の中に逃げて入る。それでも佐竹勢には、豪の勇士、腕に覺のある武士が多い。秋田、戸塚、戸村の面々二十騎ばかり、槍を横たへ、「いざ來れ、見事に勝負な仕らん」と待ちかまへた。木村の部下佐久間藏人、此の柵の木戸口から走り出で一番槍を名乗つて突いて入り、戸村外一騎を物の見事になぎ倒した。重成はこゝぞとばかりに中白の旗に銀瓢箪の本もとに白熊の馬標を引添へて眞一文字に突いて入る。佐竹の勇



士共、そののがすなと闘を作つてつき進む。後に控へた又兵衛、時は今とばかりについて入る。混亂、奮戦、ものすごさすさまじさ、はげしい戦ひがつゞく。さしもの佐竹勢も大阪方の奮戦に旗色悪く、この柵も打捨て、奥の柵まで引下がる。佐竹勢、こゝ一步も退くな。それ防げ、それ固めよとひしめき／＼防いだが、勝ちほこる重成の軍勢は、御大將、重成が第一線に立つて突進むの心はけまされ、それ進め／＼と、見事に奥の柵まで奪取してしまつた。さすがの佐竹勢、今はこれまでと、長驅、敗走してしまつた。この合戦は激しいもので、しかも長時間のものすごい戦であつた。戦の最中に、木村重成方の勇士大井右衛門は馬を陣頭に進めて部下の指圖をしてゐる最中に敵弾に中つて倒れた。重成は之を望み見て忠義の士的首級だ。之を敵手に渡してなるものかと彈丸雨飛の眞唯中をくゞりぬけて、こゝかしこと探しまはりやつと探して、之を味方に置いて戦つたといふことであつた。

明けると十一月二十七日、この日、木村重成は八丁目口の主將として戦つた。この日も前日にまさる目覺しい働きをして天晴れ功名手柄を立てた。重成奮戦の有様は實に敵味方諸共に賞讃の的となつた。時に重成とつて二十歳。

### 3 木村重成の沈勇

4 講和 大阪方は今福、鳴野、眞田丸、八丁目口で大勝したが、福島守りは破れてしまつた。家康にしても最初から大阪勢を粉碎することの困難を知つてゐた。それで一方、攻撃の手配りをすると共に、他方では又あらゆる手段を講じて講和をはからうと色々手をまはした。勿論それは大阪方が案外手ごはいといふことも原因してゐることである。

大阪の城中でも天主閣に屢々敵弾が命中したので淀君は女のことではあり、少からずおぢけもついでゐて、之又、適宜な條件なら講和をしたいものと考へてゐた。そのため講和の下相談はすらくと進んだ。

□ 講和誓書受取の使命 講和の下相談が成立し愈々之を成立せしむるために、徳川方と豊臣方との誓書の交換をすることになつた。この時大阪方からの使節を承つたのが當年とつて二十歳の木村重成であつた。重成はこの日、白小袖の上に淺黄小袖の袴を着こみ、蘆毛の駒に打まがり文箱を袱紗に包んで首にかけ、供の者七人を引連れて茶臼山なる家康の本陣に向つた。昨日までは互に鎬を削つた敵方へ單身出かけるのである。餘程の勇氣膽力のある者でなくては到底及びもつかぬことではないか。

茶臼山に至ると京極若狭守忠高、案内役を承つて本陣へ導く。そこには敵の老將星の如く威儀嚴かめしく居並んでゐる。重成些の臆する色もなく、その中を靜々と通りぬける。『すは！』といへばすぐにも打ちかゝらん物々しい光景、たゞ目ばゆいばかり。そこを通りぬけると譜代の大名、座を列ねて重成の様子に目もはなたず、重成尙も悠々些のせまる所なく列座の中程に進む。家康は書院の中央に重成を引見した。本田正純が家康の面前に進み、重成のことを告げると、やがて、重成は少しの臆する色も見せず、重々しい口調で講和のよろこびを申上げ重ねて御印拜見のため使した由を申述べる。

すると家康は舌の先を少し切つてその血で誓書に血判して正純に渡した。正純は重ねて之を重成に渡す。重成は禮法正しく、之をその臺と共に押しいたゞき、改めて血判を見ると、それが如何にも幽かで不明瞭である。そこは家康に對する體面も重んじなければならぬ。重成はいと丁寧な口調にて『秀頼公には別に仔細のあらうとは存じませんが母堂は婦女子の事でもあり今少しく御血判の儀をはつきりと御願申上げ奉る』と之又、臆する所なく申上げた。するとさすがの家康も、急所をつかれたのか如何にもきまり悪るけに『いや、どうも恐れ入つた儀に存ずる。老人になるとかく指の血が少う御座いました』といつて辨解したが、重成それには一言半句も答へない。家康も、しかたがな



い改めて血判をし直して之を重成に渡した。

重成はうやくしく之を押しいたゞき、法式通りに之を文箱に納めた。かくて禮法正しく家康に別れを告げた。それから居並ぶ大名小名連にも、事をすませた今度は、いと丁寧に「先刻はまだ秀頼公の御詞も家康公へ言上致さない中の事故各々方には御挨拶も致さないで失禮を申上げましたが、本日は何から何まで千萬辱なき仕儀有難く御禮申上げます」と挨拶をした。居並ぶ一同は、この落度のない挨拶ぶりに皆水を打つたがやうに、あつけに取られる。間近にあつた筑後守忠政すかさず「いやはや御念の入つたことで御座る。御遠慮なく御通り下さるやう」といつて、之又いといんぎんに挨拶した、かくて重成は静々と玄關から外に出で馬に跨つて大阪城へと歸つて行つた。

重成の後姿が見えなくなると、一同の老將達も、重成の、その態度といひ、物言ひといひ、所作進退一々法式にかなひ、その悠揚せまらざる態度にいたく感心し、口を極めて賞讃の辭をあびせた。家康も亦静かに重成の見えなくなるまで、その後姿をうちながめてゐたが、重成の姿が消えて見えなくなると、左右を顧みて「ホッ」と一息つきながら「あ、立派な武士だ。若年にも似合はぬ立派な態度だ」といつて敵將であることも打忘れて之を賞揚した。

城中に歸つて事の次第を具さに言上に及ぶとその手柄を口を極めて賞し「さすがは木村長門守」といつてほめた、へた。この立派な武士も次に起つた大阪夏の陣で遂に勇しい戦をしたが豊臣の城を枕に花々しい戦死を遂げた。

## 乙 勇氣に對する訓辭

### 1 重成の例話考察

#### 重なる發問

イ 徳川家康が大阪を攻めた時木村重成はどんな働をしましたか。

ロ 重成が家康の陣屋に使ひに行つた時のやうすはどんなでしたか。

ハ 重成は家康の血判がはつきりしてゐないのでどうしましたか。

ニ 重成の行について感心する所はどんなことですか。

等の發問をなし、その答を補説し訂正し、彼の眞の勇氣を十分に理會させるやうにせねばならぬ。即ち、(イ)、重成奮戦の模様を知らせ、(ロ)、(ハ)血判状取りの有様をよく理解させ、(ニ)、如何なる大軍と雖も物ともせず勇氣を奮つて鼓して奮戦して目ざましい働をしたこと、敵地に使ひして隠する所なくその目的を達したこと、言ふべきことは隠する所なく之を言ひその使ひに落度のなかつたこと、立居振舞がよく禮儀にかなひ道理順逆に適つてゐたこと等である

### 2 勇氣の必要

木村重成はかやうに、いざといへば目に餘る大軍をも物ともせず、おそれひるまず勇氣を鼓して之と戦ひ、又如何なる人の面前であらうと、我が成すべきことは斷じて之を爲し、我が言ふべきことは斷じて之を言ひ一として、ひるみ隠する所はなかつた。我々も大きくなつて、もしも戦争にでも出かねばならぬ時には、重成と同様勇氣を奮つて如何なる大軍と雖もおそれることなく之をふみつぶすだけの勇氣がなければならぬ。然し、そんなにいつも戦があるものでもなし、又あつてもならぬことである。それではほんとうの勇氣は戦争でもなければ、必要はないかといふに決してさうではない。常に勇氣は必要である。毎日々々の私達の生活の中に勇氣は絶えず必要なのである。即ち

(イ) 言ふべきことは斷じて云ふこと、も勇氣である。自分で知つて居りながら恥かしいとか、おつくうなとかいふつたやうな事で、よう云はぬやうなことでは決して勇氣のある人とは云はれない、自分が言ふべきことは、ハッキリと、そして、キツバリといふのが勇氣である。又



(ロ) 我が爲すべきことは断じて爲すこと、も勇氣である。自分が爲さねばならぬことは決して遠慮はいらぬ。思ひ切つて爲さねばならぬ。然し、人として爲すべからざることをするやうなことは、決して眞の勇氣とはいへない。それでは自分が爲さねばならぬことには、どんなことがあるか、よく考へて見よう——とて考へさせて發表させるがよい——尙

(ハ) あらゆる困難に打勝つこと、も勇氣の一つである。私達が毎日、かうして日暮しをしてゐる中には随分難儀なことに出會ふことがある。例へば遠足に行つて足が痛み出したり、暑さがひどくなつて來たり、或は寒さがひどくなつて來たりする。かうした困難に出會つた時、決してこの困難にまかされなまいふことが大切で之又大事な勇氣である。次には

(ニ) 少々しくじりをしても落膽せぬこと、是又勇氣である。算術を失敗して、あゝもう自分は駄目だなど、思ふのは決して勇氣のある人はない。少し位の失敗があつても決して氣を落してならぬ。是又一つの勇氣である。

### 3 勇氣と粗暴

だが眞の勇氣、ほんとうの勇氣は決して弱い者をいぢめたり、又亂暴をして、戸障子をこはしたり、硝子を破つたりすることではない。かうしたことは勇氣のやうだがそれはほんとの勇氣ではなくて、それは「イタツラッコ」といふものであつて、それは決してほむべきことではない。ほんとうの勇氣のある人は、弱い者は助けてやる、品物は皆大事に取扱ひ、日頃は必ずおとなしくしてゐて、云ふべきこと、爲すべきことはハッキリとしかも立派に仕上げて行くものである、この所はよく氣をつけて、ガキ大将になつたり亂暴者になつたりするやうな事のないやうにすることが大切である。

## 第十三 堪 忍

### 一 目的及び教材觀

心理學の教ふる所によれば憤怒は一つの本能であるといふ。それで怒るといふことは本來人に備つてゐる自然の情であるといはねばならぬ。併しそれが本來人に自然に備つてゐるからといつて、それが善良であるとはいはれない。否それは善でもなく、悪でもない、自然そのものである。この自然そのものを、自分の爲すべき理想によつて統一し我が行ふべき道そのものに則つて、或は之を抑制し、或は之を善良に理想的に發動せしむる所に人の人たる所以が存する。單なる内心の感情に支配され、本能の奔放するまゝに我々が行動するならば、それは人として決して精鍊され修養された人といふことは出来ない。然し、本來人に備はるこの憤怒の情は、自然に本來備つてゐる情緒だけになか／＼根づよいものであることは、各々内省して見てもよく分かることである。ともすると、その内面の情緒は激發して、悔を永遠に残すことも少なくない。されば我々は寧ろかうした憤怒の情の如きは抑制して怒り争ふことなく堪へ忍ぶこそ最も大切なことであるといふやうにさへ考へられるのである。さうすることがあらゆる場合に於て萬全の策であると思はれるのである。再三説く所あつた如く、人間の生活は社會生活である。各々の人の一切の言行はあらゆる人々に相交渉し相影響して行くことは否定し去ることは出来ない。私の憤怒は他に相響く。否他を相手としてさへ怒ることが少くない。事毎に自分の氣に食はぬ事については怒り争ふといふことになつたら、我々の社會生活が如何なる



る結果に立至るかはこゝに述べるまでもないことである。そこでよく人口に膾炙されてゐる如く「堪忍ハ無事長久ノ基、怒ハ敵ト思ヘ」の金言の通り妄りに怒り争ふことをなさずして堪忍の強き心を持つ事は實に大切なことである。功利的見地から見ても「短氣ハ損氣」である。理想的な見地に立つても、ならぬ堪忍をして、よく我が理想に則つて生活することは人として當にさうあらねばならぬことである。

特に兒童の感情生活情緒生活は粗野であり突發的である。何等の思慮する所もなく抑制される所もなく激發し易いものであるから、かうした徳目について説いて聞かせることは誠に當を得たことであるといふべきであらう。

## 二 教材系統

尋二、辛抱強くあれ。 尋四、克己。 尋五、忍耐。

## 三 指導要項

### 甲 木村重成の例話

- 1 重成の勇氣に對する復習
- 2 重成掃除坊主に罵倒さる
- 3 重成の堪忍
- 4 重成の眞勇に衆人驚く

### 乙 堪忍に對する訓辭

#### I 重成の例話考察

- 2 格言取扱
- 3 訓戒

## 四 指導計畫

- 1 本課の教材をなす例話は前課と同様木村重成である。それで、先づ前課に取扱つた重成の勇氣について復習し之と連絡づけて本課の説話に入るがよい。
- 2 本課と前課とは人物としても同一人物で連絡があるが、之と共に徳目から見ても決して無關係ではない。堪忍は寧ろ一つの勇氣であることと見ることが出来るからである。堪忍は一つの克己である。克己であるから努力である努力であるから、そこに強き勇猛心がなければならぬ。此點から見ても前課と本課とは連絡をもつものである。よく連絡づけて考へて置くことが大切である。
- 3 本課教材の例話は、茶坊主風情の齊阿彌にはづかしめられながら、之を堪へ忍んだといふ所である。然し、この點を取扱ふについては餘程細心の注意を要する。この場合、重成は全くの無力であつて茶坊主に、全く手も足もよう出せなかつたといふやうに説けば、それは堪忍にあらずして臆病といふことになつてしまふ。たゞ一打ちに打ちする事は重成として見れば易々たるものであるが、今は大阪方にとつては大事な場合、いらざることに事をかまへないで、燃えつくやうな憤怒の情を抑へた所に本教材の尊い價值が存する。
- 4 だからどこまでも、内面の憤怒の情を一度に描かねばならぬ。かくして次に憤怒の激發にまかせず、そこに思



感分別を加へて、その激した憤怒の情を抑へた過程を描出せねばならぬ。これは間髪を入れぬ過程乍らもこの過程なくては本課の教材は死んでしまふのである。

5 訓辭については兒童日常の生活経験と常に密接なる關係を持たせて十分に徹底するやうに説くことが大切であらう。

6 特に例話を批判させる場合、何故に重成は怒らず奥に入つたか、その精神を十分に捉へさせることが大切である。それでないと、ともすると前にも述べた通り單なる臆病にもなつてしまふ。

## 五 教材解説・説話要項

### 甲 木村重成の例話

#### 1 木村重成の勇氣に對する復習

◇ 徳川家康が大阪を攻めた時木村重成はどんな働をしましたか。

◇ 重成が家康の陣屋に使ひに行つた時の様子はどんなでしたか。

◇ 重成は家康の血判がはつきりしてゐないのでどうしましたか。

◇ ほんとうの勇氣のある人はどんなことをするでせうか。

等の如く發問し、木村重成の勇氣について復習して、眞に勇氣のある人は決してアラ／＼しい振舞などは一つもするものではない。又必要もないことに怒つたり争つたりすることもない、弱い者に對しては特によくいたはり無禮なことなどあつても怒らずに赦してやるものである。それであるから心なき人は眞に勇氣のある人を臆病者とさへ見誤

ることが度々ある。前まで話した木村重成こそは實にほんとうの勇者である。如何なる大事に對しやうとも眉毛一本ゆるがさない程の膽力を有してゐた。どんなに強敵の中に入らうと決しておびえることもなければ、うろたへることもなく、その盡すべき道をちやんと盡した。

それ程の勇者であるが、日頃は誠にやさしい重成であつた。どんなことがあつても怒らず争はず胸の中でこらへるだけこらへた人である。これこそまことの男、ほんとうの勇者といはねばならぬ。

重成が堪忍の心の強かつたことに對しては次のやうな話が言ひ傳へられてゐる。

#### 2 重成掃除坊主に罵倒さる

重成がまだ十二三歳頃のことである。その頃重成はまだ武藝の修養に一心になつて餘念もなかつた。或日のこと、どうしたことであつたか掃除坊主の齊阿彌と戯れた。すると相手の齊阿彌がひどく怒つた。掃除坊主といふのは城内や武家の邸内で茶の湯その他一切の給仕をする雑役を勤めるもので髪を剃つてゐたから掃除坊主といつた。勿論身分の高いものではない。身分の高いものではない乍らその時齊阿彌は重成に向つてひどい怒りやうであつた。そして場所柄も辨へねば前後もなく重成に向つて悪口雑言の限りをつくし、今にも打つてかゝらんとする有様であつた。側に居てこの有様を眺めてゐた者共はどうなることかと手に／＼汗を握つて心配顔をして打眺めてゐた。

#### 3 重成の堪忍

悪口雑言の限りをあびせられたら、誰だつてぢつとはしてゐられない。夫に身分の上を考へて見ると尙更さうだ。相手は高が掃除坊主だ。それにこちらはレッキとした武士の子供、一ニジリにニジリつけ得る丈けの権力さへある身分である。殊に亂世戦亂の時代には武士の権力はいやが上にもはけしいものである。いざといへば直ちに刀の柄に手



をかけ、たゞ一打にやつたものだ。それに今は武藝の修業に唯一心になつてゐる重成である。腕はうなつてゐる。

「何!! 小癩な場所もあらうに」と一時にこみ上げる怒の焔がどつとばかりに燃え盛つた。並大抵の者ならすぐにも刀の柄に手のかゝる所であるが、流石は膽力の坐つた重成である。

「いや待て、相手は高が掃除坊主風情ではないか、今はつまらぬことに怒を發して事を損じる時ではない」と燃えさかる怒のほむらをヂーツとこらへ、怒つた顔色さへ見せないばかりかニコ／＼顔をして奥へ入つた。

なる堪忍は誰もするが、ならぬ堪忍するが誠の堪忍である。重成は實に格言にある「ならぬ堪忍するが堪忍」をそのまゝ、實行したものと云はねばならぬ。

日頃武藝に勝れた腕前の重成のことである。掃除坊主風情にあれだけの悪口雑言をあげせかけられたのであるから今こそ一刀兩断手にも見せるに違ないと、かたづを呑んで見てゐた衆人ばらは、唯々ニコとして奥に入つた重成の態度に全く意外の感があった。日頃重成の勇名をうたつた人々もその有様にいたく失望した。そして何時とはなしに重成を臆病者にしてしまつた。意氣地なしにしてしまつた。そして多くの人々は唯彼のその振舞を嘲り笑ひ、のゝしり諷るといふ有様であつた。そのために重成の氣勢は頗るあがらずあはれな有様であつた。然し眞に重成の心中のえらい所を見てとつた人もないではなかつたらうが、多くの人には重成の更にえらい所が見えなかつたのである。非常にえらかつたからこそ掃除坊主風情を相手にしなかつたのであるが、衆人にはそれが見えなかつた。重成の氣勢頗るあがらざるに反し、掃除坊主の威勢は愈々高くなり、その後の掃除坊主は肩身廣く振舞つた。そして衆人も「掃除坊主出かした出かした」と褒めそやすものだから、有頂天になつて日々、得々然としてゐたのであつた。

#### 4 重成の眞勇に驚く

然し重成の眞の力を現はすべき秋は來た。大阪冬の陣がそれである。時に重成はまだ僅かに二十前後、それに前に述べたやうな並大抵の武士にも及ばぬ立派な働をして敵も味方もその目覺しい武者振には驚き入つたのであつた。

やがて講和が成り、重成誓書取交しの使節となり、單身敵將の中に行き、更に臆する所なく禮儀の取亂した所もなく、血判の鮮かでないのを家康にたゞして再び之を明らかにし、その使命を全うした勇氣な振舞は實に見あげたものであつた。家康程の老將軍も重成の一絲亂れぬ振舞に唯見とれてゐた。重成が使を果して座を立つても家康は自ら座を立たず、重成の一舉一動に心から見とれてやがてその姿の見えなくなつた時、ホツと大息をついて「あゝ立派な武士、若年ながら實に見あげたものだ。」と心から褒めちぎつた。

大阪城内でもその一分仔什を聞いて、その膽勇に今更の如くに驚入つたといふことである。掃除坊主を赦したことから、やれ臆病者だの腰抜けだの、卑怯者の意氣地なしのと罵り笑つた人々もはじめその眞の勇氣に驚いたことであつたらう。ほんとうに勇氣のある人は必ず堪へ忍ぶ心を持つてゐる。事毎に争ひ怒るは決して眞の勇氣のある所以ではない。

### 乙 堪忍に對する訓辭

#### 1 重成の例話考察

##### 主なる發問

- (1) 重成がまだ十二三歳の頃掃除坊主と戯れた時、掃除坊主は重成にどうしましたか。
- (2) その時重成はどうしましたか。
- (3) 重成はなぜこの時掃除坊主を相手にせなかつたのですか。



- (4) この時重成は心の中でも少しも怒らなかつたのでせうか。
- (5) 重成のえらい所はどこにありますか。
- 等の發問を試みて兒童に答へしめ、以て、教師は之を或は訂正し補説して、心中にはもえるやうな憤怒の情が一時に起りながらも、高が掃除坊主風情を相手にして事をかまへる時ではないと、心中の怒を抑えた、この内面的過程を十分に味はしめ、理會せしめる。そして重成のえらい所はどこまでも、心中に起つた憤怒の情を自らの意志の力でもつて抑制したといふ所に存するといふ意味を理會せしむることが大切である。

## 2 格言の取扱

右の發問に對する兒童の答辯を補説し、之に引續いて格言の取扱に入る。

重成とても木でもなければ石でもない。やつぱり同じ人間であるからには、人から、別けて身分の低い掃除坊主風情に罵倒されるれば、眞赤に怒るのも無理ではない。然し、その所を勇氣を出して我慢をした所に重成のえらい所がある。眞の勇者としての重成の面目がある。格言に

「ナラヌ堪忍スルガ堪忍」といふのがある。なる堪忍は誰でもする。然し、ならぬ堪忍するのが誠の堪忍である。ならぬ所を我慢する所に堪忍がある。重成の如きはこのならぬ所を我慢したのである。我々もこのならぬ所を我慢して堪忍するやうにせねばならぬ。そこにほんとの堪忍がある。

「だが吾々は一寸のことに怒り易いものだ。どうです皆さんも一寸のことで怒つて争ひなどした事がありはしませんか」——一々答辯させる。そして之について一々の批判を加へてやる——

## 3 訓 戒

然し、皆さんとても怒つたり争つたりした後からはすぐ「あゝあんなことをいつて怒らねばよかつた」とか、又「どうして自分はあるに怒つたのか知ら」など、後悔することがあるに違ひない。昔から「短氣は損氣」といつて、短氣を出す程馬鹿けたことはないと戒めて居りますが實にその通りで短氣を出して怒る程つまらぬことはない。

字がうまく書けないからといつては紙を破り、筆を投げたりする。こんな馬鹿けたことは又とはあるまい。お友達が一寸氣に食はぬことでも言つたりするともう眞赤に怒つて争をはじめる。之程又つまらぬこともない。いつもく事毎に腹を立て、争つたりしてゐるのでは、世の中の人々は後にはちつとも相手にもして呉れなくなり、常に馬鹿にせられてしまふやうにさへなつて来る。それでは世の中の人々のおつき合も出来ず互に仲よく交つて面白く遊ぶことも勉強をして行くことも出来なくなる。それではつまらぬ。

大體、怒り易い人、腹を立て易い人は、氣の弱い人である。ほんとの勇氣のない人である。氣の強い人、ほんとの勇氣のある人は、心の中にはどんなに怒つても之を強い心で抑へつけることが出来る。之がほんとの勇者である。私達はどこまでもこんな強い人、眞の勇者になるやうにならねばならぬ。どこまでも、ならぬ堪忍の出来る人となりたものである。

重成はいざとなればどんな大敵でも一人で引受ける程の勇者である。どんな人の面前でもおそれず言ふべきことは断じて言ふ程の勇者である。が、何にもならぬ、つまらぬ事に眞赤に腹を立てるやうなことは決してせなかつた。之こそほんとの勇者である。何と考へても重成はえらい、こんな人になりたいものである。



## 第十四 物事にあわてるな

## 一 目的及び教材観

ゼームスが書いた心理学の著書の中の習慣論の中に「人は習慣の束である」といふ一句がある。誠に至言であつて吾々日常の生活は殆ど習慣によつて遂げられて行つてゐるものであると思はれる。朝起きることから顔を洗ふこと、食事をすること歩むこと、一として習慣にあらざるものはない。それで、吾々の生活中には眞に新しい生活の仕方といふものは極々稀なことである。然し、それは稀であるといふことであつて、決して絶無であるといふことではない。一生の中にはどんな急迫した場合に遭遇せんとも限らない。今に大火災に見舞はれ、大地震が突發せんとも限らない。かゝる急迫した場合は餘りにその事件が日常の生活からかけはなれ、しかも、非常の大事事件であるといふことから多くは狼狽度を失ひ思はざる失敗を招き、取りかへしのつかぬことを出来せしむことが少くない、かゝる場合は、決して一生中さう多いことではなく、又時によるとさうした不幸なる危急の場合に遭遇せぬ人もあるかも知れないが、たまくさうしたことに遭遇するとしても、それは、たまく遭遇することであり乍らも一生の中にとつて頗る大事事件大同題である場合が多い。そのために、たまくの事件ながら、その處置を誤ると否とはその人の一生に對して重大な影響關係を及ぼすことが少くない。されば、かゝる場合には特に心を落付けて深き思慮をめぐらし沈着、しかも敏捷に事を處して誤らないやうにせねばならぬ。

然し、それは決して非常有事の限りに限らない。日頃日常の生活に於ても、よく事を處するに沈着を旨としその處置をあやまらざるやう心がくべきであつて、さうした日頃の修養が又非常時に際しても沈着事を誤らざる事にもなるのであると思はれる。

本課は修身書教師用書に「如何なる場合にも心を落ちつけて事を爲し決してあわてざるやう心掛けしむるを以て本課の目的とす」とある通り、事を處するに沈着決して狼狽事を誤るやうな事のないやうに説き聞かせ、その修養に心がけしむるのが目的であつて人生活上大事なことである。特に兒童は思慮を缺ぎ輕燥よく事を誤るものであるから特にこの點について注意を要し、別けて、個性的にさうした輕舉事を誤るやうなものもあるからかうした兒童に對しては日頃一層注意をして教養することが大切であらう。

## 二 教材系統

尋六、沈勇。

## 三 指導要項

甲 毛利吉就夫人の例話

1 毛利吉就夫人の略傳

2 吉就夫人の沈着

イ 或年火災起り屋敷危険に頼す

第十四 物事にあわてるな